

ひねくれ凡夫ワンサ
マー

ユータボウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界最強の姉を持つ平凡な少年、織斑一夏

ひよんなことからうっかりISを動かしてしまった彼は強制的にIS学園へと入学させられてしまう

そこで彼を待っていたのは……

ワンサマーから謎の才能という名の主人公補正を少しばかり抜き取り、ついでのダメージな過去をぶちこんで性格を変えてみた作品です

目次

1話	ワンサマー、入学する	1
2話	ワンサマー、再会する	12
3話	ワンサマー、思案する	28
4話	ワンサマー、備える	44
5話	ワンサマー、腹を割る	58
6話	ワンサマー、挑む	72
7話	ワンサマー、嫌気が差す	90
8話	ワンサマー、頼る	108
9話	ワンサマー、再会する②	129
10話	ワンサマー、思い知らされる	150
11話	ワンサマー、飛び出す	171

12話	ワンサマー、腕を振るう	186
13話	ワンサマー、疑う	198
13話	閑話	208

1話 ワンサマー、入学する

インフイニット・ストラトス、通称 I S

大天才篠ノ之束博士が生み出した、宇宙空間での活動を想定したマルチフォーム・スーツ。その性能は既存の兵器を軽く凌駕しており、ついでに『白騎士事件』なんていうぶっ飛んだ出来事のせいで、本来の目的とは全く別の使われ方をされることとなった憐れな存在である

I Sには特徴が二つある。一つは上で述べたように既存の兵器を軽く凌駕する性能をしていること。そしてもう一つが女性にしか扱えない、ということである。こちらは特徴というよりも欠陥といった方がいいかもしれないが……

これらの要素を持つ I Sは世の中にある風潮を作り出した。それが俗に言う女尊男卑と呼ばれる思想だ

女は I Sを扱える。男は I Sを扱えない。ならば I Sを扱える女は男より優れた存在である。こんな感じの思想だ

まるで小学生が考えたような頭の悪い発想である。しかしこんなものが世の中において当たり前のように受け入れられているのだから、この世界も存外に腐ってしまっ

いるらしい。おかげで俺を含めた男連中は肩身の狭い思いをして生きていかなければならなくなつた。女性有利の世の中では既に数多くの男が既にくだらない理由や冤罪でブタ箱にぶちこまれていたりする

まあこういつた話はまた次の機会にでもしよう。今はともかくISが女にしか動かせないという事実を知つておいて欲しがつたのだ

IS操縦者育成特殊国立高等学校、通称IS学園

ISが女にしか動かせないという欠陥上、通う生徒は当然皆女の子であるこの学園に
……

俺、織斑一夏は行かねばならなくなつていた



「(ははっ……マジ笑えねえ……)」

見渡す限り女子女子女子。女の花園たるIS学園へ強制的にぶちこまれた俺だが、初日が始まる前にして既にグロッキーな状態に陥っていた。苦し紛れに勝手に人の進路を決めやがった老害共を内心で罵倒しまくる

まず背中に突き刺さる視線が辛い。中学時代にも訳あつてかなり目立っていた俺だが、流石に今の状況は中学時代とは別の意味で結構酷いものだ。わざわざ別のクラスからも見に来るなんてお前らどんだけ暇なんだよ？この視線が質量を持つていたなら確実に全身が穴だらけになっていることだろう。いや、真の英雄は目で殺すのだ。質より量、俺だつてこれだけ見つめられれば殺されてもおかしくないんじゃないか？

極めつけはこの席だ。教卓が一番近い場所、つまり教室の真ん中の列の一番前なのだ。この見てくださいと言わんばかりの配置を考えた奴を、一発殴りたくてしようがない。誰が好き好んで動物園のパンダにならなくちゃならんのだ

他にも理性をゴリゴリ削る女子特有の甘ったるい匂いやら、十中八九俺のことが話題のヒソヒソ話やらがあるが割愛させてもらう。これ以上考えれば教室から逃げ出しかつてたまらなくなつてしまうだろう

それもこれも本来の受験先であつた藍越学園とこのIS学園が同じ会場で試験していたのが悪い。二つの学校が試験をやつてるのに案内板の一つも用意しなかつた責任者も悪い。俺みたいな男がいても摘まみ出さなかつた無能な試験官も悪い。仮にも一機で国を相手に出来るようなISを適当な部屋に無防備にも放置していた連中も悪い。これらの要素が合わさつて生み出された被害者が俺なのだ。つまり俺は悪くねえ、悪いのは全部向こうなんだこんちくしょう

「おはようございます、皆さん」

そんな時教室に天の声が響いた。教室に先生が入ってきたのである。これに廊下にした生徒は蜘蛛の子を散らすように戻っていき、更にクラスメイトも席に戻ったことで突き刺さっていた視線が幾分か減った。ありがとう、名も知らぬ先生！

「えっと、このクラスの副担任をさせて頂く山田真耶と申します。一年間、宜しくお願
いします」

「お願いします」

……

……

……あれ？

待て待て、なんで誰も何も言わないんだよう？先生の挨拶だけ、返事くらいしろよ。失礼だろうが。ついでに俺だけ返事したのが変みたいじゃねえか。なんだか気恥ずかしくなってきた汗が出てきた

「お、織斑君、ありがとうございます。そ、それじゃあ自己紹介でもしましょうか？」
ほれ見ろ先生が涙目になってんじやねえか……って、この先生、俺が実技試験やった時の相手の先生か！緑の短髪に童顔、眼鏡。そして最後に自己主張の激しい二つの果実。ああ、見間違える筈がなかった。覚え方が大変失礼なのは思春期真っ只中の15歳

なんだし見逃してくれ。ISスーツって凄いなぞ、身体のラインがすっげえはつきり分かるんだから

「あの、織斑君？次は織斑君の順番なんだけど、その、自己紹介してもらってもいいかな？ごめんね？」

「ん、ああすみません」

いかんいかん、どうやらもう俺の番へと回ってきたらしい。まあ『あ』から始まれば『お』なんてすぐだからな。中学時代だつて出席番号は常に一桁だったし。あと山田先生、そろそろ涙目から卒業してくださいよ……

ガタツと席から立ち上がつて振り返る。当然、クラスメイトは全員女子だ。しかも何気に全員ルックスのレベルが高い。これを親友の五反田弾が見たら狂喜乱舞してその辺りを転げ回つていそうなものだが、生憎俺は女という存在が好きではないのでただ辛みだけである。一先ず当たり障りのない程度の自己紹介にして、さっさと座らせてもらおう

「え〜……と、織斑一夏です。ご存知の通り、世界唯一の男性操縦者なんて言われてますが、はつきり言つてただのトーシローなんで過度な期待はご遠慮ください。好きなことは漫画読んだりゲームしたり……ダチと駄弁つたりすることです。一年間宜しくお願ひしま〜す」

速すぎず、それでいて遅すぎず、すらすらつと自己紹介をして、最後には軽く頭を下げて席に座る。一応及第点つてとこじやないですかね、100点満点なら65点くらいの自己紹介だ。これで俺のことをそんなに面白くない奴と思って興味をなくしてくれたなら幸いだ

「ほう、てつきり随分参っているだろうと思っていたが存外に元気じゃないか」

成し遂げたぜ、と謎の達成感に浸っていた頭が冷たい水をぶっ掛けられたような感覚に陥った。恐る恐る声のした扉の方へ視線を動かすと案の定、そこには予想通りであり、同時にその予想が最も当たって欲しくない人物が黒いスーツ姿で、かつ出席簿を片手に不敵な笑みを浮かべて佇んでいた

まるで狼を思わせる鋭い瞳に艶やかな黒髪。すらりと伸びた手足に身内目線から見ても整っているプロポーション。嘗ては『ブリュンヒルデ』などと呼ばれてテレビやら雑誌やらに引つ張りだことされていたこの人の名前は……織斑千冬

何を隠そう、マイシスターである。妹じゃないよ、姉だよ

「ち……千冬姉!?! って痛っ!?!」

「織斑先生と呼べ馬鹿者」

光より速く振り下ろされた出席簿が見事に俺の脳天を捉える。そして一瞬遅れてやってくる鈍痛、これ絶対出席簿が出せる痛みじゃねえよ。「うぐぐぐ……」と呻きなが

ら俺は堪らず机に突つ伏した

「あ、織斑先生。会議はもう済んだんですか？」

「ああ。SHRを任せてしまつてすまなかつたな、山田先生」

そんな俺など無視して千冬姉は山田先生へ声を掛けた。にしても織斑先生、ねえ。ここ一年か二年、家に帰つてくる回数が激減したから何やつてんだと思つたら、まさかこんなところで働いてたなんてなあ。なんで俺に教えてくれなかつたのかねえ？人に言えないような仕事してんじゃねえのかと不安だつたんだぞ。隠すような疚しい仕事でもあるまいし……

「諸君、このクラスの担任を任せられた織斑千冬だ。君達新人をこの一年間で使い物となる操縦者に育て上げるのが、我々教師の仕事だ。我々の言うことをよく聞き、そしてよく理解しろ。出来ない者には出来るようになるまで指導する。逆らうのは構わんが言うことは聞け、いいな？」

「きやああああああ!!千冬様、本物の千冬様よ!!」

「私、お姉様のファンで北九州から来たんですく!!」

「私、お姉様のためなら死ぬます!」

我が姉の教師として如何なものかと思う台詞に、クラス中の女子が喚いて騒ぎ始める。確かに千冬姉は世界でも知らない者はいない程の有名人だし、そんな人を生で見る

ことが出来て興奮するのも分かる。ただ、もう少し静かに出来ないものか、今はSHRの時間なんだぞ。女子の叫び声特有の高音は頭に響くのだ。さつき出席簿で殴られた衝撃もあつて頭痛が一層酷くなった気がする

それにしても、これだけ皆が騒いでいると逆に騒いでいない生徒が目立つてもんだ。窓際の座るポニーテールの子とか、後ろの方の金髪ロールの子とか、のほほんとした雰囲気の子とか、ひっそりと座っている銀髪の子とか。てか、オッドアイってやつはゲームや漫画の中だけの存在だと思つてたんだがな……生で初めて見たぜ

「……毎年毎年、よくもまあこれだけの馬鹿者が集まるものだ、感心させられるな。あれか、私の受け持つクラスには馬鹿者が集中させられているのか？」

毎年毎年つて、アンタ多分教師生活二年目でしょうが。二年前までドイツにいたこと知つてんだからな？だからべしべし頭を叩くのは止めてください。頭痛が加速するか
ら

「きやあああああ！お姉様、もっと叱つて罵つて〜！」

「でも時には優しくして〜！」

「そしてつけあがらないように躡して〜！」

「……織斑先生、保健室に行っていていいですか？頭が頭痛で痛いです」

「気持ちには分からんでもないが入学初日の最初から保健室に行くなど却下だ。大人しくしている」

「おうふ……」

切なる望みが一瞬で却下された、泣きたい。ついでに、今の会話で勘のいい生徒が俺と千冬姉の関係に気付いたようだ

「え……織斑君って……千冬様の弟？」

「じゃあ男でISが動かせるのにもそれが関係して……？」
「いいなく代わってほしいなく」

……代わってほしい？

代わってほしいだと？

——アンタなんていたから、千冬様が優勝出来なかったのよ！

——アンタのせいだ！

——千冬様の優勝を邪魔して！いなくなっちゃえばいいのよ！

「……………」

手から感じる痛みと口に広がった血の味で俺は我に返った。そして同時に安堵する。痛みは誰かを殴ったからじゃない、自分で強く握りすぎたせいだ。口に広がった血の味は自分の唇を噛んだからだ

俺は、誰にも手を上げちゃいない。だから大丈夫だ、落ち着け

「……………ああ、クソツタレが」

最低な記憶が蘇ったせいで溜め息と共に天を仰げば、ふと中学時代の友人の顔が頭に浮かんだ。三年間を一緒に過ごした最高のダチ、だが今そんな二人はここにはいない。

千冬姉は身内だが教師という職業上中立だろうし、味方なんて皆無のようだ

弾、お前は女子高は理想郷だつて言つてたがな。ここはただの動物園だぜ。お前や俺が望んでいたような淑女なんざ誰もいねえよ

鈴、やっぱりお前は最高だったよ。世界中どこ探したつて、きっとお前以上の子は見当たらねえ。だから毎日豚豚を食べさせてくれ

お先真つ暗なI S学園での生活は、こんな形で始まるのだった

2話 ワンサマー、再会する

IS学園入学初日、SHRが終われば学園案内のオリエンテーションが始まる……なんてことはなく、ごく普通に授業が始まった。教科はIS基礎理論、担当の先生は副担任の山田先生だ。このIS学園では基本的に座学は担任、及び副担任によって行われるようである。一人で複数ある教科を教えられるレベルまでマスターしておかなくてはならず、かつそれを生徒達が理解出来るように教えなければならないとは、教師という職業は想像以上に大変かつ責任のある仕事らしい

因みに山田先生の授業だったが大変分かりやすかった。電話帳並みに分厚い参考書を渡された時はまだ混乱していたこともあって、全力でゴミ箱へ突っ込みたくなったりもしたが、今になってあれを繰り返し読んでおいて本当に良かったと思う。何せこのIS学園の授業はかなり専門的なもので、入学以前から事前学習を行っていた他の女子生徒ならともかく、俺のようなトローシローが準備もせずについていける程甘いものではないからだ

……でもやっぱり難しいものは難しいので、放課後になったら個人的に聞きに行くことにしよう。これまで学校で習っていたようなことが欠片も役に立たないのは予想以

上にキツイ

「はあく……しんど……」

思いつきり脱力して背凭れに体を預ける。チラツと廊下が見えたのだが大量の生徒が俺見たさに集まっついていて、押し合い圧し合いの凄まじい光景が広がっていた。あらためてよく見るとリボンの色から上級生らしき生徒の姿もある。短い休み時間を使ってまで唯一の男性操縦者が見たいのかねえ……俺には到底理解出来そうにないな

そんな時、一人の生徒が俺の方へと歩いてきたことに気付いた。凜とした雰囲気を纏ったポニーテールの生徒、千冬姉が現れた時に騒いでいなかった数少ないクラスメイトの一人だった。とうとう直接話し掛けてくるような生徒が現れたかと、内心で溜め息をつく

俺は女が好きではない。女の中でも女尊男卑の思想に染まった連中は男を顎で使うことに抵抗感も罪悪感も抱かない。自分のすること全てが許させると思っているのだ。そんなふざけた連中が、俺は大嫌いだ

さて、俺がどう対応してやろうかと考えている間に、件の彼女は周りの視線を集めながらも俺の方へとやって来ていた。そしてちょうど机の前で足を止め……不意に固

まっていた表情を緩めた

「久しぶりだな、一夏」

……

……

……ストップ、誰だこの子？

いやいやいやいや待って待って待って、一旦落ち着こう。え、この子今一夏つつつたよな。何、知り合い？知り合いなの？俺の？いやいや、俺の知り合いにこんなポニーテールでスタイルのいい大和撫子はいねえ。いるのは八重歯が最高にキュートでミニマムなツインテールの中華娘だけだ。鈴のやつ、元気にしてつか……と違う違う。鈴は関係ない、今は目の前のこの子だよ。自己紹介も結局俺で終わったせいか、この子まで回っていないので名前も分からない。あれか、初対面なのに馴れ馴れしく接することで俺の勘違いを誘うタイプか

……ごめん、マジで誰？

「えつと……どちら様ですか？」

「なっ!?わ、私だ!覚えていないのか?」

申し訳ないけど覚えてねえよ

「いや……その……さーせん」

「つく!箒、篠ノ之箒だ!小学校の四年生まで一緒にいたし、一緒に剣道もしただろう? 思い出してくれ一夏」

ふむ、篠ノ之さん家の箒さんか。小学校の四年生まで同じ小学校……おまけに一緒に剣道……

つて、あ”あ!?”篠ノ之箒だと!?

「ええ!?もしかしてほーきちちゃん!?東さんの妹でポニーテールな侍ガールの、あのほーきちちゃん!」

「そ、そうだ。そのほーきちちゃんだ。久しぶりだな、一夏」

うわあ……ちよつと待って。確かに言われてみればうる覚えな面影があるような気はするが……こんなに綺麗な子だったっけか……?

篠ノ之箒。俺が小学校一年生の頃に出会った女の子で、当時千冬姉と俺が通っていた剣道場の娘さん、そしてかの天才篠ノ之東博士の妹である。小学生らしからぬ落ち着き振りと男勝りな性格からよくいじめっ子達にからかわれており、その現場に俺が乱入したのが仲良くなり始めた切っ掛けだ。そうそう、だんだん思い出してきたぞ

因みに、乱入したのはいいが当時からどうしようもなく弱かった俺はいじめっ子相手にすぐノックアウトされてしまった。ほーきちちゃんは自力でいじめっ子を追い返せていたのに、我ながら情けなさすぎて今思い出しても恥ずかしい

まあ乱入する勇氣だけは認めてもらえて仲良くなった俺達は、彼女が四年生の時にとある事情で転校してしまうまでは竹刀を交えたり、よく一緒に遊んだりしたものだ。小学生の頃なんて性別の違いをそこまで意識したりするような時期でもなく、単なる友達くらいのつもりで一緒にいたのだが……まさかそんな彼女がこんな美少女にジョブチェンジしていたとは。そう言えばいつかの新聞に名前が載っていたような気

もする……

「ははは……すまん、全然分からなかった」

「……まあ何せ六年ぶりの再会だからな。すぐに分からないのも無理はないか」
そう言つてほーきちちゃんは苦笑する

「いや本当に。ほーきちちゃん、いつの間にそんな美人になったのさ？ 流石にそれは予想外だつて」

「つ……ふん、そういうお前は随分と変わったな。私の知るお前はそこまで口が達者な男ではなかったぞ。……何にせよ、女相手にあまりそんな言葉は使うなよ？ 勘違いさせたらどう責任をとるつもりだ」

「心配いらねえよ。俺だつて言う相手くらい弁えるし、勘違いするような奴がいるならそいつは頭ん中がお花畑になつてる奴だけだ」

「ふふつ、まあそうだな」

ああ、他愛ない雑談がここまで心地いいのは生まれて初めてかもしれない。荒んでいた心が浄化されていくようだ。ほーきちちゃんマジありがとう。女子しかいない学園生活とか完全にボツチ待ったなしのお先真つ暗だったが、ほーきちちゃんという希望がいてくれるなら結構いけるんじゃないかね、的な気持ちになれそうだわ

「一夏、折角この学園で再会出来たのだ、これからも良ければ仲良くしてもらいたい」

「勿論。ここちこそ男一人で肩身の狭い思いしてたところなんだ、こうしてなんてことない話が出る人はほーきちちゃんだけだし、是非友達になつてくださいな」

お互いに握手を交わしてあらためて友達になる。その後、休み時間のギリギリまで俺達は雑談に耽つて、少し前まで鬱陶しかった周りの視線もこの時間の内だけは忘れることが出来た



「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によつて罰せられ——」

流れるように教科書を音読する山田先生の声を聞きながら、参考書と教科書、そしてノートの三種の神器を駆使して授業を受ける。ただ眺めているだけではこの専門用語の樹海を乗り切ることとは不可能、故にノートにペンを走らせてメモをとり、いまいち理解出来なかつたところはチェックを入れて後で考える。先生に頼るのはその次だ、初めから誰かを頼りにしては成長など出来やしない。正直、今の瞬間が人生の中で一番勉強している時間だと思う

「えつと……織斑君、ここままで分からないところはありますか？」

ふと山田先生から声が掛かる。今までISなんぞ無縁だった俺がちやんと授業についてきているか気になったのだろう。優しい先生である、中学校の糞教師共とは大違いだ

「大丈夫です。先生の授業は分かりやすいので助かります」

「そ、そうですか！良かったです〜……」

それからは特に大したことも起こらないまま授業は終了した。中学時代と比べて一回一回の授業の質が高い為、集中力をずつと持続させていなければならぬし、オアシスである休み時間になると生徒達からじろじろ見られる。気が休まる暇が全くないな、畜生

「大丈夫か、一夏……つと、聞くまでもなかったな」

机に突っ伏した俺に声を掛けてくれるのは現状このクラスで唯一の友達、ほーきちゃん。体勢的に彼女を見上げる形となるのだが、その大きな二つの山で顔がよく見えないぜ

「つべー、マジつべーわ。IS学園って目茶苦茶大変じゃねえか……参考書捨てなくて良かった」

「今少し聞き捨てならないことが聞こえたような気がするが……とりあえず頑張れー夏」

激励の言葉が胸に染みる。やっぱ持つべきものは友だなど実感するが、しかしよく考えてみると俺ってかなり友達が少ないんじゃないのか？小学生の頃はほーきちゃんや鈴しかいなかったし、中学生になってからも親友だと胸を張れるような奴は弾がプラスされただけだ。うわっ、私の友人……いなさすぎ……？いかんいかん、目頭が熱くなってきた

「少し宜しくて……なんで泣いていますの？」

「自分の交遊関係のなさを自覚しただけさ……」

うわ情けな。カッコつけて言ってみただけど情けなさすぎて笑えねえわ。ほら、今話し掛けてきた金髪ロールの女の子も白い目で見て……誰だこの人!?

「……えっと、どなたですか？」

「ま、まあ!?なんですのその御返事!私に話し掛けられること自体光栄なことなのですから、もっとそれ相應の態度というものがあるのではなくて?」

「……ちっつ、そうっすね」

「なんですの、その態度は!」

金髪ロールはわざとらしくでかい声を上げた。この傲慢な態度に今の口振り、自分から話し掛けておいて俺にキレる一連の行動、間違いなくこいつは女尊男卑主義者だ。このような輩は基本的に会話が成立しないので無視するのが最善なのだが……どうやら

彼女は中でも特にしつこい部類に入るようだった

「俺はあんたが誰か知らねえし、んなこと言われたってなあ……」

「知らない？ イギリスの代表候補生にして実技試験首席の、このセシリア・オルコットを知らないとおっしゃいますの!？」

今度はポーズまで決めて驚きを露にする金髪ロール、もといセシリア・オルコット。代表候補生っていうとその文字の通り、国家代表の候補のことだ。国家代表がその国で一番強いのなら、代表候補生はそこに次ぐくらいの実力がある。とにかくISに関してエリートといっても強ち間違いではない存在なのだ。そんな肩書きまで持つていて実技試験も首席だと言っているのだからISの腕は確かなのだろう。尤も、性格の方は最悪の一言に尽きるが

「生憎、最低限の知識を頭にぶちこむので精一杯だったんだ。それで？ イギリスの代表候補生にして実技試験首席のセシリア・オルコットさんが一体どのような用件で？」

「唯一の男性操縦者と聞いて一体どのような方なのかと思つていましたが……これは期待外れもいいところすわ。あなた、よくこの学園に入れましたわね」

「入れたんじゃねえ、入らざるを得なかつたんだよ。期待外れなら、そりゃ悪かつた。あゝあ、イギリスの代表候補生にして実技試験首席のセシリア・オルコットさんのお眼鏡に敵わなくて残念だな」

「っー私のことを馬鹿にして！」

実際俺に期待されても困るんだよ。男性操縦者だつってもISを動かせるってだけで、それ以外はただのトローシローなんだから。自己紹介の時にも言った筈だぜ？実技試験の時だってISの動かし方もよく分からず、ただなんとなくで前進させていたところに山田先生が前方から凄まじい速度で突っ込んできて、そのまま仲良く頭を強く打ち付けて気絶したくらいなのだ。因みにこれは実技試験が始まってから約十秒間くらいの出来事である

そしてちやうどその時チャイムが鳴り響き、セシリア・オルコツトは「また来ますわ！逃げないことね！」と捨て台詞を残して席へと戻っていった。別に来なくていい、というか来るなめんどくさい。で、それとほとんど同時に千冬姉が教科書片手に入ってきた。次の授業をするのは山田先生ではなく千冬姉らしい。姉の授業ということで少しだけわくわくしてきた

「席につけ、授業を始めるぞ。この時間では実践で使用する各種装備の特性について説明する。ノートに書くなどして聞き漏らしのないように……つと、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めなくてはな」

不意に聞き慣れない単語が聞こえてきて首を傾げた。クラス対抗戦？代表者？一体なんだそれは？

「代表者とはこのクラスの代表、つまりクラス長のことを指している。クラス対抗戦は各クラスの代表が実際にISを使って試合をし、各クラスの実力推移を測るものだ。クラス代表者には今回行われるクラス対抗戦以外にも様々な仕事があり、一度決まれば余程特別なことでも起きない限り変更は認められない。一先ずはこんなところか、クラス代表者やクラス対抗戦について質問のある者はいるか？」

千冬姉の言葉に手を上げる者はいない。勿論、俺もだ

「ふむ、では代表者を決めるぞ。自薦他薦は問わん。我こそは、もしくはこいつこそ、と思う者がいれば手を上げて発言するように」

あ、これは推薦される流れだわ、間違いない。このクラスには世界唯一の男性操縦者なんていう絶好の生け贄があるのだ、クラス代表者^面を押し付けるには最適なんだろう。

畜生め

「はい！織斑君を推薦します！」

「私も！」

「私もです！」

案の定、あちこちから俺を推薦する声が上がりはじめ。トーシローだから過度な期待はやめてくれつつただだろうに……勘弁してくれっての。今日何度目かになる溜め息を溢す

「候補者は織斑一夏、他にはいないか？」

「織斑先生、辞退させていただきます」

「他薦された者に拒否権はない。お前は自分をわざわざ推薦した者の期待を裏切るつもりか？」

切なる願いがたった一言でばつさりとは切り捨てられる。期待なんて言うがそんな綺麗なもんでもなからうよ。大方、面白そうだからだとか、厄介事を任せられるからとかに違いねえって。決して声には出さないが内心で悪態をつく

結局、俺を推薦した生徒は二十人程まで増えていき、確実に断れない数にまで肥大した。支持率驚異の65%越えだ、全然嬉しくねえ。そしてこのままクラス代表者は俺に決定するかと思われたが……決定寸前にある意味で予想通りと言うべき人物が立ち上がった

「待つてください！納得いきませんわ！」

バアン！と机を叩いて勢いよく叫ぶ一人の生徒。先程まで俺と話していた金髪ロール、セシリア・オルコットだ

「そのような選出は認められません！大体男がクラス代表など恥さらしもいいところですよ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

なら自薦すりゃいいじゃん、とは言つてはいけない。きつとこいつは他薦されたかつたんだらう

「実力的に考えれば私がクラス代表となるのは必然です。それを物珍しいというだけの理由で極東の猿にされては困りますわ！私はわざわざイギリスからここまでＩＳ技術の修練に來ているのであつて、サーカスをするつもりなど毛頭ありません！」

……口は悪いが言っていることは正しいな。極東の猿つて部分は訂正願いたいが……

「宜しいですか？クラス代表にはこのクラスで最も強い者になるべきです！そしてそれはイギリスの代表候補生にして専用機持ちである、この私ですわ！」

再びバアン！と机を叩くセシリア・オルコット。その音で何人かの肩がビクツと跳ねる。あいつ、専用機なんて持つてたのか。なら実技試験で首席になれたのも合点がいくし、あのだこから來るのか分からない自信にも納得出来る

ＩＳを動かすにはＩＳコアと呼ばれる、心臓が必要だ。そしてそのＩＳコアは５００個にも満たない数しか作られておらず、製造方法もＩＳの生みの親である篠ノ之東博士しか知らない。そんな貴重なＩＳコアを一個人に使う専用機など、国家あるいは企業に所屬している余程優秀な者にしか与えられない。専用機持ちである、たつたそれだけでセシリア・オルコットが如何に優れたＩＳ乗りであるか想像するに難くないだらう

「大体、文化としても住んでいる人間としても後進的な島国で暮らすこと自体、私には耐え難い苦痛なのです！ですから——」

あ、流石にちよつとそれはまずい。今まで傍観していた、というか呆然となっていた生徒達が「何言つてんだこいつ」みたいな顔になり始め、山田先生が目を見開いて青くなつていく。あの千冬姉ですらよく見れば額に青筋が浮かんでおり鉄面皮を保とうとしていた

いくら代表候補生で専用機を持つていたとしても他国を貶めるような発言は認められていない。むしろ、なまじ発言力がある分、そんなことを言つてしまえば大変なことになるだろう。下手すりや国際問題だぞ。IS学園には世界中から生徒達が集まるが一番比率が多いのはやはり日本人だ。熱心な愛国者でなくとも自分の国を後進的な島国だとか、自分達のことを極東の猿呼ばわりされれば当然腹が立つし、面白くもない筈だ

そして極めつけは、それを言ったセシリア・オルコット自身が発言の意味を理解していないところだろう。誰だ、あんな奴を代表候補生に据えた馬鹿は

なんてことを考えていると、長かったセシリア・オルコットの演説も漸く終わつたらしい。しかしよくもまああれだけの言葉が出てくるもんだ、逆に感心する。見習いたいとは思わないが

「……………いいだろう、オルコットは自薦だな。他に自薦する者や他薦する者は？」

ええ……………千冬姉怖いよ、声低すぎだつて。今後ろの方から「ひいつ……………!?」つて聞こえたぞ。俺は馴れてるからいいとして他の生徒にはまずいから抑えてくれ

しかしこれでクラス代表の候補は俺とセシリア・オルコットの二人となった訳だが、これからどうするつもりなのだろう。中学校ではジャンケンか多数決か、はたまた女尊男卑の連中による理不尽な決定で決まっていたが……………

「……………なしか。ならば来週、織斑一夏とセシリア・オルコットによる試合を行い、勝者をクラス代表者とする。ここはIS学園だ、白黒つけるのならISでつけろ」

……………なるほど、ISを使つての試合か。片方は世界で唯一の男性操縦者、もう片方はイギリスの代表候補生、なんとも盛り上がりそうなカードじゃないか。俺が第三者だったならばが非でも見に行つていただろうが……………残念ながら俺は主催者側だ。精々足掻かせてもらおうとしよう

ざわめく声を背景にして俺は千冬姉以外に気付かれぬよう、一人小さく笑つた

3話 ワンサマー、思案する

「一夏、一体どうするつもりなんだ？」

「ん？」

昼休み、群がる生徒達の間を抜けて食堂へと向かう最中、ほーきちちゃんはそんなことを聞いてきた。言いたいことは十中八九、セシリア・オルコットとの試合のことだろう。「ん、ではない。相手は代表候補生なのだぞ。実力、経験、技術、機体の性能、どれを見てもお前より格上の相手だ。何かしらの対策をしなければ、恐らく勝負にもならんぞ？」

うん、至極真つ当な意見だ。彼女の言う通り、俺とセシリア・オルコットとは全てにおいて差がありすぎる。加えて試合までの時間も一週間しかなく、その差を埋めることはまず不可能だろう。そんなことは百も承知だ

「まあそうだろうな。でもほーきちちゃん、千冬姉の言っていたことをよく思い出してくれよ。あの人はなんて言ってた？」

「……？確か、一夏とセシリア・オルコットは試合を行い、その勝者をクラス代表者とする……だったか？」

彼女は考えるように上を向き、ゆっくりと思い出してくれた答えに俺は頷く。そう、千冬姉は俺とセシリア・オルコットが戦い、勝った方をクラス代表に言ったのだ。「一応さ、最初っから俺はこの試合負けるつもりなんだよ」

「……………どういう意味だ？」

「だって俺、クラス代表なんてやりたくねえもん」

勝った方がクラス代表となる。つまり負けの方はクラス代表にならないということである。誰でも分かる簡単な話だ。俺は他薦された身に過ぎず、本来ならば面倒事は真つ平ごめんな男である。わざわざ不利で、かつ勝つても特にメリツトのない試合において勝ちを狙うより、負けを前提として善戦することを目的とした方が良いに決まっているのだ

ほーきちゃん俺の言いたいことが伝わったのか、「……………そうか」とだけ呟いて何かを考えるような仕草をし始めた。そして不意に、さっきまでと変わらない真剣な表情のまま言った

「だが一夏、お前は『織斑千冬の弟』だ。それは学園のほとんどの者が知っている。もし無様に負けるようなことがあれば……………」

「ああ。この勝負、はつきり言つて勝ち負けはとつくに決まつてる。でも、だからこそ手は抜く訳にはいかねえ。俺は『織斑千冬の弟』として恥ずかしくない勝負にしない

ちやいけねえから……」

俺、織斑一夏にとつて『織斑千冬の弟』という事実は呪いと同じだ。誰と会っても、どこへ行っても、その事実は俺の背後にべったりとついてきてしまう。そして、それを見た連中は口々にこう言うのだ、あの人の弟なら……と。そして俺に無理難題や面倒事を全て押し付けてくるのだ

今までならそんな無茶に応える義務はなかった。だが今回は千冬姉が世界で頂点に立ったIS絡みである。『織斑千冬の弟』として、あの人の名に相応しい戦いをしなければ間違いなく失望され、最悪千冬姉にも迷惑が及ぶだろう。それだけは嫌だ

「……存外に難しいかな、こりゃ」

後ろ向きな思考を振り払うように頭を掻く。いつそのこと、セシリア・オルコットがぐうの音も出ないほど強かったなら気が楽なのだが、恐らくあいつは油断しているのだ。トーシローの俺に負ける訳がないと慢心しているせいで、本番では本気で来ないだろう。そこが狙い目つちや狙い目なんだろうが俺は別に勝ちたい訳じゃねえし……

そんな事を考えながら歩くこと数分、漸く食堂へと辿り着いたのだが……とにかく凄いの一言に尽きた。数多くの生徒達が利用出来るようかなりの広さを誇っており、世界中から集まった生徒達のニーズに応えるべくあらゆるカテゴリーの料理が提供されている。加えてあちこちから上がる料理を絶賛する生徒達の声から、その味も相当なもの

であることが想像出来た。確かにこの食堂に充満する匂いはどれも食欲をそそるもので、空いた腹が食べ物求めて音を立てる

「おお………こいつはすげえな………」

「ああ………予想以上だ………」

あの少し厳しそうな表情がデフォルトのほーきちちゃんですら感動のあまり微笑を浮かべている。凄いぜ食堂。そのまま券売機で日替わりランチを二つ購入し恰幅のいいおばちゃんに渡す。それにしてもこの食堂、料理の値段が大変リーズナブルであり学生の身からすれば大変助かる。赤字とかになっていないのかは気になるころではあるが

「はい、日替わりランチ二つね。あんたが例の男の子かい？しつかり食べて頑張りがよ」

「おつ、ありがとうございます！」

「ありがとうございます」

渡された日替わりランチにはおばちゃんの粋な計らいのお陰か、ほーきちちゃんのものよりカツが一つ多くご飯も余分に盛られていた。育ち盛りの男子高校生には実にありがたい限りだ

さて、旨そうな昼飯は確保出来たのだがここで問題が一つ、どこの席に座ろうかとい

うことである。ほーきちちゃんと二人で一つのテーブルを使えたらいいのだが今は食堂が一番賑わう時間帯であり、流石にそんな贅沢な使い方はさせてもらえそうになかったならば他の生徒にシェアさせてもらうしかないのだが、さつきから「私のところに来て」と言わんばかりの視線が突き刺さっており、どこへ行つたとしても一騒ぎありそうな空気なのである。せつかくの昼飯だから静かにはいかなくともものんびり自分のペースで食べたい。間違つても質問攻めにされてこの昼飯を味わえねえなんてことはごめんだ

「えつと……どうしようか、ほーきちちゃん」

「むう……これは確かに……」

そんな時、食堂の隅でひっそりとパンをかじる銀髪が目飛び込んだ。ほーきちちゃんもそれに気付いたのかゆっくりと口を開く

「……一夏、頼むのか?」

「そうだな。クラスメイト同士親睦を深めるつても悪くない」

だつて友達少ないし、と付け足せば苦笑された。そう、あの銀髪の生徒はクラスメイトだ。他の生徒と違って俺に対して特に反応せず、千冬姉が来た時にも騒いでいなかった子だからよく覚えている

……いや、確かにそれも理由の一つだが俺があの子を覚えていたのはもう一つ理由が

ある。彼女の、あの目だ

「なあ、使わせてもらつていいか？」

「……好きにしろ」

その深紅と黄金のオッドアイで俺達を一瞥し、彼女はポツリと一言だけ呟いた。許可してもらえるか拒否されるかは半々つてとこだったが、一先ずはこれでいい。俺とほーきちゃんは礼を言つてから席につく。周りの生徒が煩いのは知らん

「知つてるとは思うけど、俺は織斑一夏だ。同じクラスだろ？宜しくな」

「篠ノ之箒だ。宜しく頼む」

さて、反応してくれるか……

「……ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

今にも消えそうな、それでいて名前だけの素っ気ない返事。相手次第では不快に思う者もいるかもしれない。だが俺達にはそれで良かった。ほーきちゃんと目が合い、にっくと笑う

俺はあらためてこのラウラ・ボーデヴィツヒという生徒を見る。紅と金のオッドアイには微かな光しか灯つておらず、綺麗な銀髪も長かったり短かったりとちぐはぐだ。顔色だつてお世辞にもいいとは言えない。ここに来る以前に何かあったのは明らかだが、それを聞くのはタブーだろう。人間、誰だつて聞かれたくないことくらいある。それを

分かっていてわざわざ聞くのは馬鹿だけだ

「さて……いただきます」

「いただきます」

ほーきちやんと二人で手を合わせ、お約束の言葉を言ってから箸を手取る。まずは手始めにお米から……うん、美味しい。続いて汁物、おかず等々、盆の上に並べられた料理に次々と手をつけていく。ああ、こりや皆挙つて食べたくなるのも分かるわ。料理の腕にはそれなりに自信があつたのだが素直に完敗だ

「もぐもぐ……ぐくんつ、ああ……美味しい、美味いわあ」

「あまりがつつくな。食事は逃げんぞ？」

そう言うほーきちやんだが既にランチは結構減っている。案外食いしん坊なのか？だがスタイルのよさからするに、余分な栄養は全部あの豊満な胸にいつているんだろ。鈴が聞けば殺意に満ちた目を向けそうな話だ

「んぐんぐ……ふう。いや正直ここを侮つてた。まさかこんな美味いもんが食えるとは思わなかつたわ。ボーデヴィツヒもそう思うだろ？」

「……別に味など気にせん。生きていけるだけの栄養と腹が満たせるか、私にはこれだけでいい」

俯いたまま彼女はゼリー飲料を飲み干し、パンの包装紙と共にビニール袋へ突っ込

む。そしてそのまま立ち上がって、今度は一瞥もせずどこかへ去って行った。残された俺達は暫し呆然となる

「……行つてしまつたな」

「……無理に会話振つたのは失敗だった。お節介が過ぎたわ」

「気を落とすな。クラスメイトなのだから共に食事をする機会くらい何度もある」

「そりやそうだけど、断られるんじゃないかね？」

「本当に断るつもりなら最初の時点で断つていただろう。そう悲観することもあるまい」

そう断言するほーきちちゃん。根拠なんてない筈なのだがやけに自信のある言い方がなんとも頼もしい。この子、絶対俺より男前だわ

正直、ボーデヴィツヒの様子は普通じゃない。生気のない目や疲れきつた表情、そして最後に言つた言葉等、果たして過去に何があつたのか、気にならないと言えば嘘になる。だが聞いたところで教えてくれはしないだろうし、聞くんて真似自体するつもりはない。残つた昼飯に手をつけながら、俺は次にどうやって彼女を誘うかを考えていた



「えっと、次はここなんですど……」

「あつはい、ここはですね——」

放課後、俺は授業中にとったノートを片手に山田先生によく分からなかった部分を聞きに行っていた。因みにほーきちゃんは剣道部を見に行けらしく、放課後になるとそちらの方へ行ってしまったので既に行かない

「と、いうことなんです。今ので大丈夫ですか？」

「あ、はい。ありがとうございます。とても分かりやすかったです」

そう言うと山田先生は照れてしまったらしく、少し顔を赤くしてはにかんだ。実際先生の説明は本当に分かりやすい。下手に教科書や参考書と睨め合いをして時間を浪費するより素直に聞きに行った方が余程いくらいだ。だからといって端から頼りにしすぎるのは禁物だが……

「あ、そうだ。織斑君、寮の部屋が決まったのでこれを渡しておきますね」

何か思い出したように山田先生は一枚の紙とキーを取り出した。紙には『1025』と数字が書いてあり、これが俺の部屋の番号であることは分かったが……俺の部屋は決まっていなかったんじゃないのか？

「あの、一週間は家から通えって話じゃなかったんですか？」

「そうなんですけど織斑君の事情が事情なので……その、元々決まっていた一室に無

理矢理入れたらしいです。織斑君は政府の方から何か聞かされていませんか？」

俺は首を横に振る。確かに一週間とはいえ、自宅から登校している最中に何かあればまずいだろう。だがいくら俺がISを動かせるとはいえ、年頃の女の子と同じ部屋に住ませるとは政府は何を考えているんだ。俺から手を出すような真似はしないが向こうから寄ってきて、仮に万が一のことがでも起きれば社会的に俺が死ぬんだぞ？

「個室の方は一ヶ月あれば用意出来ますので……その、ごめんなさい」

は？一ヶ月？おい政府、一週間だったのは嘘か。全く適当なこと抜かしやがって

「あの山田先生、そんなこと聞かされてなかったんで荷物とか全然準備出来てないんですけど……」

「あ、それは——」

「私が用意しておいた」

不意に後ろから掛けられる声、それと同時に凄まじい不安が襲ってきた。千冬姉、あなたそんなこと出来たっけ？絶対着替えとケータイの充電器くらいでしょ

「お、織斑先生……ありがとうございます」

「まあケータイの充電器と着替えだけだな。他に何かあれば休日にも取りに行け」

知ってた。うん、知ってたよ。本当に必要最低限、予想通りすぎて逆に何も言えねえ。

だからちよつと誇らしそうに「姉らしいことをした」みたいな顔するのはやめてくれ。わざわざ準備して持ってきてくれたのはありがたいけど、その顔のせいでありがたみが半減するんだよ

「夕食は六時から七時の間に食堂でとってください。各部屋にはシャワーがあるので織斑君はそちらを使ってくださいね。大浴場もあるんですが……織斑君はまだ使えませんかので」

まあ当然だな。俺だつて知らない女と風呂に入るなんて断固として拒否する

「えつと……とりあえず伝えるべきことは以上です。私達はこれから会議があるので、これで。寮まで真つ直ぐに帰ってくださいね」

あ、ストップ。ちよつと待つてください山田先生。あと千冬姉も

「あの、ISを使うにはどうすればいいんですか？セシリア・オルコットとの試合前に、一秒でも動かしておきたいんですけど」

「あ、それはですね。IS使用申請紙に記入してくれればいいんですが……実は……」

実は、なんだ？先程までと違って随分と齒切れが悪いな。そんな風に考えていると千冬姉が代わりに答えてくれた

「お前より以前から申請している生徒が多くいるんだ。今から申請しても回ってくる

まで順当にいつて一週間、残念だがお前には間に合いそうにないぞ」

「その……ごめんさい。いくら織斑君でも他の生徒が待つているISを優先するのは難しいんです」

なんてこつたい。理由としちや至極当然で納得いくがこれはまずい。ISなんざ実技試験や政府の連中の前で動かしたくらいで、時間に換算すれば精々一時間くらいではない。せめて移動の練習くらい出来たら良かったのに……残念だ

「な、ならせめてISに乗らなくても出来る特訓みたいなものは？」

「ISの操縦はイメージに頼る部分が多い。そういう意味でイメージトレーニングはかなり有効だな」

「……なるほど、最後にもう一つだけ。セシリア・オルコットの過去に撮られた記録映像とかはありませんか？」

「それならば明日の放課後、私のところに来い。生徒が視聴覚室を使用するには教師の同伴が必要だからな。オルコットの映像についてはこちらで用意してやろう」

よし、実際にISが使えないのはかなりの痛手だがこれならまだなんとかなる。俺は千冬姉と山田先生に頭を下げると一先ず寮の方へ向かうことにした。食堂は6時から7時と言われたし、今から教科書類を置いて向かえばちょうど良い頃合いだろう

校舎から歩くことおよそ五十メートル、俺は一年生の生活する学生寮に到着し、そし

てそのまま1025室の前に辿り着いた。コンコンと扉をノック、返事は……ない。どうやら相部屋の人もまだ帰ってきていないようだ

確かキーはポケットだ。ごそごそとキーを取り出して鍵穴に突っ込み……つてあれ？回らない。もしかして開いてるのか？首を傾げながらもそのままノブを回すと扉は何事もなかったかのように開いた。一体どうなってるんだ、ノックの返事はなかったんだぞ。まさか部屋を開けっ放しにして出ていった？

「……邪魔しまゝす」

控えめに扉を開けて一応声を掛けるが、やっぱり何も返って来ない。てことはやっぱり開けっ放しでどっか行ったのか。戻って来たら注意くらいした方が良さそうだなこりや

それにしても豪華な部屋だ。内装は綺麗で一流ホテルも顔負けだろう。広さもでかいベッドが全部で三つ並べられるくらいあり、そのベッドも触ってみた感じふわふわだ。こりや大層寝心地もいいんだらうな、そんなことを考えてふと辺りを見回した瞬間……目が合った

「……え？」

「……何故、貴様がここにいる」

そいつは、

ラウラ・ボーデヴィツヒは、

唸るような低い声でそう言った。向けられる射殺さんとはかりの視線にどつと汗が吹き出る。待て。ストップ、ストッププリーズ。俺がこいつと、ボーデヴィツヒと同室だど？

「え……ちよ……もしかして、俺の相手って……君？」

「相手？何を言っている、この部屋は私と——」

「ん、誰か来たの……か？」

え……？今の声って……？まさか……どうして……

「……ほーきちちゃん？」

「い、一夏……？」

今しがた、恐らく浴室と思われる扉を開けて出てきたのは、剣道部の見学に行くとして別れたほーきちちゃんだ。そんな彼女が俺と同じく驚きのあまり固まって口をばくば

ほーきちゃん怒声が部屋中に響き渡り、俺は条件反射で脱兎のごとくその場から逃げ出した。急いで部屋を飛び出し、絡まった思考を振り払うように駆ける

もう訳が分かんねえ。俺とほーきちゃんとボーデヴィツヒの三人で部屋を使う？せめてどつちかにしろや！てか出ていけって言われたから出ていったけど、次にどんな顔してあの部屋に行きやいいんだ。絶対に気まづいじゃねえか！

後で電話して弾と鈴に慰めてもらおう、IS学園の敷地を走りながら俺はそう固く決心した

4話 ワンサマー、備える

夜、寮の消灯時間が刻々と近付く中、俺は一人屋上にやって来ていた。既にシャワーは浴び終わって着替えも済ませており、今身に付けているのは寝巻きである黒のジャージだ。春になったといってもまだまだ四月の頭、夜風からは少し肌寒さを感じる

俺はポケットからケータイを取り出し、ある一つの番号に電話を掛ける。無機質な呼び出し音が静かな夜に溶けていく

『……はい、もしもし?』

よし、繋がった

「もしもし。よお弾、俺だ」

『なっ、一夏!?一夏かお前!久しぶりだな!元気にしてたか?』

繋がった電話から流れる聞き馴れた親友の声。ゴタゴタのせいで長らく電話するこゝとすら出来なかつたが今日になって漸くすることが出来た。思わず笑みが溢れる

「元気がって言われると微妙だ。見渡す限り女子ばっかで心休まる暇がねえって感じだな。ついでに言っとくと弾の好きそうな女の子は皆無だった」

『ええ〜マジかよ〜!』

「残念ながら大マジだ。全く、俺がなんかする度にぎやあぎやあ騒いでよお……ここは動物園かつての」

『はははっ!相変わらずお前は辛辣だな』

それから俺達は他愛ない会話に花を咲かせた。買いそびれた漫画の最新刊の話や同級生の進路の話。6年ぶりに再会した友人が美人になってたつて言ったときはえらい突っ込まれた。それに近いうちにまた会おうなんて約束もした。そんな時、弾がしみじみとこんなことを呟く

『……それにしても良かったぜ。なんだかんだ言いつつもお前が元気で本当に良かった』

その言葉は心の底からの安堵だった。過去の俺を知っているからこそその言葉、俺は思わず息が詰まった。そして弾は続けてこう言う

『俺、不安だったんだよ。中学の頃は酷いもんだったからさ、一夏がIS学園に行けばどうなるかって……』

俺達の中学時代、特に三年生の時は最悪だった。まだ15年しか生きてねえ身だがそんな中でもあの頃は文字通りドン底だった。鈴が中国に戻っちまって頼れる奴が弾しかいなかったのも大きい

「……すまねえ、弾。氣い使わせたな」

『いいってことよ、お前が大丈夫ならな。で、いたんだろ？女尊男卑の子ってのは』
「ああ。しかも結構な奴がな」

流石にそいつがイギリスの代表候補生なんだ、とは言わねえ。万が一、それが拡散でもしたら大惨事になるだろうし

「でもま、あの頃に比べりや問題ねえよ。今はまだ多少ちよつかい掛けてくる程度だからな。個人的にはパンダ扱いの方がよっぽど堪えるぜ」

『そうか……って、もうこんな時間か。すまねえ一夏、明日課題テストがあるから勉強に集中するわ』

「マジか、悪いな。それじゃあな。厳さんや蓮さん、蘭ちゃんに宜しく頼む。また今度遊ぼうぜ」

『おう、頑張れよ！』

俺は通話を切った。ツー、ツー、という音がやけに寂しい。時間を確認すればいつの間にか9時前になっており、予想以上に長く喋り込んでしまっていたようだ。まあ久々に弾と話せたし、やはり男同士気軽に話せるのは気が楽でいい。鈴にも掛けたかったがこりやまた今度だな

俺は部屋に戻ろうと踵を返した時、ふと階段のところに誰かいることに気が付いた。

向こうは俺に気付かれたことが分かったのか、ゆっくりのその姿を現す

「一夏」

「ほーきちちゃん」

「もう消灯時間寸前だぞ。規則を守らなければ連帯責任で同室の私達も罰を受けることになるんだ、早く戻れ」

「そうなのか、知らなかった……」

俺は慌ててほーきちちゃんの後を追った。故意ではなかったとはいえ俺は彼女の肌を見てしまったのだ、謝って許してもらえはしたが少し素っ気なく扱われるのは仕方のないことだろう

「ボーデヴィツヒは？」

「もう寝てしまった。あれだけ周りに気を立てていたんだ、きつと疲れていたんだろ」

その気持ちは十分理解出来る。周りに気を許さないでいるというのは思いの外キツいのだ。俺にはほーきちちゃんや弾といった話し相手がいるが、いないボーデヴィツヒはさぞかし大変だったに違いない

彼女はなんとなく昔の俺を思わせる。近寄るな、放っておいてくれ、そんな雰囲気

出していたあの頃の俺を

「……似てるんだよなあ」

「……一夏？」

「何でもない。独り言さ」

にっつと笑って見せると彼女はそれ以上何も言わなかった



翌日、三時間目まで授業を終えた俺はクラスメイトから質問攻めにあっていた。一日経って漸く話し掛けてくる気になったらしい。怒濤の勢いでやって来る彼女達を捌くのはなかなか大変だが、こそこそと小声で噂されるよりは遥かにましだ

「ねえねえ、織斑君ってどんなものが好きなの？」

「ん〜……趣味としてならゲームしたり漫画読んだり。食べ物なら中華料理だな。特に酢豚」

ただし酢豚は鈴の手料理に限るが

「じゃあ嫌いなものは？」

「女尊男卑。ついでにそれを当たり前だと思つて振りかざすような奴も嫌いだ」

即答した。教室中が一層騒がしくなつたような気がするが、聞いてきたのは向こうで俺はただ答えただけなんだから気にしねえ。第一、男で女尊男卑を好ましく思つてる奴なんている訳ねえだろうに

「お、織斑君つて篠ノ之さんと仲が良いよね？も、もしかして付き合つてたり!？」

「「キヤー!!」」

……女つてのは好きだねえ、こういう話が。答える前から盛り上がつてんじゃん。俺には未来永劫理解出来なさそうだ

「あく……別に付き合つてねえよ。ただほーきちちゃんとは小学一年から四年まで同じクラスだったし、同じ剣道場にも通つてたから今も仲良くしてもらつてるんだ」

「ええ、篠ノ之さんホント?？」

突然話を振られ困惑するほーきちちゃん。あたふたしながらもしつかり頷く姿は昔と大して変わつておらず、なんとなく懐かしい気持ちになつた

「ねえねえ!じゃあ小学校の時の織斑君つてどんな感じだったの!？」

「……そうだな、腕つぶしはなかったが勇氣のある奴だった。とある女の子がいじめつ子に絡まれていた時など、乱入したはいいが返り討ちにあつていたな」

お、い、ほーきちちゃん、その女の子つて君だよ?何勝手に他人事にしてんのさ。て

いかその事はあんまり言わないで欲しいんだけど。武勇伝ですらねえからそれ。だから女の子達も「キヤー！」とか言わないで。恥ずかしいんだよ

「あの！千冬お姉様つて家ではどんな感じなの!？」

「……あんまり変わらないね。昔っから人にも自分にも厳しい人だから」

案の定、千冬姉に関する質問も飛んでくるがそれは対策済みだ。俺は中学時代から用意していた偽りの答えを、さながら本当のこのように話した。真実は時に残酷だ、世の中には知らない方がいいことも多い

「わあ……流石千冬お姉様」

「憧れちゃうよね」

キーンコーンカーンコーン

「席につけ、授業を始めるぞ」

おお、噂をすればなんとやら。チャイムと共にやって来たのは件のお姉様、千冬姉だ。こう見えて実ははずばらなんだ、なんて言っても誰も信じねえんだろうな……つて、ごめんなさいだから叩くのは止めてくださいお願いします

「そう言えば織斑、お前には学園で専用機が用意されるそうだ」

……は？

「お前は世界で唯一 I S を動かせる男だ、故にデータ収集用を目的に専用機が用意されることとなった。理解したか？」

「俺に……専用機が……」

……一応喜ぶべきなんだよな？ たった 4 6 7 個しかないコアの一つを、データ収集が目的とはいえ俺に与えてくれるのだから。ただなんというか……突然のことですら、応するのが正解なのか分からん。本来ならば然るべき訓練を積んで更に成果を上げ、幸運の女神に微笑まれたごく一部の人間にしか与えられないものを、こんなあっさりもらってはありがたみも何もあつたものではない。ただ戸惑うだけだ

「……さて、では授業を始める。教科書とノートを準備しろ」

そんな半分放心状態の俺を放置して、千冬姉は授業を開始した

「安心しましたわ。まさか訓練機で試合しようとは思ってなかったでしょうけど」

授業が終了しお昼休みが始まった直後、セシリア・オルコットはわざわざ俺のとこまでやって来てこんなことを言った。こいつは俺が訓練機で試合しないなら一体何で試

合すると思つてたんだ？てか訓練機つて初心者でも扱えるようにされてるんだろ、むしろ訓練機の方が俺にぴったりじゃねえか

「まあ？一応勝負は見えてますけど？流石にフェアではありませんものね」

当たり前だ。代表候補生とトーシローだぞ？ほーきちちゃんも言つていたが俺とこいつでは何もかもが違いすぎる。そもそも勝負になるかどうかつてレベルだ。何を今さら自信満々に言う必要があるんだよ。まあ俺にも『織斑千冬の弟』つて看板がある以上、瞬殺なんて結果にだけはならねえように足掻くつもりだが……

「何しろ、この私も専用機を持つているのですから！あなたのような野蛮な男など専用機があつたとしても、完膚なきまでに叩きのめして差し上げますわ」

……そろそろこいつの無駄口に付き合うのも飽きたな。腹も減つたし食堂に行くか。因みにほーきちちゃんは既にクラスメイト達と行つてしまつている。付け足すなら誘われてた時、すつげえ嬉しそうな顔をしていた。いつの間に友達なんて作つてたんだあの子

「ちよつと！聞いていますの！」

「聞いてねえ。じゃあな」

ぎやあぎやあ喚くセシリア・オルコットは無視して食堂へ向かう。付き合う人間を選ぶ権利くらい極東の猿にもあるんだよ

付き合う人間と言えば俺は友達が少ない。元々そんな関係と呼べる奴なんて弾や鈴くらいしかおらず、この学園に来てからはほーきちやんだ一人だけだ。他のクラスメイトともやってけりや問題ねえんだが……まだ信用するには早い

これも『織斑千冬の弟』って肩書きに寄ってきている者が多く感じるせいだ。少なくともクラス代表決定戦、これの結果で彼女達がどんな反応を示すのかが見極めどころだろう

つたく、いつから俺は素直に友達を作ること出来なくなつたのかねえ……

溜め息と共に内心でぼやきながら俺は昼飯にラーメンを求めて券売機へと向かった



『お行きなさい！ティアーズ！』

その台詞と共にセシリア・オルコットの駆る蒼の機体『ブルー・ティアーズ』から、四基のBT兵器……ビットが射出される。それぞれが意思を持つかのように複雑な機動をするそれは、あつという間に相手である『ラファール・リヴァイヴ』を取り囲み、雨のようにビームを降らせた。混乱した相手はそのままビットの包囲網を破ることが出来ずシールドエネルギーを削られ敗北する

今のは昨日頼んでおいたセシリア・オルコットに関する過去の記録映像だ。イギリスの第三代機『ブルー・ティアーズ』は操縦者のイメージを反映、具現化することであのビットのようなユニットを独立させて動かせる最新技術の結晶だ。兵装はでかいライフルが一つとショットソードが一本、そしてビットが六基、内四基がさつき動かし、いたビーム型、残りの二基はミサイルの出るタイプだった

……我ながら随分とヤバイ奴に喧嘩売られたもんだ。初見じゃまず反応すら出来なかっただろう

リモコンで映像をもう一度再生する。はつきり言ってもう何回再生したかも覚えてないが、ここまですて漸く分かったことが幾つかある

まず、セシリア・オルコットは近接戦闘が不得意だ。映像の中でも一度接近された時は引き剥がすのに随分と苦勞しているように見えた。ショットソードを展開した時もわざわざ名前を呼ぶ出し方をしていた。千冬姉曰く、「あれは代表候補生のする出し方ではない」らしい

もう一つがビットを操っている最中はライフルによる射撃が出来ない、ということだ。BT兵器は操縦者のイメージに依存する、故に扱うにはそちらに意識を集中しなけ

ればならないようで、別の映像でも確認してみたがどれも例外なく、ビットを操っている最中は動いていなかった

以上のことから導き出されるあいつとの戦い方は、ビットを操っている最中に近付いて接近戦に持ち込む、だ。その時にいくらシールドエネルギーを削られようがいい。どのみち長引けば長引くほど不利になるのだ。セシリア・オルコットを、そして見ている生徒を驚かせるにはこれがベストだと思う

「先生、俺の専用機ってどんな機体なんですか？」

「いや……そこまでの情報はこちらも把握していない。政府からお前の専用機は用意すると通達が来たただけだ。いつ届くかも分からん」

なんじゃそりゃ。これで近接武器が一つもありませんなんてピーキーな機体が来たらどうなるんだよ。いやまあそんな機体ある筈がないとは思うが……

「ありがとうございました」

「ああ」

一通り満足し終わる頃には夕食に近い時間になっていた。片付けをして視聴覚室の

外に出れば、窓から差し込む夕陽に思わず目を細める。さっさと寮に戻って飯を食おう。ほーきちちゃんやボーデヴィツヒと合流出来ればいいな

「それじゃ俺はこれで」

「ああ。気を付けて戻れよ」

ペコリと一礼、そのままぐるっと反転して……そこで動きを止めた。真っ直ぐと此方にやって来る奴がいたからだ。長さがバラバラな銀髪にオツドアイ、あれはボーデヴィツヒだ。彼女は俯いていて此方に気付いていないのか、覚束ない足取りで進んできて……

千冬姉にぶつかつた

……いや、ぶつかつたってより千冬姉がわざとボーデヴィツヒの前に立ちはだかつたって感じだ。当然ボーデヴィツヒはバランスを崩し、ぼてつと尻から倒れ込んでしま

う
「あうっ……」

「歩く時は前を見る。お前は問題なくとも誰かを怪我させるぞ」

「っ!?も、申し訳ありません！教官！」

ぶつかつた相手が千冬姉だと理解した瞬間、ボーデヴィツヒは顔を真っ青にしながらかわてて立ち上がった。しかも何故か敬礼もプラスして

それにボーデヴィツヒは今、教官と言つた。先生ではなく、だ。俺は訳が分からずに首を傾げた

「……ここでは織斑先生だ、もう私は教官ではない」

「も、申し訳ありませんっ！」

「……まあいい。私もお前に一つ聞きたいことがあつたからな」

ふつと千冬姉は肩の力を抜いた。しかしその厳しげな表情は一切変えず、狼のような鋭い眼光がボーデヴィツヒのオッドアイを射抜く

「何故お前がここにいる？ラウラ」

今思えば、俺はここでさつさと消えておけば良かったのかもしれない
入学して僅か二日目、俺は彼女の抱える闇を思わぬ形で知ることとなつた

5話 ワンサマー、腹を割る

ラウラ・ボーデヴィツヒは軍人だった。それもただの軍人ではない、ドイツが世界に誇るI Sを配備した特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ黒 兎 隊』の一員だ

シュヴァルツェ・ハーゼ黒 兎 隊。ドイツの保有する十機のI Sの内、三機が割り当てられた正真正銘の軍事部隊だ。たった一機で国家を相手に出来るI Sが三機もある、それだけでこの部隊が如何に強大な力を持っているかが分かるだろう。部隊章は眼帯をした黒兎、所属する全員がそれに倣って眼帯を装着している。遺伝子強化試験体であり、兵士として生み出された彼女はそんな部隊の一員だった

しかしそんな彼女を一つの悲劇が襲った。脳への視覚信号伝達速度の爆発的向上と、I S使用時の超高速戦闘状況下における動体反射の強化を目的とした、『ヴォーダン・オージエヴォーダン・オージエ』と呼ばれる肉眼へのナノマシン移植処置が失敗したのだ。理論上、不適合のリスクなどないと言われていた筈の処置が、である。彼女の処置が施された瞳『ヴォーダン・オージエ越界の瞳』は制御不能となり、そして金色へと変色した

これにより、ラウラは以降の訓練に大きな支障をきたすこととなる。当たり前のよう

に出来ていたことに苦勞するようになり、何気なくこなしていたことが出来なくなる。そんな地獄に、彼女は突然放り込まれた。右と左で見える範囲や解像度、反応速度が違うといったことは、ISを使う軍人にとってまさに致命的であったのだ。

そこで待っていたのは冷ややかな視線と嘲笑、そして出来損ないの烙印。以前は自分より劣っていた者達に軽々と追い抜かれていく、そんな悔しさや悲しさに彼女は生まれて初めて涙を流した。過酷な訓練に必死になつて食らい付き、休みであっても自分に鞭を打つ。遺伝子強化試験体だからこそ可能な、常人には無茶とも言える日々を送った彼女だったが、しかし結果はほとんど変わらなかった。

無情な現実に打ちのめされる彼女は、ある時一人の女性と出会った。第二回モンド・グロツソにおいてドイツ軍に多大な恩を受け、その精算のために一年間、シュヴァルツェ・ハーゼ黒兔隊の教官を務めることとなった織斑千冬だ。世界最強のブリュンヒルデが直々に訓練を指揮する、このことにラウラは大きな期待を抱いて訓練に挑んだ。

結果として黒兔シュヴァルツェ・ハーゼ隊の隊員達は、千冬の指導を受けた一年間で大きく成長した。

ただ一人、ラウラ・ボーデヴィツヒを除いて

千冬が部隊を去って以来、彼女は隊員達より虐めの対象となった。体格は小柄、かつ部隊内でも最底辺に位置していた彼女は、ストレスを解消するには最適な道具だったのだ

殴る蹴るの暴力や罵詈雑言は当たり前。訓練という名の下に徹底的に痛め付けられ、腰まであった長い銀髪は好き放題に切り刻まれた。食事を台無しにされることも多々あった。唯一、当時の隊長であったクラリツサ・ハルフオーフだけは彼女に気を遣っていたが、心を閉ざしてしまったラウラに彼女の声は届かなかった

そんな日々が一年以上も続き、

ある日、ラウラは軍の上層部よりIS学園への入学を命じられることとなる。同時に、シュヴァルツェ・ハーゼ黒 兎 隊からの退役も

兵士として生み出された彼女にとって、この命令は存在の否定に等しかった。理由を問おうにもなんの肩書きも持たない一介の軍人では、軍の上層部に連絡をとることさえも出来ない。いくら絶望しようと、いくら泣き叫ぼうと、彼女にはその命令を甘んじて受け入れることしか出来なかった

そして彼女は、ラウラ・ボーデヴィツヒはIS学園の入学試験を無事に合格し、入学を果たした。自らの存在価値も、誇りであった隊の証である眼帯も失って……

何より、彼女を入学させた上層部の考えにも気付かぬまま……



俺は、俺と千冬姉はボーデヴィツヒの口から紡がれる言葉を、ただただ黙って聞いていた。淡々と語られる彼女の過去、これまでの彼女の様子から普通の生活をしてきた筈がないと思っていたが、正直ここまでとは予想していなかった。聞いたのは千冬姉がドイツを去ってからここに来るまでの間だけだったが、まさに壮絶の一言に尽きる

「……すまなかった。わざわざ話させてしまった」

暫しの沈黙を破ったのは千冬姉だ。ボーデヴィツヒに謝る千冬姉の顔からは後悔の思いが読み取れる。一年間とはいえ自分が受け持った教え子が、虐め虐められの関係になつてしまったことに責任を感じているのだろうか

「いえ……失礼します」

そんな千冬姉へ控え目に頭を下げ、ボーデヴィツヒはとぼとぼと来た方へ戻っていつ

た。その後ろ姿はあまりにも寂しくて、思わず後を追いたい衝動に駆られた。だが俺にはあいつに掛ける言葉が見当たらない。そんな自分が情けなくて、やけに苛立った

「二夏……」

「……なんだよ、千冬姉」

不意に名前を呼ばれた。苛立っていたこともあつて、いつも以上にぶつきらぼうに返事をしてしまう

「こんなことを頼むのは教師として失格なのだろうがな……あいつを、ラウラを頼む。私ではきつと、あいつを変えることは出来ない」

そう言う千冬姉はとても辛そうな表情をしていた。救うべき立場にいるのに、救えない。そんな無念がはつきりと表れている。千冬姉のことだ、ボーデヴィツヒがああなつてしまったのは自分のせいだとも思っているのかもしれない。ああ、そういえばあの時も同じ顔をしてたような気がするな

でも、そりや違うだろう

千冬姉が気を病む必要なんて、ありはしない

今だつて、あの時だつて

「大丈夫だ、千冬姉」

——任せてくれ

一言だけ言い残してから、俺はボーデヴィツヒが行つた方へと向かつた。幸いにもそこまで遠くまでは行つてなかつたようで、目立つ銀髪と小さな背中はずぐに見つかつた

「ボーデヴィツヒ」

ピタリと彼女の足が止まる。そしてゆっくりと振り返り、ギンと深紅の眼が俺を睨み付けた。話し掛けるな、近寄るな。俺には彼女がそう言っているように感じた。凄まじい威圧感で額に脂汗が浮かぶ

俺は息を整えた。さつきは見当たらなかつた言葉がどんどん浮かんでくる。そうだが、前から思つてたことじゃねえか。こいつは俺と似ているつて。なら、俺が掛けるべき言葉だつて沢山ある

あの二人
弾と鈴が俺に掛けてくれた言葉が

「晩飯、食いに行くうぜ」

「……はっ」

彼女の目が見開かれる。一体何を言っているんだ、そんな感情がありありと顔に表れた。俺はもう一度息を整えてから、いつものへらへらとした笑みを浮かべてやる。そして一度止めた足を動かし、ボーデヴィツヒの横に並ぶ

「……なんのつもりだ」

ぞつとするような低音で呟かれる。でも不思議と怖くはなかった

だって、こいつは昔の俺なのだから

「別に、もうすぐ飯の時間だから誘っただけだ。一人で食うより二人で食った方が飯

も旨く感じるからな」

「……何故私に関わろうとする？」

それは先程のような敵意のない、純粹な疑問だった。ボーデヴィツヒは此方を見上げ、じつと俺を見つめる。紅と金の瞳が綺麗だ、なんて場違いなことを思った

「似てるんだ、お前が昔の俺に。独りにしてくれって雰囲気とかそっくりなんだ」

——だから、放っておけない

その言葉にボーデヴィツヒは顔を歪めた

「……貴様が私に？馬鹿を言うな。私には身内も、友も、存在する価値すらない。何も知らない分際で、分かったような口を利くな……！」

「……そうだな。俺はボーデヴィツヒじゃねえからお前の全部は分からねえ」

自分の存在価値とか、考えたこともねえしな。ボーデヴィツヒが何故そんなものに拘るのか、皆目検討もつかん

「ならば——」

「放っておけ、ってか？お前こそ馬鹿言うな。お前は俺のクラスメイトで同じ部屋に住んでんだぞ？仲良くやってきたいと思うのは普通だし、落ち込んでんなら力になりたと思うのもごく自然なことだろうが」

俺は一步前に踏み出してやや戸惑った様子のボーデヴィツヒの前に立つ。お互いの

視線が交差した

「何故……貴様は……」

「なあボーデヴィツヒ、少しだけ昔話に付き合ってくれないか？」

ふっと笑みを消して、俺は彼女に問うた



——と、その前にボーデヴィツヒは知ってるよな？ 第二回モンド・グロッソの真実を
さ

——ああ、そうだよな。ドイツ軍の人が俺を助けてくれたんだから、そのドイツ軍の
ボーデヴィツヒが知らない訳がねえよな。悪い悪い

——今からの話は第二回モンド・グロッソで誘拐されて、そこでその後俺が日本に
戻って来てからの話だ。あの頃……つてのは変な話だが俺はごく普通の中学一年生
だった。ISを動かせるなんて全然知らない、どこにでもいるような普通の学生だ

——ドイツから帰国してから、俺は普段通りの生活をしていた。ダチと駄弁って、適
当に授業受けて、帰ってからはバイトに行つて、そんな日々だ。千冬姉はドイツに残つ
てたから家には俺一人だったんだが……まあ普通の生活だ。でもある日、一つの噂が学

校に流れ始めた

——『織斑千冬がモンド・グロッソの決勝戦で棄権したのは織斑一夏のせいだ』って噂がな

——そんな馬鹿な、って思うだろ？そう、馬鹿な話だ。実際の正体は、女尊男卑でかつ千冬姉の熱狂的なファンの女子生徒数人が弟である俺を妬んで流したデマなんだよ。真実は日本とドイツ間にある国絡みの秘密で、俺が話したのも信用のある親友二人だけだった

——ただのデマだ。ただのデマなんだが……でもそれは真実だった。実際に千冬姉は俺が誘拐されたと知って決勝戦を投げ出した。あの人が決勝戦を棄権したのは、他にもない俺のせいだったんだ

——噂は瞬く間に学校中に広がった。俺は色んな奴から問い詰められたよ、『アンタのせいで千冬様は棄権したのか』ってね

——ん、なんて答えたんだって？俺は何も答えなかった。肯定も、否定もしなかった。ここで否定してりゃ良かったのかも知れないが……俺にはそれが出来なかった。理由は……どうしてだろうな。俺にも分からねえや

——で、そんな俺の反応から連中は何を思ったのか、噂を真実だと思い込むようになるやがった。あの時になって俺は漸く千冬姉の人気を理解したね。学校にいる女の大体8割……数にして150と少しが俺の敵になった

——それから今思い出しても酷えもんだ。机はいつの間にかぶつ壊され、持つて行った荷物の幾つかは捨てられ、また幾つかは燃やされた。弁当は食う前にひっくり返され、運動靴は切り刻まれてバラバラ。休み時間には罵詈雑言が飛び交うのは当たり前、時にはいきなり殴られたりもした。顔も知らねえ上級生にいきなりキレられて殴られた時は思わず呆然としちまったりもしたな。地獄つてのはああいうことを言うんだろうって、ははっ……

——……悪い。まあこんな具合に学校中で俺への嫌がらせが始まった。でもすぐに終わると思ってた。人の噂も七十五日って言葉が日本にはあつてな、どうせすぐになくなるだろうと思つて抵抗もそんなにしなかつたんだ。でも、現実はそのじゃなかつた。俺への嫌がらせは千冬姉本人が直々に学校へ物申したつて終わらなかつた

——ん、味方はいなかつたのかだと？いたさ。俺が秘密を話した二人のダチだけが俺の味方だった。一年の時に千冬姉は日本にいなかったし、そもそも心配させるのが嫌だから言わなかつた。結局、それも暴力沙汰を起こしたせいでバレちまつたんだがな。それに他の生徒は飛び火するのが怖かつたのか全然俺に関わろうとしなかつたし、極めつ

けが教師の中にもこの噂を信じるような女がいて敵に回ったことだった。嫌がらせは黙認され、授業を受ける用意を失った俺はぶん殴られて教室を追い出された。二人がいなけりや俺はろくに勉強も出来なかつただろうな

——ただ、やつぱり二人にも飛び火はあつたみたいなんだ。俺に関わつたばつかりにな。それを知つた時、俺は二人を拒絶した。自分が傷付くのは構わなかつたが、俺のせいで二人が傷付くのは我慢がならなかつた。近付くな、独りにしてくれて、俺はダチにそんな態度をとつた

——まるで、今のお前みたいにな

——でもな、ダチ二人は俺に関わることを止めなかつた。何をされてもあの二人は俺を『織斑千冬の面汚し』でも『出来損ないの弟』でもない、『ただの織斑一夏』として接してくれた。飯に誘つてくれたし、休日には遊びにだつて。誰も信じられなかつた環境の中で、俺はあの二人だけは信じることが出来たんだよ

——だから、俺は今、この学園でこうしていられる

——……なあ、ボーデヴィツヒ

——俺はお前じゃねえからお前の全部は分からねえ。お前がどうして兵士とか存在

価値とかに拘るのかは知らねえけどさ……やっぱり放っておけねえよ。あの時の俺に似てる分、余計にさ

——俺はな、ただお前と仲良くなりてえだけだ。軍の人達がお前にしたことなんて関係ねえ。俺にとってのお前は『出来損ない』だとか『落ちこぼれ』だとか『存在価値がない』とかじゃなく、『クラスメイトでルームメイトのラウラ・ボーデヴィツヒ』なんだよ

——だからさ、ボーデヴィツヒ

——今日の晩飯、一緒に食いに行こうぜ



「……」

ボーデヴィツヒは何も言わなかった。俯いたまま服の裾をぎゅつと掴んで、ただ沈黙を貫いた。俺の気持ちは彼女に伝えた、だから、後は向こう次第だ

「……下らん」

ポツリと、唸るように彼女は一言だけ呟いた。するりと俺の横を抜けてゆつくりと歩を進める

「貴様が何を言おうと、私に価値がないことには変わりない。私は出来損ないだ、落ちこぼれだ。その事實は……変わらん」

「っ……」

「……何をしている？ 貴様が言ったのだろうが」

「へ？」

俺は訳が分からなくて振り返った。そこには当然、仏頂面のボーデヴィツヒがいる。ただ、その顔には今までになかった微笑がある、ような気がした。気がしただけで本当に気のせいかもしれないが、俺には確かにあいつが笑っているように見えた

「晩飯だ。今日は気が向いたから一緒に行つてやる。来ないなら置いていくぞ」

「……ボーデヴィツヒ」

「ふん……早く来い」

さつと身を翻して行つてしまう彼女を俺は慌てて追いかける。よく分からないがとにかく嬉しかった。ボーデヴィツヒの心を動かせた、そんな気がして俺は指摘されるまでの間、気持ち悪いくらいにだらしない笑みを浮かべていた

6話 ワンサマー、挑む

俺がボーデヴィツヒと少しだけ仲良くなつてから一夜が明けた。相変わらず無愛想な奴だが話せば一応返つてくるし、以前と比べてかなり進歩した方だと言えるだろう。この変化にはほーきちちゃんも目を見開いて驚いていた

因みにあんまり嬉しかったもんだから名前を連呼してたら容赦なく殴られた。しかもグーである。元とはいえ訓練を積んだ軍人の一撃、貧弱な俺は当然意識を刈り取られ撃沈した。後遺症がないのが救いだらう。勿論痛かったが

……強いてもう一つ言うがあるとするれば、鈴に電話を掛けた筈なのに知らねえ女が出たことくらいか。鈴と話せると期待して掛けたところ、いきなり女が「織斑一夏君ね?」とか言い出したもんだから思わずぶちギレちまった。てめえはお呼びじゃねえんだよ、鈴を出せ鈴を。で、粘つたが結局鈴と話すことは出来なかつた

「おばちゃん、かき揚げ蕎麦に天ぶらうどん、日替わりランチを一つずつ」

「はいよ〜!」

俺は三人分の食券をおばちゃんに渡す。午前中の授業はある騒ぎこそあったもののそれ以外は何事もなく終了した。今の俺はボーデヴィツヒと二人きり、ほーきちちゃんは席を取りに行つてくれている。注文したのは俺が蕎麦、ほーきちちゃんがうどん、ボーデヴィツヒが日替わりランチだ

「はいお待ち。アンタ一人で二人分も食べるのかい？」

「はははっ！流石に男でもそりゃキツイつすよ。連れが席を取つてくれてるんでその分を持つてだけです」

いただきますね、と一言告げてからうどんと蕎麦がそれぞれ乗った盆を受け取る。さて、ほーきちちゃんはこの席を取ったのか……やはりお昼時は生徒の数が多くて探しにくいな

「……あそこだ」

すつ、と日替わりランチを片手に持ったボーデヴィツヒが指を指す。その方向を見れば三人の生徒——しかもよく見れば全員クラスメイト——に話していて、時折あたふたするほーきちちゃんの姿が。その様子はなんとなく小学生の頃を彷彿させ……つて、前にも同じことをやった気がする

「サンキュー、ボーデヴィツヒ。ほーきちちゃんお待たせ」

「む、一夏か。すまないな」

「いいっていいって。こっちの三人はどうして?」

ほーきちちゃんの前に天ぷらうどんを置いてから尋ねる。クラスメイトの名前くらいは一通り覚えてるから誰なのかは分かる。おさげの子が谷本癒子さん、ロングの子が鏡ナギさん、そして萌え袖の子が布仏本音さんだ。俺の質問に代表してか、谷本さんが少し戸惑いながら答えた

「えつと……篠ノ之さんが一人だったから一緒に食べよ〜って誘ったんだけど……まさか織斑君達もいたなんて……あはは」

「二夏、良ければ彼女達も一緒にいいだろうか?せつかく誘ってくれたのだからあまり好意は無駄にしたくない」

……まあ、俺としても断る理由はねえ。ボーデヴィツヒから反応を得ることは出来なかったが別に嫌がつている訳じゃなさそうだ。三人の同席を了承してから俺達は席に座り、昼飯を食べ始めた

しっかし、どうしてI S学園の飯はこうも美味しいのかねえ?食券渡してから出てくるまでも早えし、値段だって元が取れてるのか疑うレベルで安い。早い、美味しい、安いのも三拍子揃った食堂だ。これで周りの好奇の視線さえなけりや完璧なんだがな……

「あの、篠ノ之さん、さつきはごめんね。私達、篠ノ之さんの事情も知らないであんなに騒いじやって……」

不意に鏡さんがほーきちやんに謝った。それに続くように谷本さんも頭を下げる。彼女達の言うさつき、というのは四時間目に起きたとある騒ぎのことだ

その授業自体は順調に進んでいた。しかしある時、一人の子が「篠ノ之さんってもしかして篠ノ之東博士の……」的な質問をしたことが事の発端となった。授業をしていた千冬姉はそれを肯定、教室内は一時騒然となりほーきちやんに迫る者すら出たのだ。何せ篠ノ之東博士はISの生みの親、そんな彼女の妹がいるとなればお近づきになりたいと思うのは当然なんだろう。千冬姉という全女性の憧れが姉にいる俺も同じようなことがあったりした。まああれは迫られるというか、責められるって感じの方が正しいのだけれども……

案の定、騒ぐクラスメイトの中には「いいな」だの「羨ましい」だの言う者もいた。しかしそれはあまりにも無神経だ。有名人の身内だからっていい思いばつかしてるとは限らねえのだから

そんなとにかく騒ぐ生徒を黙らせるため、ほーきちやんはなんと自分から過去の一部を話した。重要人物保護プログラムのせいで小学生の頃から両親と離ればなれだとか、転校が多くてろくに友人関係も作れないんだとか、そう言った内容だ

そして最後の一言が「で、まだ私を羨ましいと言える者はいるか？」だ。当然答える生徒はおらず、一転して教室内はお通夜ムードになってしまった。千冬姉の号令で辛う

じて持ち直したものの、あんな微妙な空気の中で授業を受けるのはもうごめん

勿論ほーきちゃん自身もいい思いをしなかったことは間違いない。故にこの三人……というか谷本さんと鏡さんは己の無神経さを彼女に謝っていた。そして、ほーきちゃんは二人にふつと微笑んだ

「気にしないでほしい。あんなことになったのも初めてではないからな。むしろ私の方が意地悪だった。あんな脅すような真似をして本当にすまなかった」

「そ、そんな！別に篠ノ之さんは悪くないよ……」

「……ならお互いに謝るのはもうやめよう。暗い気持ちではせつかくの昼食も味わえないしな」

……なんだろう、ほーきちゃんが大人すぎる気がする。俺が千冬姉についてあんな感じで詰め寄られていたら、間違ひなく拗ねてろくに対応することすらしなかっただろうに

「ねーねーしののん、しののんのお姉さんってどんな人なの〜？」

「し、しののん？」

「うん。だって篠ノ之でしよ〜？だからしののん。駄目かな？」

ここで今まで喋っていなかった布仏さんが口を開いた。見かけ通りの口調、だが聞き方は『しののんのお姉さん』である。篠ノ之博士と聞かなかつたのはほーきちゃんに對

する配慮だろうか。もしそうなら、この子はのほほんとした外見に反して存外に鋭いききなりの渾名にほーきちゃんは驚いた風な顔をしていたがすぐに首を横に振った。その様子がなんだか嬉しそうに見えるのは……転校続きでつて辺りが関係しているのだろうか

「そうだな……もう姉さんとは長いこと会っていないが、それでもいいなら話そう」

「うんうん！ いいよいいよ」

「では……まず姉さんは頭が良かった。まあISを作れるくらいだし当たり前だがな。それに優しかったんだ。分からない宿題があれば喜んで手伝ってくれたし、今も続けているが剣道の試合にはいつも応援に来てくれた。とても変わった人だったが、それでも私には自慢の姉だった」

ゆつくりと束さんについて話すほーきちゃんはなんだかとても生き生きとしているように見えた。俺や谷本さんに鏡さん、ボーデヴィツヒさえも気付けば彼女の話を耳を傾けていた

「ISを作った時は特に凄かったな。『これがあれば空だつて自由に飛べるし宇宙にも行けるんだ』と……まるで子供のように言っていたよ。その時の私は姉妹なのに姉さんのことをよく知らなかった。だからISについて私に話してくれた時、初めて姉さんの心に触れることが出来たような気がした。ずっとずっと向こう側にいる存在だと

思っていた姉さんが夢中になつて頑張っている姿を見ると、実は自分と全然変わらない人なんだと分かつたような気がしたんだ」

だから、とほーきちゃんは一度区切つた

「姉さんに会えなくなつて、そして家族とバラバラになつた時、私は分からなくなつた。あんなに優しくしてくれたのに、あんなに笑顔で話をしてくれたのに、姉さんはどうして私達を捨ててしまつたんだろうと。当時小学校高学年になつたばかりの私には、いくら考えても理解出来なかつた。途方に暮れて……そして憎んだよ。あの人のせいで家族はバラバラになり、道場も潰れて一夏を含めた友人や同門の仲間とも別れた。私の人生を滅茶苦茶にしたんだと、本気でそう思つて恨んだ」

淡々と語られる言葉の節々からは、ほーきちゃんの悲しみが見え隠れしていた。小学四年生、そんな幼い頃に実の家族と離ればなれにならざるを得なかつた。当時から関わりのあつた俺は理由を知つてこそいたものの、やはりあらためて聞かされるとなんとも言えない気持ちになる

「……今は、どうなの〜?」

「……それがな、不思議なことに分からないんだ。あれほど憎んでいたのに、嫌いだった筈なのに、私は昔の優しい姉さんが嘘だなんて思えなかつた。思いたくなかつた。I Sは姉さんの希望で、そして夢だ。夢と家族、二つを天秤に乗せて……姉さんは夢を選

んだ。家族を失つてでも、切り捨ててでも叶えたい夢が姉さんにはあった、そう考えると恨むどころかむしろ応援すらしたくなるんだ。可笑しな話だろう？姉とはいえ自分を捨てた自分勝手な人を信じているなんて」

「可笑しくなんかねえ（ない）よ」

俺は最後の自嘲的な言葉に即答した。チラリと見てみれば驚いたようなほーきちゃんと真剣な表情の布仏さんの姿が。俺と台詞が被さったのはどうやら布仏さんらしい

俺は束さんがどういう人か知っている。確かにあの人は色々と規格外で性格もぶっ飛んだ人だが、何よりも妹のほーきちゃんや千冬姉を大切にしている人だ。あくまで俺の予想だが、世界とこの二人ならば束さんは迷わず二人を選ぶだろう

篠ノ之束という人間は、そういう人だ

「家族を信じることの何が変なんだよ？俺からすりやごく当たり前なことだと思
ぜ」

「おりむーの言う通りだよ。お姉ちゃんが心配とか気になるとかって姉妹なら普通のことだよ」

同意するように谷本さんと鏡さんもごくごく頷く。ボーデヴィツヒだけは何もし

なかったがそれでも彼女のオッドアイは、じつとほーきちちゃんを見つめて離さなかった。余程俺達の反応が意外だったのか、ほーきちちゃんは暫し呆然となつて視線を忙しくあつちこつちに動かした

「それにね、お姉ちゃんの方だつて妹のことは心配なんだよ。口でどんなことを言つてても、ね。だからしのののお姉さんもきつとほーきちちゃんに会えなくて寂しいに決まつてるよ」

布仏さんのその言葉にはやけに説得力があつた。彼女にも同じような経験があるのか……はたまた身近にそんな関係の姉妹でもいるのだろうか。いずれにせよ、俺には分からないことだ

「……ありがとう布仏。それに、皆も」

そう言つて微笑んだほーきちちゃんはどこか憑き物が落ちたような顔をしていて、最後にもう一言だけ呟いた

それは恐らく、彼女にとって切実な願い

——いつかまた……

——姉さんに、会いたいな



さて、あれから俺は残された時間を出来ることをして過ごした。放課後には先生に質問をして、その後ほーきちやんに頼んで剣道に付き合ってもらった。六年ぶりに剣を交えた彼女はとて強くなっていて、道場が潰れてから素振りくらいしかしてこなかった俺が勝てる相手ではなかった。それでも実践的な剣道を通して『決闘の感覚』はある程度思い出すことが出来たので、全くの無駄足だった訳ではなかった

で、今の俺はほーきちやんやボーデヴィツヒと別れて、一人空っぽのピットにぼつんと佇んでいる。残念なことにはここは関係者以外立ち入り禁止なのだ。そして寄越される筈の専用機は未だに到着しておらず、結局この一週間でISを動かすことは叶わなかった。畜生め。セシリア・オルコットの奴はもう準備を済ませてアリーナで待っている頃だろう。これじゃあ届いたとしてもろくに準備も出来そうにねえな……

「一夏」

「ん、千冬姉」

そんな俺のところに行って来たマイシスター。名前で俺を呼んだということは先生

モードではなくお姉ちゃんモードなのだろう。俺は肩の力を抜いた

「勝てると思うか？」

「まあ順当に考えてキツイだろうな。腐っても代表候補生だ、トーシローが簡単に勝てる相手じゃねえし」

だから、

「俺がするのは勝つことじゃねえ、出来ることをするだけだ」

「……そうか」

「織斑君織斑君！来ましたよ、織斑君の専用機が！」

俺達姉弟の会話は慌てた様子の山田先生が来たことで終わった。千冬姉が目で早くいけと言ってくるので一度だけ頷き、山田先生に連れられてISの元へ行った。重い音と共にピットの搬入口が開き、その向こう側の防壁扉もまた同様に開いていく

「これが……俺の……」

俺はそこにあつた翼に圧倒され、一言だけ溢した。それに山田先生が嬉しそうに笑ってこいつの名前を教えてくれる

「はい！織斑君の専用IS『白式』です！」

……

せつかくの専用機もその利点がないも同然だ

「時間がない、早く乗れ。処理はISが自動で行う」

あーもうどうにでもなれ。内心で悪態をつきながら白式に触れる。これで動かなかったら笑いもんだな、なんて思うのだが白式は問題なく起動して装甲が開く。座るようにして身を任せるとまるで装甲が吸い付くように合わさり、同時にISのハイパーセンサーが作動して一気に視界が広がった。本来なら見えない筈の場所が見えるというのはなんとも変な感じだ

「どうだ一夏、何か不具合はあるか?」

「ん〜……多分ねえ……と思う。情報量がアホみたいに多くて頭が痛いとかはノーカ
ンでしょ?」

「当たり前だ」

「ですよね〜」

なんとも締まらない会話だ。リラックスは出来るが流石にリラックスし過ぎだわ。
まあ最後までいいはきつちりしますかね

「千冬姉」

「なんだ?」

「行ってきます」

「ああ、行つてこい」

前に一步、また一步と動いてゲートに進んでいく。ISはイメージだと千冬姉は言っていたがまさにその通りだと動かしてみても分かった。視線を少しあげれば壁越しにいるセシリア・オルコットの機体情報が飛び込んでくる。脚部をカタパルトにセットし、姿勢を低くして来るべき衝撃に備える

さて、行きますかね……

「織斑一夏、白式、出撃します」

カタパルトが動き出し、白式と俺をアリーナへと投げ飛ばした



「あら、逃げずに——」

「話し掛けないでくれ。こっちは動かすのにも精一杯なんだ」

兎戯だねえ、全く。まるでよちよち歩きだ。自慢にもならんがこっちはIS使用時間

一時間未満だ。空を飛ぶ感覚なんてのはやっぱイメージとは全然違う。想像よりもずつとずつと難しかった

俺はゲートを出てからたつぷり一分ほど時間を掛けてセシリア・オルコットと同じ目線まで浮上した。実はこの間にも白式は俺に合わせて凄まじい量の情報を処理している訳で、出来ることならこのまま一次移行が終わるまでのんびりしときたいんだが……試合はもう始まつてるしそうはいかなさそうだ

「悪い、待たせた」

「ふん、そんな拙い操縦では試合にすらなりませんわね。どうです？ここで降参するのなら観客の前で無様な様を晒さずに済みますわよ？」

「はははっ、代表候補生つてのは冗談が上手いな。そんな真似したらそれこそ笑いもんだろうに」

俺の背には不本意だが『織斑千冬の弟』っていう呪いがへばり付いている。勝つて当然、負けるにしても善戦しなければ許されない。降参なんざ論外だ

頭の中で白式から武装をコール、すると目の前に武装の一覧が表れた。なるほど、近接ブレードが一本か。近接ブレードが一本だけね……

……あ？

「そうですか。なら……」

「え、ちよ、待っ……」

「お別れですわね！」

「へぶっ!？」

チカツと奴の持つライフル『スターライトmkⅢ』の銃口が光ったと思った瞬間、放たれたエネルギーの弾丸が動揺で動けなかった俺の眉間を撃ち抜いた。凄まじい衝撃に脳を揺らされ、意識が一瞬だけ遠ざかる。視界も暗転し、気付いた時には目の前に地面があつた。ドオオン、という轟音と共に俺はアリーナの地面へと叩きつけられ、更に余った勢いで一回二回とそのまま転がった

「ぐ、おおお……!？」

マズイ、動けねえ。撃ち抜かれた頭や地面に打ち付けた体は絶対防御にバリアーと
いった、I Sの搭乗者保護機能によって守られているため傷はないが、攻撃を受けた時
に発生する衝撃までは殺せない。肩やら足なら持つていかれそうになるだけかもしれ
ねえが今俺が被弾したのは頭部だ。脳が揺さぶられたせいで視界はぶれまくり、頭痛も
酷く気持ち悪くて堪ったもんじゃない

とにかく、立ち上がらなくては。上手く回らねえ頭を限界まで動かし、コールしたブ
レードを杖のようにして無理矢理体を起こした。しかし、これ以上動くのは無理だ。I
Sを動かすにはイメージが必要、しかしそのイメージを浮かべる脳がやられては話にな
らん

「(や……べえ……逃げ……)」

「……やはり話になりませんわね。終わりにしましょう」

心底失望したと言わんばかりの口調に悪寒が走った。次の瞬間には弾丸が雨のよう
に降り注ぎ、動けない白式の装甲を的確に貫いていく。その度に減少していくシールド
エネルギー、特に最初の一撃は絶対防御を使わせる程の威力だったようで、試合開始か
ら僅か一分しか経っていないにも関わらず、白式のエネルギーは既に底を尽きかけるま
でとなつてしまった

熱で溶けた装甲が音をたてて煙を上げる。怒濤の雨は俺の症状を悪化させるのには

十分であり、立つことすらままならなくなつて膝をついた。聞こえるのは自身の荒い息遣いだけ。ハイパーセンサーが補助してくれる筈の視界もろくに見えてはいなかった

「はあ………はあ………」

「無様ですわね。最初からこうなることなど分かつていたでしょうに」

目の前からセシリア・オルコットの声が聞こえる。まさかわざわざ降りてきたのか？力を振り絞り、支えにしていたブレードで斬りかかる……が、いつの間にかその刀身は半ばから融解してなくなつていた。唯一の武装兼支えすら失つた俺は成す術なくその場に倒れ込んだ

情けねえ。その一言に全て尽きた。この一週間、色んな人から指導を受けて対策を練つた。千冬姉や山田先生には補習に付き合ってもらつたし、ほーきちちゃんには剣道で鍛えてもらった。にも関わらず一瞬の間で全てが台無しになつてしまった

くそ、明日からどんな顔して会えつてんだよ……畜生め

その後、俺の意識はライフルの一撃によつて完全に刈り取られ、同時にシールドエネルギーも跡形もなく消滅した

クラス代表決定戦、俺はセシリア・オルコットに善戦するどころか、一矢報いることすら出来ず敗北した

7話 ワンサマー、嫌気が差す

「……ん」

目覚めれば知らない天井が目の前にあった。どうやら自分は横になっていているらしい。むくりと体を起こしてキョロキョロと辺りを見回し、少しして漸くここが保健室らしき場所であると分かった

何故に保健室？という疑問はすぐに解決した。俺がセシリア・オルコットに惨敗したからだ。頭に弾丸を受けたせいで脳震盪らしき症状に襲われ、満足に動くことも出来ずに蜂の巣にされた。で、試合が終わると同時に意識を失った俺はここに運び込まれたと、多分そういう流れなんだろう

成り行きを思い出せば途端に憂鬱な気持ちになってくる。試合に負けたことはまだいい、元々勝てる見込みも薄い試合だったから。だがその負け方があまりにも酷い。この一週間俺のために時間を使ってくれた人の期待を悉く裏切るような試合をしてしまった、それがどうしようもなく嫌になった

「……どうしよう」

頭を抱えたってどうにもならねえことは分かっている。俺は千冬姉の顔に泥を塗った

のだ。弟の俺のせいであの人の評価を貶めた。そんな自分が情けなくて、不甲斐なくて、バタツとベッドに勢いよく背を預けた

その時、コンコンとノックの音が聞こえた。そこから一拍置いて扉が開き、千冬姉がゆつくりと入って来る。彼女は目覚めた俺を見ると少し驚いたような顔をして、そしてすぐに柔らかな表情を作った。どうやら教師モードではないらしい

「目を覚ましたのか。どこか体に違和感のある箇所はないか？」

「いや、全然問題ねえ。今すぐにでも動けそうだ」

「そうか、だがまだ安静にしている。脳震盪と全身を強く打っているんだ、今日と明日はここから出ることは許さんぞ」

ライフルで脳天をぶち抜かれ、ついでに高所から落下してもその程度で済む辺り、I S するのはつくづく優れた性能をしている。絶対防御やバリアーがなければ先の試合で軽く二桁は致命傷を受けていただろうことは想像するに難くない。それをたった二日大人しくしてるだけで治るのなら喜んで従うことにしよう

「千冬姉……」

「試合のことか？ 酷いものだったな。今まで数多の試合を見てきたがあれほど一方的かつ早く終わった試合は稀だぞ？ もっとと精進しろ」

グサツと心に突き刺さる。手厳しいな、おい。まあその通りだから弁明の一つも出来

ねえんだが……

「ごめん千冬姉。色々教えてもらったのにあんな負け方して」

「そう思うなら次に生かせ。後悔するだけなら誰にでも出来る。失敗から学ばなければIS学園ではやっていけない。それでも駄目なら聞きに来い。我々教師はそのためにいるのだから」

ニヤリと千冬姉は不敵な笑みを浮かべる。でももし、また自分がこの人を裏切ってしまったら……と、そこまで考えて俺は思考を振り払った。やめよう、俺だって好きで失敗してる訳じゃねえんだ。千冬姉の言う通り今回の惨敗は次に生かす

「ありがとう、千冬姉」

「ああ……つと、そうだ。何か夕食の注文はあるか？代わりに食堂から貰ってきてやろう」

……いやいや、流石にそれは駄目だろ。姉とはいえ世界最強のブリュンヒルデを顎で使うとか恐れ多いわ

「千冬姉、それはちよつと……」

「何、遠慮はいらん。そうだな……確か一夏は酢豚が好きだったか？」

「やめてくれよ。酢豚は鈴の以外は食わねえって決めてんだ」

即答した。つてか言わせてもらおうと俺はただの酢豚が好きなんじゃなくて、鈴の料理

した酢豚が好きなんだよ。他の中華はまだいいが酢豚だけは絶対に譲れん

結局折れた俺はペペロンチーノを注文し、それを受けた千冬姉は得意顔で去っていった。誰もいなくなつた保健室で欠伸を一つ、マイナス思考がむくむくと膨れ上がるのを強引に押し留める。気晴らしにと窓から外の景色を眺めながら、俺は晩飯がやって来るのをただぼんやりと待っていた



次の日、安静を言い渡された俺はベッドの上でひたすら持つてきてもらった参考書と教科書を読んでいた。勿論、イメージトレーニングをすることも忘れない。昨日飛んだ感覚を思い出しながら右へ左へ、自由自在に頭の中を駆け回った

つーか俺の専用機……白式って一体どこいったんだ？専用機ってのは基本的に待機形態として持ち主の傍から離れないって聞いてたんだが……一次移行も終わつてなかつたことだしどこかに保管されてんのかね？次に千冬姉と会つたら聞いておこう

にしても剣^{ブレオン}のみつてどういふことだよ。常識的に考えておかしいだろ。俺に専用機が渡される理由ってデータ収集のためだったよな？武装が近接ブレード一本の機体からどんなデータが得られるのか説明してもらいたいもんだ。ああいうのはテレビや

ゲームの内側か世界最強千冬姉が使うからこそ強く見えるんであって、それ以外の奴に使わせようとするとは悲惨なことになるのが分からのか

別に白式だから負けたんだって言い訳するつもりはねえ。訓練機で汎用性の高い打鉄やラファールに乗っていたとしても負けてただろう。それでも白式は俺が使うにはちとピーキーな機体だ。一次移行が終わったら武装の全体的な見直しをしなければ、俺は心に固く誓った

キーンコンカーンコーン

そんな馬鹿みたいなことを考えている内にチャイムが鳴った。とはいえ怪我人の俺には関係ないこと、参考書を読む作業を再開してペラペラとページを捲る

コンコン

突然のノックに俺は顔を上げた。千冬姉でも来たのだろうか、とりあえず「どうぞ」と入室を促しておく。そして入って来たのは……千冬姉じゃなくてクラスメイト達だった

「失礼する」

「やつほく、おりむー！」

「ほーきちちゃん、布仏さん……と、ボーデヴィツヒもか」

これには少し驚いた。今日は千冬姉や養護の先生以外の人には会えねえだろうと思っていたのだが……お見舞いに来てくれるダチがいるって良いもんだなあとしみじみする

「体は大丈夫なのか？昨日は……その……随分酷くやられていたようだが」

「そうだよ……なんか見せて可哀想なくらいだったよ……」

心配そうに、それでいて申し訳なさそうな口調でほーきちちゃんと布仏さんが言う。やっぱ端から見てもボコボコにされてたんだな、俺

「大丈夫、明日からは動いてもいいって先生にも言われてるから」

それより、と俺は話を変える

「なんかクラスで変わったこととかなかった？勝ったけどクラス代表が面倒になったセシリア・オルコツトが俺に押し付けたとか、あと——」

——俺への中傷とか

そう言った瞬間、ほーきちちゃんと布仏さんの動きが止まった。よく見ると視線があつちこつちへうろうろとし始めている。俺はそんな二人の挙動不審な態度から自分の予想が間違っていないかつたことを理解した

全く、そうなるだろうとは思っていたがこうも予想通りとはな。最初っから期待なん

ぞしてなかったが女つてのはどこに行つても変わらんらしい。掌返しはもう見飽きた

「はあ……ボーデヴィツヒ、そいつ等がなんて言つてたか覚えてたりするか？」

「『千冬お姉様の弟なのに惨敗した』、『とんだ期待外れだった』、『あんな試合をして恥ずかしくないのか』、『お姉様の面汚しだ』、『やはり男は使えない』……他にもまだまだあるが大方がこういった類いだ。共通して言えることは、奴等は教官の弟である貴様がセシリア・オルコットに手も足も出なかったことが余程気に食わんらしい」

淡々とボーデヴィツヒは知りたいたいことを教えてくれた。にしても好き勝手言つてくれるな、おい。人が大人しくベッドで横になつてゐるのを良いことに。中学の頃に耳が腐るくらい聞いた台詞ばかりだが、どいつもこいつも考えることは同じつてことかよ、胸糞悪い

「で、でもねおりむー！ゆこつちとかナギナギとか、おりむーの頑張りを知つてゐる人はそんなこと言つてないよ！だから、その、皆が皆おりむーのことを悪く言つてゐる訳じゃ……」

「布仏さん、ありがとよ。別にもう慣れつこだからあんま気にしないでくれ」

慣れつこ、その意味を察することが出来たのはこの中でボーデヴィツヒだけだ。理解出来なかつた二人は首を傾げている

試合に惨敗したことである程度の人数が掌を返すのは分かっていた。俺としてはむ

しろ、布仏さんのように気を遣ってくれる人がいることの方がありがたく思える。こういう人はただいてくれるだけでも気持ち的にかなり楽になれるのだ

……正直、明日からの学園生活に不安がないかと問われると答えのはノーだ。好奇の視線は侮蔑のそれへと変わり、絡んでくるような面倒くさい輩も増えるだろう。注意する立場にいる先生がまともであるのがまだ救いか。何かあれば遠慮なく頼ろう

代表候補生に負けるという、ある意味当然とも言える結果にも関わらず生徒達はこんな調子だ

もしこれ以上のことをしでかしたなら、俺という存在は一体どうなってしまうのか
入学してからまだたったの一週間、始まったばかりの学園生活に俺は早くも嫌気が差してしまった



怪我が完治し、学園生活に復帰してから更に一週間が過ぎた。一週間経った今でも学園は『織斑千冬の弟であり唯一の男性操縦者である織斑一夏がイギリスの代表候補生に惨敗した』という噂で持ちきりであり、ちよつかいを掛けられた回数も軽く両手両足の

指の数を越えるようになった。まあ昔に比べると可愛いもんなのであまり大した問題じゃねえと俺は思っている。空気を読まん新聞部は追い返したが

セシリア・オルコットとの試合で使った俺の専用機、白式は第三アリーナの倉庫に眠っていたらしく、この一週間で無事に一次移行を終えることが出来た。鈍い銀色の装甲は名前の通り真つ白に染まり、無骨なフォルムもシャープな感じに変化。操作性も以前と比べて格段に良くなっていて漸く専用機らしくなった

ただ、こいつに一番驚かされたのはその武装と力だ

雪片式型。かつて千冬姉が現役だった頃、愛機『暮桜』が振るつた剣。その後継型が白式唯一の武装だった

更にもう一つ、白式が一次移行をしたことで解禁された力がある。それが零落白夜——シールドエネルギーを含む全てのエネルギーを消滅させる単一仕様能力——だ。千冬姉が世界を掴んだ二つの要素、それが俺の白式に注ぎ込まれていたのである

はつきり言おう、迷惑以外のなんでもねえ

零落白夜は確かに強い。シールドエネルギーを消滅させるということは、相手に絶対防御を必ず発動させるということである。一撃必殺をそのまま形にしたかのようなこの力は、千冬姉のように相応しい使い手が振るえばISバトルにおいて無敵と言つても過言ではない

しかしそれは逆に考えれば、剣一本であらゆるISと戦えるような者怪物でなければ、その強さを発揮出来ないということでもある。加えて零落白夜には欠点があり、発動中は自らのシールドエネルギーを消費しなければならぬ諸刃の剣なのだ。こんなハイリスクハイリターンな力をトーシローの俺が使いこなせるのか、当然無理である。当てる前にこつちのエネルギーが尽きて自滅するのがオチだ

それじゃ零落白夜は使わずに別の武装を使おうという発想に至るのだが、何をとち狂つたのか白式の拡張領域バーススロットのほぼ全てが零落白夜に喰われていたのである。本来ならば二次移行後でなければ使えない単一仕様能力を、一次移行後の段階から使えるようにした代償らしい。これにより白式にはハンドガンどころか、ナイフ一本すら入れておく

ことが出来なかった

つまり白式の特徴をまとめると……

- ・ 武装は近接^{雪片}ブレード^式一本のみ。ブレオン
- ・ 零落白夜が使える（使いこなせるとは言っていない）
- ・ 後付^{イコライザ}武装の搭載が不可能。ナイフ一本入れられない

……これ俺の専用機じゃなくて千冬姉の専用機だろ。間違っても初心者に渡すような機体じゃねえよ

「つーか何がまずいって、これが周りにバレたら『織斑一夏は生意気にも織斑千冬と同じ力を使っている』みたいな風になることだよ。しかも使いこなせねえからゴミクズ扱いされるのは間違いないねえし……白式からも千冬姉みたいになれって言われてるみてえで本当に辛い」

俺は織斑一夏だ。千冬姉じゃねえんだよ

「はあ……」

思わず溜め息が溢れた。今俺がやってるのは移動の練習、ISを使うことにおける初

歩の初歩だ。専用機つてことで動きやすいっちゃ動きやすいんだが……動き自体はとてつもなく拙い。動きは一々止まるしバランスもよく崩す。今の俺はある程度のイメージをまとめてからでなければろくに移動することも出来なかった

『ねえ、あれが噂の男子？』

『イギリスの子に手も足も出なかつたんだつて』

『千冬お姉様の弟の筈でしょ？下手くそな操縦ね』

『あんなのが弟なんて死んでもごめんだわ……千冬お姉様が可哀想よ』

アリーナ内、または客席のあちこちから生徒達の声が聞こえる。ISには視覚を補佐するハイパーセンサー以外に、聴覚を補佐する機能も搭載されている。故にどんなに小声での会話でも拾うことが出来る、出来てしまうのだ。ISは本来、宇宙での活動を想定しているから

ならばお前なら勝てたのか、あの人の弟に相応しい戦いが出来たのか、俺は大声で言つてやりたかった。けど、そんなことをしたつて何も変わらないのも分かっている。やるせない気持ちのまま悪態を一つつき大人しく訓練に戻ろうとした、ちょうどその時……

——警告。ロックされています

「……は？」

そう眩くのとほぼ同時に左肩を強い衝撃が襲った。耳障りな金属音が鳴り響き、俺はバランスを崩して吹っ飛ばされる

攻撃を受けた。その事実を食らってから俺は理解する

「やったあ！当たったり〜！」

アリーナに響く間抜けな声、俺は反射的にそちらを向いた。視線の先には訓練機であるラファール・リヴアイヴに乗った顔も知らない生徒が三人、その一人がアサルトライフルの銃口を俺へと向けている。あいつが俺を撃つたことは疑うまでもない

「やるじゃん！それじゃ次は……！」

そう言ってもう一人の奴もアサルトライフルを展開する。途端に白式が警告音を鳴らした。訳が分からんがとにかくヤバイ！スラスターを噴かして急いでその場を離れる。不格好だが今度は奇跡的に回避が成功したようだ

「……ちっ！なんで動くのよ！」

外した奴が突然キレ始め、いよいよ俺の混乱もピークに達する。訳が分からねえ、一

体俺が何をしたってんだよ。いきなり銃で撃たれるようなこと……は……まさか……

「大人しく私達の的になりなさいよ！男のくせに専用機まで持って！」

「アンタみたいな無能がいると迷惑なのよ！千冬様の弟だからって雑魚は雑魚らしく撃たれなさい！そうすれば千冬様だって……」

……言葉も出なかった。ISを使って、何故そんな馬鹿げたことをさも当然のように言えるのだ？これは人を殺す兵器にもなりうるとこいつらは理解していないのか？よくある嫌がらせだということは分かっている。だがそこにISという要素が加わった瞬間、俺はただ絶句することしか出来なかった

「……いいわ、私達は優しいからアンタの特訓を手伝ってあげる。三対一の模擬戦よ、感謝しなさい！」

「なっ……！！」

滅茶苦茶な、という言葉は飛来した弾丸によって消え去った。こつちのことなどまるで無視し、三体のラファールはそれぞれの武装を手に俺へと襲い掛かった

アサルトライフルによって上空から降り注ぐ雨。狙いの精確さなどセシリア・オルコットとは比べ物にならないレベルだが、それを補うように凄まじい量の弾幕が張られている。これでは点ではなく最早面だ

「ちっ、くそお……！！」

俺には離れた相手を狙う術はない。白式にあるのは近接ブレードの雪片式型と零落白夜のみ、接近しなければ話にもならん状態だ。しかし絶え間なく襲い来る銃撃を前に突進でもしようものなら、瞬く間に蜂の巣にされることは想像するに難くねえ。しかしそれ以外の策を考えられるような余裕も、実行出来る技術も俺には皆無だ

結果、罵詈雑言を聞き無様にも被弾しながら逃げることしか出来ない

——シールドエネルギー、残量143。機体損傷度60%。回避を優先してください
「むしろ回避しかしてねえつつうの……!」

一方的な攻撃が始まりまだ数分、苛立ちのあまり白式の通知にも毒を吐く。俺はこの時避けるのに精一杯で相手を見ていなかった。だから……接近してくる敵への対応が遅れた

「隙有り!」

「しまっ!」

下から迫ってくる一機のラファール、そのブレードが白式のウイングを捉えた。バチバチと火花を散らすそれは使い物にならず、目に見えて白式の機動が鈍くなる。負けじと此方も雪片で応戦するがここで経験の差が明らかとなり、難なく受け止められた挙げ

句に蹴りまで叩き込まれた。その衝撃は凄まじく、俺はアリーナと客席を隔てるバリアーにぶつかってずるずると地面へ落下する

——シールドエネルギー、残量59。機体損傷度80%。戦闘継続は困難です、退避してください

無機質なメッセージが目前に表示される。このエネルギー残量では零落白夜も使えない。顔を上げればニヤニヤと俺を嗤いながらアサルトライフルを構えるラファールの姿が。避けなければ、そう頭では理解しているのだが体の方は言うことを聞かない。ハイパーセンサーで補佐された目が引き金に力を込められるのを見た

やられる、そう確信した俺が次の瞬間に見たものは……

横から突如、目視することすら困難な速度で突っ込んできた打鉄に顔面を蹴り飛ばされるラファールの姿だった

「がっ……!?!」

「え……?」

蹴り飛ばされた操縦者が悲鳴を上げる間もなく墜ちていく。時速何百という凄まじい速度でやって来た特殊合金の塊に顔を蹴られたのだ、恐らくその威力は操縦者の意識を奪うには十分なものだったに違いない。あまりに突然の出来事に、俺と二機のラファールはその様子を見ていることしか出来ない

しかし打鉄は止まらない。手にしていた日本刀『葵』で一機のラファール目掛けて驚異的な速度で斬り掛かった。俺を狙うためにアサルトライフルを装備していたラファールは突然の近接戦闘に対応出来ず、ばつさりとそのライフルは切断された。残っていた一機も慌てて発砲するが打鉄はそれを悉くシールドで弾き、アサルトライフル『焰備』を連射して応戦した

「……どうして」

『勘違いするな』

ポツリと溢した疑問にプライベート・チャンネルからまさかの返事が来る。まだ使い方

の分からない俺は彼女の言葉にただ耳を傾ける

『私は私が邪魔だと感じたから戦っているに過ぎん。人が静かにISを使ってるのにこいつらが煩くては気が散る。貴様が倒れようがなかろうが私には関係のない話だが、こいつらは片付けてやる』

二機のラファールを翻弄しながら

そいつは……ラウラ・ボーデヴィツヒはいつものようにそう言った

8話 ワンサマー、頼る

——私は出来損ないで、落ちこぼれの兵士だ

以前、ラウラ・ボーデヴィツヒはそう語った。千冬姉の指導を受けて成長出来なかつた自分をそう貶めた

それを聞いて俺はこう思った

ボーデヴィツヒはISの扱いが上手くないのかもしれないかもしれねえ、と

その考えは半分正解で、しかし半分が間違いだつた。確かにボーデヴィツヒは特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ黒 兎 隊においては、彼女の言うように出来損ないの落ちこぼれだつたのかもしれない。

現に彼女は軍を辞めさせられ、このIS学園にやって来ているのだから

しかしそれはあくまでも黒 兎 隊シュヴァルツェ・ハーゼ内での話で、考えてみれば分かることだ。真正正銘の軍人であり何年も昔から日々訓練に明け暮れていた彼女が、一般の生徒程度に後れをとるだろうか？

目の前で行われている戦いは、まさに一方的であつた



ギイン！という音をたてて打鉄の日本刀がラファールの装甲を斬り裂く。呆然とする操縦者を横目にボーデヴィツヒは更に連続で得物を振るった。その一撃一撃は全て装甲の剥がれた部分を捉えており、ラファールの絶対防御が発動して大きくシールドエネルギーが減少した。トドメとばかりに繰り出された蹴りは的確に操縦者の胴体を直撃し、ボーデヴィツヒは蹴った時に生まれた反動を利用して別のラファールへと向かっていく

無駄がない、それが最初に俺が抱いた感想だった。素人目だがボーデヴィツヒは何も特別な技術を使っている訳ではない筈。では何故あそこまで流れるような動きが出来るのか、俺はきつとこれまでに彼女が積み重ねてきた訓練の賜物なんだろうと思う。何百、何千、何万と繰り返し返してきた動きだからこそ、あんなにも無駄なくスムーズに行えているのではないだろうか

「嘘……どうしてシールドエネルギーが減らないのよ！」

ラファールの操縦者は半ばパニックになりながらアサルトライフルを撃ちまくる。しかしそれらの大半は打鉄に備えられている肩部のシールドによって防がれ、防がれたもの以外は全てかわされていた。どれだけ撃つても打鉄のシールドエネルギーが全く減っていないのは、ボーデヴィツヒの並外れた反射神経と操縦技術が理由だったのだ。

金色の左目が獲物を見つけた肉食獣のようにギラリと光る

「そこっ！」

「きゃあ!？」

そしてとうとう一気にスラストを噴かして至近距離まで接近したボーデヴィツヒの牙が、ラファールのアサルトライフルを両断した。慌ててブレードを取り出そうとするラファールだがそれは下策だ

量子化した武装を取り出すには取り出す武装のイメージをまとめなければならぬ。イメージをまとめるということはつまりその作業に集中しなければならず、例えば一秒にも満たない時間であっても隙が生まれるのだ。そして、ボーデヴィツヒ程の腕を持つ者が、その隙をみすみす見逃す訳もない

「甘いっ！」

「ああー！」

袈裟斬りを繰り出してからその勢いのまま薙ぎ払い、ガガガガツと最後にアサルトライフルで締める。その洗練された一連の流れに思わず見蕩れてしまった。シールドエネルギーがなくなつたのか、ラファールは徐々に空から地へと墜ちていく。たった一機の打鉄に三機のラファールが全滅した瞬間だった

「す……すげえ……」

「……やはりI Sをフアツション程度にしか認識していない連中では相手にならんな。三対一で私程度も倒せんようではまだまだ力不足だ」

ほぼ無傷で圧勝したボーデヴィツヒが俺の近くへ降りてくる。私程度と彼女は言うが個人的にはかなり強いと思う。もしかしたらセシリア・オルコットを相手にしてもかなりやれるんじゃないのか？

「無様だな。あの程度の連中にしてやられるとは」

ギロリと彼女のオッドアイが俺を射抜く。不甲斐ない自分が情けなくて俺は唇を噛んだ

「……返す言葉もねえ。助かったよ、ボーデヴィツヒ」

「ふん、礼など不要だ。私が邪魔だと思ったから片付けたに過ぎん」

それでもだ。理由はどうであれ俺がボーデヴィツヒに助けられたことに変わりはない。え。もう一度深く頭を下げると彼女は呆れたように溜め息をついた

「……まあいい。で、いつまでそこにいるつもりだ？ シールドエネルギーは残り僅か、おまけに機体も損傷だらけではろくに訓練も出来まい」

「そうなんだよなあ……くそが、随分派手にやらかしやがって」

俺はボロボロになった白式の状態を確認する。機体損傷度は80%を越えており、スラストの一部にも異常が出ている。この分では今日の訓練は切り上げざるを得なさ

そうだ。I Sには自動で機体を修復する機能が備わっているが、これだけ激しく損傷していれば明日になっても直っているかどうか……妙な連中に絡まれた上に機体もやられるとは、今日ほんとんだ厄日だ

「仕方ねえ……今日はもう大人しく寮に帰るとするか」

「そうか、なら私も戻ろう」

あれ？なんでボーデヴィツヒも一緒に戻るんだ？まだアリーナの利用時間はある筈なのに。そう尋ねると何故か睨まれてしまった

「お前はあれだけの騒ぎの後でもものうのうと訓練を再開しろと言うのか？今の私にはかつてのように自らを追い込んででも訓練をする必要はないが……」

「マジごめん」

確かにさっきの騒ぎの原因は俺にもあるしなあ……喧嘩売ってきたのは向こうだけ
ど

その後俺達は制服に着替え、第三アリーナを後にした



「零落白夜……か。また凄まじい力を得たものだな、一夏」

「こつちとしちやありがた迷惑だよ。これじゃ千冬姉と比べてくれって言ってるようなもんじゃねえか」

晩飯後の1025室、俺はほーきちちゃんとボーデヴィツヒにそう愚痴りながらベッドに倒れる。寝心地抜群のベッドはそのままズブズブと沈んでいき、なんだかそのまま意識も手放したくなってきて……つと、まだ眠る時じゃねえっての

俺は同室であり信用のおけるほーきちちゃんとボーデヴィツヒの二人に雪片や零落白夜の存在を明かした。この二つは俺には手の余る代物であり、今はこれからどうすればいいかを相談しているところである

「教官の弟である貴様に教官と同じ力と武器……か。何か作為的なものを感じるな」

「その白式を開発したのは倉持技研……だったか？一夏が千冬さんの弟だと知って急遽手を加えたという可能性も考えられる」

チラリと二人の視線が俺の右腕に集まる。そこに付けられた純白のガントレット、それが白式の待機形態だった。ISの待機形態ってアクセサリー系になるって参考書なんかには書いてあったんだが……やっぱ俺が男だからだろうか。俺は白式を撫でながら至極真剣な声で尋ねる

「返品とか出来ると思う？」

「無理だろうな」

「ですよね〜」

やはりどう足掻いても俺がこの白式を使いこなせるようになるしか選択肢はない。世界最強と同じように戦えんんぎ、トーシローには随分とキツイ要求だ。一体いつになれば出来るようになるのか想像もつかねえ

というか一つだけ言わせてほしい。なんで俺はこんなに悩んでるんだ？俺が何か悪いことをしたのか？勝手にクラス代表に推薦されて、勝手に試合を決められて、勝手に欠陥品を押し付けられて、負けたらクズだと罵られる。なんつーかあらためて考えると理不尽だよなあ……

「小学校時代に戻りてえ……」

「……そこは中学校時代ではないのか？」

「中学の頃はろくな思い出がなかったもんでね。戻るならやつば小学生だわ」

あ、でもそれじゃあ弾の奴には会えねえな。それでも中学時代はもう懲り懲りだし……ああ、このまま現実逃避して終わる頃には問題が全部解決してりゃいいのに。枕を抱き締めながら俺は溜め息を溢した

「なあボーデヴィツヒ……駄目元なただけど俺にISを教えてくれねえか？この一週間自分なりにやつてはみたんだが、どうも効率が悪いような気がしてならねえ。コーチ役が一人いてくれるとすげえ助かるんだけど……」

「……都合が合うときには考えておいてやる。あまり期待はするなよ」

……え、マジで？ オツケーなの？ 完全に駄目元だったんだけどオツケーなのか？ いや嬉しいんだけど、嬉しいんだけどなんかえらいあつさりだな。「貴様の頼みを聞く義理はない」みたいな感じで断られるもんだとてつきり。するとほーきちちゃんが不思議そうな顔をした

「ボーデヴィツヒはコーチ役など出来るのか？」

「私はここに来るまで軍人でな、操縦技術だけはそれなりに自信があるつもりだ。まあ、出来ることなど教官の真似事くらいだが……」

軍人、その言葉にほーきちちゃんは一度驚いた表情を作るがすぐに納得したように頷いた。確かにボーデヴィツヒが元軍人だっって言われたら驚くよな。線は細いし小柄だし。でも言われたら納得出来るのも不思議だ

何はともあれ、力になってくれるならこれだけ心強い存在もない。今日の戦いでどれだけ強いかは嫌ってくらい思い知った訳だし

「ありがとうボーデヴィツヒ、マジで助かる」

「言っておくが私の特訓は甘くないぞ？ たかがISを動かせる程度の一般人が簡単についてこられるとは思わないことだ」

「上等」

俺はニヤリと笑った。素人が闇雲に動くより経験者から教えを乞う方がきつと上手くいく筈だ。今のままの俺を待っているのは恐らく嘲笑のみ、ならばどれだけ特訓が厳しくともやるしかなかった

「二夏、専用機のない私ではあまり役に立てないかもしれないが、ISの使用許可が降りた時は是非手伝わせてくれ」

「ほーきちゃん……ありがとう。こつちこそ宜しく頼む」

俺は深く、深く二人に頭を下げる。この学園に来てから不快なことも多々あったが、この二人と出会えたことだけは本当に良かったと思う



時は少し進んで四月の下旬、俺達一組のメンバーは外に出てISの操縦訓練を行っている。ただ説明に時間を使いすぎたのか、せっかく外に出ても残り少ししかない訳だが……その辺りに関しては仕方がないと割り切るしかないだろう

ただ、周りの生徒達は訓練ということで皆ISスーツを着用しているのだが、これが完全に思春期の男子高校生には毒だ。女は好きじゃねえが俺だって女体に興味が無無訳じゃねえんだぞ。だが悶々とする気持ちを態度に出せば待っているのは死のみ、故

に全力で邪な考えを滅する

「それでは最後に専用機持ちに実演してもらおう。織斑、オルコット、前に出る」

名前を呼ばれたので素早く前に出る。千冬姉や俺のコーチ役をしてくれたボーデヴィツヒは行動の遅い奴が嫌いだ、さつさとしなければお叱りが飛んでくるだろう。しかも今は時間も押しているのだから尚更だ

「ISを展開しろ。熟練の操縦者なら一秒も掛からんぞ」

言われた通りISを展開する。待機形態となっていた白式へと意識を集め、爆発させるようなイメージを作ることが俺なりの展開方法だ。ボーデヴィツヒとの特訓で凄まじい回数練習したのでこの辺は滞りなく行える。隣を見ればセシリア・オルコットの奴も既にブルー・ティアーズを展開していた

「よし、飛べ」

そう指示が出された瞬間、ブルー・ティアーズが急上昇していく。負けじとそれを追ってみるがなかなか操縦が上手くいかねえ。そういえば急上昇の練習は初めてだった。悔しいことに操縦技術では向こうの方がまだ遙かに上らしい。俺だつてボーデヴィツヒとほーきちゃんのおかげで移動だけはそれなりに上達した筈なんだが……代
表候補生つてのはやっぱりとんだエリートだな

「上手いもんだな……」

『この程度、代表候補生なら当たり前ですわ。侮らないでくださいまし』

プライベートチャネルに通信が届く。別に馬鹿にしてなんかねえ、むしろ感心してるくらいなんだがな。ああいう動きは練習してりや分かるが一朝一夕で身に付くもんじゃねえ。セシリア・オルコットのこれまで血の滲むような訓練をしてきたであろうことは間違いなかった。これで性格が最悪でなけりや良かったんだが……

「そこから急降下と完全停止に移れ。目標は地表から十センチだ」

『先に行きますわ』

そう言い残し、前方にいたブルー・ティアーズが視界から消える。慌ててハイパーセンサーの示す方向に意識を向けると、そこには華麗に急降下と完全停止をやつてのけるセシリア・オルコットの姿があつた。やつぱり、上手い

俺も続かなければならなさそうだが、正直言つて下手すりや地面に頭から突つ込むことになるだろう。穴なんて空けたら一人で整備する羽目にもなる。そんなのはごめんだ。スーッと遅すぎず速すぎない速度で降下し、意識を集中させてピタリと停止する。白式が叩き出した地面との距離は八十センチと少し、つまり完全な落第点だった

「ふむ……オルコットはいい。織斑は練習を積むように。では次、武装を展開しろ」

久々に食らう出席簿と共にありがたいお言葉を受ける。絶対防御があるから痛くはないが衝撃は殺せない。そして周りの奴等が笑っているのが無性に腹が立った

で、次は武装か。俺は雪片を出す際にはさっきの I S を展開した時とは異なり、名前をコールして展開する教科書通りのやり方を採用している。ただ、馬鹿正直に「雪片！」とか言えばまた騒ぎになることは目に見えている。故に――

「――来い」

この一言で済ませる。たった二文字の言葉で展開出来るようになったのはまさしく特訓の成果だ。加えて白式には武装が雪片しか存在しないためイメージ自体はかなりまとめやすい。時間にしても二秒と掛かっておらず、ボデーウィッチコーチからも初心者ならば上出来の一言をもらっているのだ

……実はこの武装の展開はかなり苦労した。俺の頭の中には無意識の内に『雪片Ⅱ千冬姉の剣』という勝手な認識があつたらしく、いまいち自分が雪片を使う姿がイメージが出来なかつたのだ。最終的にはほーきちちゃんの『雪片ではない無銘の刀を思い浮かべる』というアイデアによって改善はした

「初心者にしてはまあまあだな。だがまだ遅い。一秒未満を目指すようにしろ。オルコットはそのポーズはやめるようにしろ。横に銃身を向けて誰を撃つ気だ？」

チラリと横を確認すると奴のライフルの銃口が此方に向けられていた。危ねえ

「しかしこれは私にとって必要なことで――」

「直せ、反論は認めん」

「——っ、はい……」

叱られてしょぼんとした顔をするセシリア・オルコット。まだ言いたいことがあると思うのだが黙っている辺り、賢明な判断だと思う。千冬姉じや相手が悪かったとしか言えん

「次、近接用の武装を出してみろ」

「はっ」

気を取り直して次は近接武装……なのだが、なかなか展開が上手くいかない。それもその筈、セシリア・オルコットは近接戦闘が大の苦手なのだから。そしてとうとう焦れたのか、やけくそ気味に「インターセプター！」と叫んで展開した。代表候補生としてあるまじき失態であり、これは恥ずかしい

「何秒掛かっている？お前は高速戦闘下において相手に待つてもらおうつもりか？」

「じ、実戦では使うまでもありませんわ！そもそもこの間合いまで相手を入れなければいいだけの話で——」

「戯け、代表候補生ならば遠近の両方に対応出来て当たり前だ。武器の展開すらスムーズに行えんなら貴様は素人の織斑以下だぞ」

えげつねえなあ千冬姉。プライドの高いセシリア・オルコットに素人以下とか……まあ奴も代表候補生なんだし展開くらいはキチンとしてなきや格好もつかんだろう。ただでさえこいつは立候補した時に盛大にやらかしているのだから、これ以上の失態は

流石に……ねえ？

「……つと、どうやら時間のようだな。各自次の授業に遅れんよう素早く着替えを済ませるように。それでは解散！」

おつと、どうやらもう終わりの時間のようだ。蜘蛛の子を散らすように去っていく生徒達を眺めながら白式から降りる。すると此方へやって来る子達が数人……いつもの二人に布仏さん、谷本さんに鏡さんだ

「織斑君お疲れ様〜」

「おりむー、かつこよかつたよ〜！」

「お疲れ様、織斑君」

布仏さん中心の三人による労いの言葉が身に染みる。別に褒めて欲しくてやってる訳じゃねえが、それでも褒めてもらえるのは素直に嬉しい。昔っから千冬姉と比べられてばっかだったから、褒めてもらえる機会もなかなかなかった訳だし……

「ありがと、皆。ほーきちゃん、ボーデヴィツヒ、どうだった？」

三人に礼を言い、特訓に付き合ってくれた二人に感想を求める

「私としては上手くやれていたと思うぞ。武装の展開も最初に比べれば随分速くなっている」

「武装の展開については及第点だ。だが操縦系はまだまだ雑な部分も多い。今後の特

訓にはさっきの急上昇と急降下、それに完全停止も加えるぞ」

「……了解」

こりやまた厳しくなりそうだ。ボーデヴィツヒとする特訓は何も特別なことはしてない。基礎的な動きを繰り返し練習する、それだけだ。ただ、その繰り返す回数想像よりも一桁多いのでかなりハードとなっているだけなのである

はじめの頃はとにかく筋肉痛が酷いし、特訓後は気分悪くて食欲も出ないと散々だったが、最近になって漸く馴れ始めていた。そこに新しくメニューが追加されると……おうふ、考えるのも恐ろしい

「えへへ、ラウラウってなんだか織斑先生みたいだね」

「……私が、きょう……織斑先生と？」

そう言いながら呆けた表情を作るボーデヴィツヒ。こいつがこんな顔をするなんて珍しいな、流石布仏さん

「うん、おりむーに厳しいところとかそっくりだよ」

「うんうん、確かにそうかも！」

「雰囲気とかなんとなく似てるよね」

谷本さんと鏡さんも同意し、ボーデヴィツヒを囲んでキヤイキヤイとはしやぎ始める。当人は迷惑そう、というより困惑したような様子だ。時折向けられる「なんとかし

てくれ」と言わんばかりの視線に思わず頬が緩む

「……楽しそうだな、ボーデヴィツヒは」

いつの間にか隣に立っていたほーきちちゃんがしみじみと呟く。彼女は成長する子供を見るような、とても優しい目をしていた

「へえ……俺には楽しそうってか困ってる感じに見えるけど?」

「それはきつとどう接すればいいのか分からないだけだ。私には今のボーデヴィツヒの気持ちがあんとなくだが理解出来るよ」

私も人付き合いはあまり得意ではないからな、とほーきちちゃんは笑う。人と関わることに馴れていないからどう対応すべきなのか分からない、今のボーデヴィツヒを表すならこういうことなんだろう

その後、本格的にボーデヴィツヒが助けを求めてくるまで、俺達は揉みくちやになる彼女の様子を見守っていた



「……………」がIS学園」

その夜、一人の少女がIS学園の正面ゲート前を訪れていた。時折吹く夜風に艶のあ

るツイントールが揺れる。その鋭い目には不安と期待が混じりあつた複雑な感情が浮かんできり、学園への一歩がなかなか踏み出せないでいた

「えつと……受付、だっけ？」

上着のポケットから一枚の紙切れを取り出しながら少女はぼやく。受け取つた際に慌ててしまったせい、紙には至るところにシワが出ていた

「ん……こんなじやよく分かんないわよ、もう。出迎えもないし自力で探すしかないか……」

大きな溜め息を一つ溢し、観念したかのように学園への大きな一歩を踏み出す。敷地内を大股で歩きながら辺りを見回し、目的地である本校舎を探して移動していく。案内板の一つでも入口に置いときなさいよ、と少女は若干の苛立ちを込めて愚痴つた

「……駄目ね。時間も時間だから生徒とかもいないし……」

時刻は既に八時過ぎ、生徒達は基本的に寮の部屋にいる時間帯である。とりあえず明かりのある校舎に行こうと少女は決める。そこで誰かを捕まえ案内してもらおう、我ながらいいアイデアじゃないかと彼女は一人得意顔を浮かべた

足取りが軽くなった少女だが、不意に幾つかの生徒らしき人影が前を歩いていることに気が付いた。手から下げられた袋から何かを買いに出ているのだろうか。なんにせよ校舎まで行く手間が省けたと少女はニヤリと笑い、此方に気付いていない生徒に声を

掛けようとして……聞こえてきた言葉に足を止めた

「ていうか、あれってまだ学園にいるの?」

「あれ?」

「例の男よ。千冬様の弟なのにびつくりするぐらい弱くて生意気な奴。なんでさつさと退学しないのかしら?」

「やつぱりあれじゃない?世界で唯一男でISを動かせるから……」

「男がISなんて使えなくていいわ。さつさとモルモットになるなりして消えちゃえばいいのに。そうすれば学園の皆が喜ぶんだからさ」

「流石にそれって言い過ぎじゃない?学園の皆ってそんなに嫌われてるの?」

「知らないの?クラス代表を決める試合では相手のシールドエネルギーを1も削れずに惨敗、アリーナで毎日練習してるみたいだけどころかなり下手くそで、見る方がムカつくくらいなの。あんなのが弟だなんて千冬様が可哀想だ、って皆言ってるわ。そのくせに専用機なんて持つてるし……百害あって一理なしの存在よ、あの男は」

「嘘〜!ありえないって〜」

「(どういう……ことよ……!?)」

少女は絶句してその場に立ち尽くした。我に返った時には既に先程の生徒達はいなくなっており、辺りは異様なまでに静まっていた

少女の頭にはある一人の少年が浮かんでいた。いつもなんでもないようなヘラヘラとした笑みを張り付けた、それなりに整った顔つきの少年だ。数年前までいつも行動を共にしており、およそ一月前に世界中を震撼させた少年

少女にとつて、この世で何よりも大切な存在

そして、予想が間違っていないければ先程話題となっていた男のことだった

少女は優れた身体能力で一目散に目的地へ駆け込んでいた。奇跡的にも一度も迷うことなく、である。そして転校の手続きなどお構いなしに、酷く狼狽した様子で事務員の女性に詰め寄った

「あのっ！織斑一夏に何があつたんですか!？」

詰め寄られた事務員の女性はその慌てぶりに当然困惑する。だがそこは大人の対応で一度少女を落ち着かせ、それから織斑一夏の話に移った。指を一つずつ折り曲げて思いつくように少女に語る。少女の願い通り、知っていることを包み隠さずに

彼が一年一組の所属であること

世界で唯一ISを動かせる男でありまた織斑千冬の弟でもあるため、瞬く間に学園中の生徒の注目の的となったこと

クラス代表に推薦され、自薦したイギリスの代表候補生とISバトルをすることと

なつたこと

当日になって専用機が渡されたこと

だがその試合ではまともに移動することすら出来ず、相手のシールドエネルギーを1も削れずに惨敗したこと

それ以来、生徒達の彼を見る目が好奇のものから嘲りのそれに変わったこと

「織斑先生の面汚し」、「出来損ない」等の言葉を受けていること

いくら先生が注意しても全くそれらの消える気配がなく、実際に彼への虐めを行う者もいること

全てを聞き終えた少女はボロボロと大粒の涙を流した。変わっていない、昔と何も受付の前で彼女は泣きじやくりながら何度も訴えた。一夏は悪くない、出来損ないなんかじゃない、姉の付属品でもない。それを聞く女性もまた彼女の言葉に何度も頷いた。結局、少女が泣き止んで手続きを終える頃には九時前となっていた。手続きは完了しました、頑張ってくださいね。そう言つて微笑む女性に少女は赤く腫れた目も隠さずに尋ねた。二組のクラス代表は誰なのか、と。女性は質問の意図を理解出来ず、首を傾げて理由を問う

少女は……鳳鈴音は答えた

「変わってもらいそうですね。一夏の仇は……私が討ちます」
その言葉に、腕につけられた黒のブレスレットが鈍く光った

9話 ワンサマー、再会する②

夢を見ていた。今から一年ほど前の夢だ。ずっと続くもんだと思っていた時間が唐突に終わりを告げた、あの別れの時の夢だった

俺の前には一人の少女がいる。彼女の名前は凰鈴音。小学五年の頃に中国からやって来た子であり、その時から俺にとつて数少ない心の底から信頼をおける存在。また世界で一番大切な少女だ。人をぐいぐいと引つ張つていくような活発な性格で、笑つた時に覗く八重歯が最高にキュートだった

そんな彼女が今、涙目になつて此方を見ている

「やつぱり嫌……あたし、一夏と離れたくない……！一夏と、弾と、まだ一緒にいたいよお……！」

「鈴……」

自分の意思に反して口は勝手に動く。これは夢だ、あの時のことをただ繰り返してやるに過ぎない。まるで録画された映像のように。違うところがあるとするれば俺と鈴以外の人がいないことだろうか。とにかく、俺はそんなシーンをただただ織斑一夏の内側から覗いていた

俺……いや、一夏は震える鈴をぎゅつと抱き締めた。壊れ物を扱うように優しく、壊してしまふほど強く、彼女の体を抱き締める。まるで泣きじやくる子供をあやすように頭を撫で、離ればなれになってしまふ彼女の温もりを決して忘れぬよう、自らの体に刻み付けた

「……ねえ、一夏」

「なんだ……？」

「約束、して……」

鈴が一夏の耳元で囁く

「あたし、もつと頑張る。もつと頑張るから……だから、料理が今よりももつと上手くなったらさ、毎日あたしの酢豚を食べてくれる……？」

すがるような鈴の言葉に一夏は躊躇いなく頷いた。彼女を抱き締める腕に更なる力が込められる

「……ああ、食ってやるよ。酢豚でもなんでも、鈴が作るもんなら全部食ってやる。望むんならいつまでも傍にいてやる。だから……笑ってくれ。俺は笑ってる鈴が好きだからな」

「……ありがとう一夏、大好き……！」

涙で顔がくしゃくしゃになりながらも、それでも鈴は笑顔を作った。俺が好きな人

懐っこい笑顔だ。そんな彼女に一夏は自らの唇を重ねる。別れの間際になって笑った彼女が堪らなく愛しくなって、確かにこうしてキスをした思い出はあるが……こうやって見せつけられると此方が恥ずかしくなってくるな

目覚めが近いのか、だんだんと意識がフェードアウトしていく。そんな中で俺が最後に見たのは、ゲートの向こうに消えていく鈴の後ろ姿だった

あの別れから一年と少し、俺はまだ彼女に会うことが出来ていない



「ねえ、そういえば聞いた？二組に転校生が来るって話」

朝食の時、不意にそんなことを呟いた谷本さんに俺達四人の視線が集まる。因みにそのメンバーはいつもの俺、ほーきちゃん、ボーデヴィツヒ、鏡さんだ。布仏さんは同室の子と食べているようでここにはいない。確か……四組の生徒だったか？一度見たことがあるが眼鏡を掛けた水色の髪の子だった気がする

「転校生？まだ四月なのに？」

「うん、今朝先生が話してるのを聞いた子がいるんだって。中国の代表候補生……」

だったかな?とにかく転校生なの」

鏡さんの問いに谷本さんが答える。中国の代表候補生……ねえ。そういうや鈴は中国でI Sのことを学んでるっていつか電話かメールかで言ってたっけ?俺の頭にその転校生は鈴じゃないかという考えが過るが、そうであるなら代表候補生に選ばれた時に何かしらの連絡を寄越してくる筈だ。きつと転校生は鈴じゃねえんだろう

しつかしどうも今朝から鈴の顔が浮かぶな。最近連絡がとれてないからだろうか?電話しても出るのは知らねえ女だったし、そう考えると俺は一ヶ月近く彼女と話していないことになる。あんな夢まで見るってことはあれか、禁断症状ってやつか

「……大方、男性操縦者である織斑に接触させる政府の差し金だろう。代表候補生ならば転校という形で強引にでもI S学園に送ることが出来るからな」

もつきゆもつきゆとホットドッグをかじるボーデヴィツヒの言葉に寒気が走った。何それ怖い。クラス違うのに接触してくるとかマジで迷惑なんだけど。厄介事の予感しかしねえって……

「そう気を落とすな一夏。まだその転校生とも会ってすらいないのだぞ?」

「そうは言ってもさあ……はあ」

溜め息と共に残った白米を口に放り込む。はつきり言って何か思惑があつて近付いてくるような奴と一緒になんかいたくねえ。そんな奴といてもつまらんだけだし息も

詰まるってもんだ

「…………ふう、ご馳走さんでした」

「え、織斑君もう食べ終わっちゃったの!？」

「流石男の子だね…………」

驚いたように声を上げるクラスメイト二人だがそんなにびっくりするだろうか？確かに同じ定食を頼んだほーきちちゃんはまだ食べているが、別にこのくらいは普通のスピードだろう。てか、朝飯は結構しつかり食べるタイプの俺からすればむしろ二人の方に驚きなんだが。そんな少しの朝飯で午前中をやっていけないのかね？

「そんな量で腹減らねえの？俺なら絶対無理だね」

「わ、私達は…………その…………ねえ？」

「う、うん。これくらいで大丈夫なの…………」

あははは、と誤魔化すように笑う谷本さんと鏡さん。女子つてのは大変だなあ。と、感心している間にほーきちちゃんも食べ終わったようだ

「ご馳走様でした。待たせてしまったか？」

「別に大丈夫。じゃ行こうか」

「ボーデヴィツヒさん、一時間目ってなんだっけ？」

「IS基礎理論だな、担当は確か織斑先生の筈だ」

「うわあ……一時間目から大変。しっかりしなくちゃ」

俺達は口々に思いを口にしながら教室へと足を運んだ。学生寮の食堂から校舎まではたったの50メートルであり、登校時間はなんと僅か数分で済む。でもまあ短すぎて食後の散歩には少し物足りないような気もするが……

そして歩くこと数分、俺達のクラスである一年一組の教室が見えてきたのだが、なんというか……挙動不審な生徒が教室の前をうろろろとしていた。頭の少し高いところで結ばれたツインテールに小柄な体格。改造された制服は大胆にも肩の部分が露出している。後ろ姿だけだが一度見ればまず忘れないくらいの姿だ。にも関わらず俺の記憶にないということとは、もしかすると彼女が件の転校生なのだろうか？その背中に何故か鈴の影が重なり、俺は思わず足を止める

そんなことを考えている間に俺達の視線に気が付いたのか、その転校生？がゆっくりと此方へと振り返った。その際にふわりとツインテールが揺れ、なんとなくその姿がまたも鈴を彷彿させる

そして……その目が見開かれた

「一……………夏……………？」

「鈴……………なの……………か？」

声が震える。予想外のことに脳の動きが疎かになり、思考が全くついてこない。目が限界まで見開かれ、まるで全身が石にでもなったかのような錯覚に陥る

何故？

何故？どうして鈴がここにいる？

考えても答えの出ない問い掛けが頭の中を駆け巡る。周りの皆が何か言っているようだがそれさえも聞こえない。俺の中だけ時間が止まってしまったかのようにだ

茫然自失となった俺を現実に取り戻したのは突然自らの胸部を襲う衝撃だった。気付いた時には既に遅く、そのまま倒れて尻餅をつく。臀部に発生した鈍い痛みは情けない呻き声が溢れるがそんなものはすぐに消し飛んだ

「なくに情けない顔してんのよー！」

見上げればそこには此方を見下ろす鈴がいた。俺の記憶にある彼女がいつも浮かべていたような、自信ありげで人懐っこい微笑みをしている。差し出された手は俺へと向けられており、早く掴めと言われているようだ

そこで漸く、漸く俺は鈴が目の前にいることを認識した。夢でもなんでもなく、彼女はここにいるということをは

「……………ああ、悪いな。よつと……………！」

途端に胸の内から溢れそうになる懐かしさを感じながら、差し出された手をとってゆつくりと立ち上がる。暫く会っていないかった筈だが以前と比べて彼女はあまり変わっていないかった。肩の辺りまで伸びた髪も、黄色のリボンで結ばれたツイントールも、俺よりもずっと小さい身長も。それがまた鈴が帰ってきたという事実を俺に伝えていて嬉しかった

「一年前ぶりね、一夏」

「ああ。久しぶりだな、鈴。あんまり変わってねえようで嬉しいぜ」

「ちよつとそれどういう意味？子供っぽいってこと？これでも結構女磨いてきたんだ

けど」

「違えよ、あの頃みてえに可愛いままだったから安心したって言ってるんだよ」

「そう、なら許したげるわ」

ニツと鈴がいつもの笑みを浮かべる。俺が好きだな笑みだ。緊張で話せねえかと思つたが案外そうでもないらしい。他愛ない言葉が次から次へと口から出ていき、彼女との会話になっていく

そして随分と話し込んでしまったらしく、気付けば一時間目が始まる直前となつていた。そろそろ戻らなければ大変なことになるかもしれないねえ、何せ一時間目の担当は千冬姉みただからな。授業があるのは生徒である鈴も同じであり、「また後で」と一言を残して隣のクラスに戻ろうとした。そんな彼女を俺は呼び止める

「鈴」

「……? 何よ?」

「言い遅れた——」

——お帰り、鈴」

「あ……ええー！ただいまー！」

満面の笑みに此方もつられて笑って見せる。教室へ戻っていく鈴の後ろ姿を見送ってから振り返れば唾然としている皆の姿があり、それが可笑しくてつい笑いが込み上げてきた。こんな愉快な気分になったのも随分と久しぶりなことだった

▽△▽△

昼休み、女子達の情報網つてのは一体どうなつてんのかねえ、と俺は机に頬杖をつきながら考える。俺と転校生である鈴が知り合いであり、おまけに仲がかなり良さそうであるという噂は、短い休み時間の間に学園中へあつという間に広がった。入学当初の頃のようにヒソヒソ話が其処ら中で囁かれまくり、普段以上の好奇の視線からかなり過ごしにくい午前となった

「つたく、勘弁してくれよな……」

「でもびつくりしたよ。織斑君と……嵐さん？が知り合いだったなんて」

「俺としちや鈴が代表候補生だったことに驚いたって。あいつ、今までそんなこと一言も言わなかったんだぜ？」

谷本さんにそうぼやいているとガラリと教室の扉が開かれた。そしてそこから

ひよっこりと顔を出すのは当然鈴だ。教室中の注目が集まる

「一夏、食堂行きましょ」

「分かった、ダチ何人か一緒にでもいいか?」

「友達……いたんだ……」

割りと言面目に驚かれた。失敬な。いやまあ中学時代があんなだったから驚くのも無理はないかもしれねえが……それにしても酷えわ

そんな訳でいつものメンバー……といきたかったところだが、谷本さんと鏡さんは既に約束があるらしく無理だったので、ほーきちちゃんとボーデヴィツヒ、布仏さんの三人を誘って食堂へと赴く。悪名高い男性操縦者はいつも通りかなり目立ち、あちこちから何事かと強烈な視線を浴びる。その度に鈴が顔をしかめるのが意外と大変だった

食堂に着くと鈴は感心したような声を上げていた。料理屋の娘として思うところでもあるのだろうか。各々自分の昼食を注文して受け取り、運良く見つけられた丸いテーブル一つに座っていく。並びは俺から時計回りに、鈴、ボーデヴィツヒ、布仏さん、ほーきちやんだ

「いただきます」

「「いただきます」」

「え……い、いただきますー！」

全員が席についたことを確認してから手を合わせる。俺達にとっては最早いつものことだが、鈴だけは慌てて手を合わせ直した

「さて……なあ鈴、どうして代表候補生になったのを黙ってたんだよ？」

食事が始まったのを皮切りに俺は鈴に問い掛ける。ラーメンを食べる彼女の手が止まった

「ん〜……まあサプライズよ。黙ってた方がびつくりするかな〜、って」

次、あたしから聞いていい？と言いながら鈴は俺のラーメンを自然な流れでとっていき、俺もそれに返事をしながら鈴のラーメンに箸を入れた

「なんでISなんて動かさしちゃったのよ？あたし、初めて見た時思わずラーメンを吹き出しかけたんだから」

「年頃の女の子が何やってんだよ……なんで動かせたのかなんぞ、俺の方が聞きたいくらいだ。本来なら今頃弾と一緒に藍越学園ライフをエンジョイしてる頃だつてのに……」

溜め息を溢しなからチャーシューを持っていこうとした鈴の箸を全力で止める。麺くらいなら許せるが流石にそれは許せんぞ。てかお前のところにもあるだろチャーシュー

「そ、それにしても驚いたわ。まさかアンタにこんなに友達がいたなんてね……」
チャーシューを諦め、同じテーブルを囲む面々を一瞥した鈴が感慨深そうに呟いた
「つと、まあな。俺には少し勿体ねえくらい皆良い奴ばっかりだ」

「そこまで言うんだ。あ、そう言えば自己紹介とかしてなかったわね。今更なただけ
ど凰鈴音よ。宜しくね！」

思い出したように皆の方へ向き直り、持ち前の人懐っこい笑顔と共に鈴は一人ずつ握手を交わしていく。こういうコミュニケーション能力の高さは素直に感心する。俺
じやとてもこういう訳にはいかんだろう

「ねえねえおりむー」

「ん?」

「おりむーとりんりんってどういう関係なの?」

布仏さんからいつか聞かれるだろうと思っていた質問が飛んでくる。気になって
たのか、ほーきちやんまでもが俺の方を向いた。だが俺が反応したのは彼女が呼んだ
「りんりん」という渾名だ。思わずさつと鈴の方へと視線を向けると、彼女はそれに気付
いてゆつくりと顔を横に振った

まるで、気にしていないと言わんばかりに

「……おりむー、どうしたの?」

「……………あ、悪い。俺と鈴の関係だったっけ？うくん……………」

ここでなんと答えるのが正解なんだろうか。大人しく事実というか、素直な気持ちで伝えるのがベストなのか、はぐらかすのがいいのか。聞き耳立ててる連中も結構いやがることだし、あんまり馬鹿正直に答えるのはまずかろう

「幼馴染み兼親友兼相棒、つてところか？」

「盛りすぎでしょ馬鹿」

スパンと横から突っ込みが入る。強ち間違っちゃいねえと思ったんだが……………残念

「幼馴染みってしののんもじゃないの〜？」

「別に幼馴染みはこの世に一人、なんて法律はねえだろう。ほーきちちゃんは小学四年の頃にいなくなっちゃまって、鈴が来たのは五年の頃だよ」

「なるほど、すれ違いになってしまった訳か。だが小学五年の頃からの友人を果たして幼馴染みと呼べるのか……………」

痛いところを突いてくるほーきちちゃん。確かに際どい部分ではあるが幼馴染みの定義自体俺は知らねえし、俺が幼馴染みと言えば幼馴染みで良いんじゃないかね。ギャルゲーによくあるような幼馴染みなんて、むしろそっちの方が珍しいっつーの

「じゃあ次！二人の馴れ初めは〜？」

「あ……………馴れ初めね……………馴れ初め……………」

齒切れの悪い俺の言葉に布仏さんは首を傾げた。あんまり期待されるようなロマンチックな話じゃねえし……正直、言いたくねえんだけど。と、思っていたらその質問に答えたのはまさかの鈴だった

「あたしが転校してきて中国から来てすぐ、クラスメイトの馬鹿共にからかわれていた時期があつたの。で、それを止めに入つたのがその日偶然日直で仕事を終えて教室に帰つてきた一夏よ。『何やつてんだお前ら』ってね」

「おお〜！おりむーかつこいい〜！」

「まあ止めに入つたまでは良かったんだけどねえ……」

そう、止めに入つたまでは良かったのだ。ただそこからは……うん、察してほしい。複数人相手に勝てる訳ねえだろ。ほーきちゃんか「まさか……」と呟いてるが、本当にそのまさかなんだよなあ……思い出しただけでも恥ずかしい

「で、そこからは〜？」

「秘密よ秘密。小学校の頃は毎日遊んだりしてたけど、中学の頃は……その、色々と大変だったから……」

「……」

その意味が理解出来たのは恐らく、当事者たる俺とそれを聞いたボーデヴィツヒだけだ。聞かれたくないという空気を察したのか、布仏さんはこれ以上何も聞いてこなかつ

た。なんとなく微妙な雰囲気俺達のテーブルに広がる

いつか皆にも俺の過去を話せたらいいと思う。でも、拒絶されたくないとも思っている。皆なら今更拒絶なんてしないと分かっているのだが、それでも俺には万が一の可能性が怖かった。

もし拒絶されたら、

もし見捨てられたら、

……どうやら未だに皆を信用出来てないらしい。そんな自分が嫌になり、表情に影を落とす俺の姿を鈴だけが見つめていた

▽△▽△▽△

『——そうか、鈴がそつちになあ……』

「……ああ」

『……良かったじゃねえか。再会出来てよ』

「……ああ、もう絶対離したりしねえ。絶対に、絶対にな……」

夜、学生寮の屋上で俺は弾と電話していた。鈴が来たという知らせは午前の内から

メールで伝えてあり、今はこうして電話で近況報告をしているところだった。最高の親友は俺達の再会を心の底から祝福してくれた

『へへっ、また三人揃ったならどつかにでも遊びに行きてえな。ゲーセンでも、カラオケでも、俺の家でも、一夏ん家でも』

「だな。やるなら盛大にやってやろうぜ。鈴の帰国祝いだ、派手にやるのは当然だろ？」

『ははっ！ そうだな。お前らあんまり学園でイチャイチャすんなよ？ 羽目外しすぎるとお高くとまった女尊男卑の連中に何されるか分かったもんじゃねえからな』

「分かってるよ。じゃあな、弾。またいつか会おうぜ。その時は鈴も一緒だ」

『おう。一夏、色々大変だろうけど頑張れよ』

「サンキュ。そつちもな」

電話が終わる。ツーツーという携帯電話の音がやけに寂しい。四月も終わりが近付きだんだん暖かくなってきているにも関わらず、さっと吹いた夜風に体が震えた

時間は既に八時半を過ぎている。前回電話をした時ほどギリギリではないにしろ、そろそろ戻らなければ恐ろしい寮長姉によるお説教が待っている。一度溜め息を溢してから振り返り、そして足を止めた

「いんなどいんだ」

「鈴」

そいつは、鈴は軽い足取りで俺の隣にやって来た。服装は可愛らしい寝間着で、トリードマークのツインテールも下ろしていた。そして屋上から見える景色に「わあ……！」と声を上げる

確かにここからの景色は凄い。真つ黒な海に離れて見える東京の街。上を見上げれば少し控えめだが星だつて見える。今日の月は欠けていてあまり見栄えは良くないがそれでも十分だ

「ねえ一夏、あたしがいなくて寂しかった？」

不意に鈴がそんなことを言い出した。いつも以上の真剣な顔つきに一瞬驚くが、俺もまたすぐに同じように表情を変える

「……当たり前だ。鈴を忘れた日なんざ一日もねえ。弾と何回『鈴がいれば』って愚痴り合ったか……」

「……そうなんだ」

「ああ……」

実際、中学三年の時は大変だったのだ。元々三人しかいなかった輪から一人抜けければそりゃ寂しくもなるし、何よりも俺の中で鈴が占めていたウエイトが異様に大きかったのも原因の一つだ

「あたしね、心配してたんだ。中学の時に酷い目にあつた一夏がI S学園でやってけるのか。ここに来た時も、一夏が同じような目にあつてゐるって聞いたから凄く不安だったの。またやさぐれてんじゃないかって」

でも、と言って鈴は続ける

「安心したわ。箒も、ラウラも、本音も、皆一夏を一夏として見てた。一夏が笑つてるところなんて、凄く久しぶりに見た気がするわ」

鈴は笑う。でもどうしてか、その笑顔が俺には随分と寂しそうに見えた

「鈴……」

「……ねえ一夏。少し……甘えてもいい？」

「……ああ」

答えると同時に鈴が飛び付いてくる。薄い生地 of 寝間着越しに伝わる日溜まりのような体温がとても心地良い

ある一点、鈴の涙が染み込むところを除いては

「ぐずつ……一夏あ……！会いたかった……！会いたかったよお……！ぐずつ……」

「……」

無言で俺は鈴の背中に手を回し、一年前と同じように彼女をぎゅっと抱き締める。暫く会っていないかった鈴の体はあの頃と全然変わっておらず、すっぽりと俺の腕に収まっていた。つつい腕に余計な力を入れようとすると気持ちを抑える

「寂しかった……！中国に帰っても周りは知らない人ばかりで、お母さんも別人みたいに変わっちゃって……ぐずつ、もう嫌だよ……離れたくないよ……一夏あ……！」

「大丈夫……大丈夫だ。俺はずつと傍にいる。約束しただろ？お前の酢豚でもなんでも食べてやるって。漸く会えたんだ、俺だって、離すもんかよ……！」

泣き止まない小さな子供を落ち着かせるように、俺は鈴へと必死になつて言い聞かせる。そうだ、辛かったのは俺や弾だけじゃねえ。俺達と別れた鈴だって心細かったに決まってるんだ

一組の教室で鈴と再会した時、一瞬だけ彼女が泣きそうな顔をしていた理由が漸く分かった

「捨てないで……捨てないで……！独りは嫌……嫌だよ……！お父さんがいなくなつて、優しいお母さんも変わっちゃつて、もう……あたしには一夏と弾しか……！」

「見捨てない。俺と弾はお前の味方だ。何も心配なんてない。俺と弾がお前を裏切ったことが一度でもあったか？」

ふるふると鈴は首を横に振る。俺は「だろ？」と得意気に笑ってやった。少しでも彼女が安心してくれるよう、背中をポンポンと優しく叩いて頭を撫でる

鈴の両親は離婚した。優しくったおばさんは女尊男卑思想に染まり、今では昔のような面影は一切見当たらないのだと言う。両親のいない俺には分からないが、家族がバラバラになるといふ悲しみは鈴の心に深い傷を残した

鈴は、何かを失うことを極端に怖れるようになってしまった

「大丈夫だ鈴。お前には俺がいる。弾もいる。だから泣くな。俺は……笑ってる鈴が好きだ」

「ぐずつ、ありがとう一夏……！本当に……ありがとう……！」

その後、俺は鈴が落ちて着くまでの暫しの間彼女を抱き締めていた。空には微かだが控えめに輝く星達が見える。誓いを立てるなんてかっこつけた真似は俺には出来そうにないが、それでもこの胸で涙を流す大切な少女だけは幸せにしたい。そんな思いを俺は星々に向けて目を閉じた

10話 ワンサマー、思い知らされる

『第一試合 セシリア・オルコット（二組） 対 凰鈴音（二組）』

翌日放課後、俺を含む多くの生徒は掲示板に貼り出された一枚の紙に釘付けとなっていた。クラス別対抗戦——IS学園での生活において一番最初のイベント——の対戦表だ

「まさか一発目に一番の目玉があるとはなあ……」

俺はしみじみといった具合に呟く。第一試合から専用機持ちの代表候補生同士が当たることになるとは……このクラス別対抗戦が大いに盛り上がることは間違いなさそうだ

「むしろちようど良いわ。あたし、あのイギリス女をぶっ飛ばしたくてしょうがなかったから」

俺の隣で対戦表を見ていた鈴が自信ありげに笑う。過去に負けたことでもあるのかと聞けば「アンタがボコボコに負けたからに決まってるでしょ」と言われ、ついでに「あんな奴に一度でも負けるもんですか」と怒られてしまった

「二夏、アンタこれからどうすんの？」

「いつも通り特訓だな。今日はボーデヴィツヒが茶道部らしいから一人でだけ」

コーチがいなくとも出来ることはある。俺だつてただ言われることだけをやってた訳じゃねえんだから。すると鈴が思わぬ提案をしてくれた

「手伝うわよ？あたし専用機持ちだし」

「マジか、助かる」

渡りに船とはまさにこの事。迷わず即答し、未だにざわめく人混みから離れて二人でアリーナへと向かう。部活で思い出したが、IS学園の校則には生徒は部活ないし生徒会に所属することが義務付けられていたような気がする。身近な人で言うならばーきちゃんは剣道部、ボーデヴィツヒは茶道部、布仏さんが生徒会といった感じだ

やっぱり俺も何かしらの部活動に所属すべきなのだろうか。ただ一刻も早く専用機を使いこなせるようになりたい自分には、とても部活動なんてやってる余裕はねえ。そもそも俺って何やっててもパツとしねえし……昔打ち込んでいた剣道だって離れて久しいのだ

「鈴は部活とかやるのか？」

「ん……確かやらなきゃいけないんでしょ？体を動かすのは嫌いじゃないけど……面倒は嫌いな。とりあえず一夏と同じ部活にするわ」

……嬉しいんだが今の俺にはなんとも困る返事だ。俺も鈴と同じならどこでもいい

んだよなあ……と、そんなことを考えている内にアリーナへと到着した。ここで俺達は一旦別れて更衣室へと向かう。ISスーツは既に着込んでいるから制服を脱ぎ捨てるだけでいい。実に簡単だ

その後、ピットのカタパルトから飛び出してアリーナへと飛翔する。数週間前に比べれば随分とましになったもんだが、それでもまだまだ素人に毛が生えた程度だ。上達はしているようだが、そのスピードはお世辞にも早いとは言えない

強くなりたい。千冬姉の弟の名に恥じぬよう、周りからの重圧に押し潰されぬよう、俺は強くなりたい。そんな想いだけが日に日に大きくなっていく

「……………はあ」

『お待たせ……………つて、どうしたの?』

プライベートトチャネルから届く声に顔を上げれば、そこには赤黒い装甲を身に纏った鈴の姿があった。視界の端っこに映し出される機体名は『シエンロン甲龍』。肩の横に浮かぶ棘付きの非固定浮遊部位アンロック・ユニットが存在感を放っている

「大丈夫だ、なんでもねえ。んじゃ、早速始めるか」

「……………ええ、そうね」

心配そうな鈴に向かって首を横に振り、小さく呟いて雪片をコールする。これが俺にとつて唯一の武装。それを見た鈴もまた自身の得物を取り出した

「ふうん……いきなりやり合おうって訳？」

「いや、その前に少し俺と打ち合つて欲しい。俺が今から打ち込むから鈴はそれをして……」

「防げばいいのね？分かつたわ、それじゃ全力で来なさい。でないとあたしに一撃当てるなんて絶対無理だから」

それは挑発でもなんでもない事実だった。僅か一年の年月で専用機を手に入れた彼女がどれだけ優れているのかなど、わざわざ説明するまでもないだろう。故に、俺も全力で鈴を斬るつもりでいく

「いくぞっ！」

「掛かつて来なさい！」

俺はスラスターを噴かして一気に鈴へと突つ込んだ。白式は装甲が薄い分スピードを出せる。先手必勝と意気込んで振り下ろした一撃、しかしそれは甲龍の持つ青龍刀『双天牙月』によつて難なく受け止められた。ならばと更にスラスターの勢いを上げて甲龍を押すが、ギチギチと金属音が鳴るだけで本体はびくともしない

「くっ………！」

「スピードはあるみたいだけど……それだけじゃこの甲龍は倒せないわよー！」
「ちっ、だつたらー！」

一度雪片と引き、今度は縦横斜めのあらゆるアングルから振るった。辺りに高音が立て続けに響く……が、俺の攻撃は全て双天牙月によって防がれており、甲龍のシールドエネルギーを減らすことは叶わなかった。ハイパーセンサーが鈴のまるで堪えていない涼しそうな顔を捉える

「そんな雑な攻撃、効く訳ないでしょう！」

そんな叫び声と共に放たれた素早い蹴りが俺に突き刺さる。腹部に走る衝撃に酸素が一気に吐き出された

……つて、反撃されたぞおい！

「がっ……!?!」

「まだまだあー！」

さつきと一転して守りに回った俺だが迫り来る二つの双天牙月に翻弄され、少しずつシールドエネルギーが削られていく。二つの得物という手数ของ多さに防御が遅れている。絶え間ない猛攻に息が乱れ始め、その遅れが更に顕著となってきた。最早「待つて

くれ」と言える余裕はない

「はあ………はあ………」

「悪いけどこの程度じゃ終わらないわ。へばってる暇なんてないんだから！」

隙を見てなんとか距離をとったものの、体勢を立て直す暇なくすぐに詰められた。振り下ろされた強烈な一撃を雪片で防ぎ、すぐさまやって来る二撃目を全力で回避する。パワーで押される以上防御は悪手、ならば避ける他に道はない。これまで倒れるくらい繰り返してきた動作面での特訓、その成果をここで出さなければ確実に負ける。俺は反撃を諦め回避に可能な限りの意識を集中させた

速く、もっと速く反応しろ。先の動きを読め。目を見開いてよく見ろ。こんなじゃ、いつまで経っても俺は………！

「う、おおおおお!!」

「やああああああ!!」

どのくらい時間が……いや、大体二分から三分程度か。白式のシールドエネルギーは八割近く減少し、装甲のあちこちが凹み潰れていた。そして対する甲龍はほぼ無傷に等しい。まあ途中から攻撃を諦めてたんだから当たり前つちや当たり前か。意識の大半を回避に向けていたし

「…………ごめん、訓練の内容忘れてた」

「…………だろうな」

ゆつくりとアリーナの地面に降り立ち、展開していた雪片をしまう。全く、こうも歯が立たねえとはつくづく代表候補生つてのはとんでもねえ存在だ。まあ俺が弱すぎるつてのもあるが……手を抜かれていたとはいえ、一先ずはそんな存在と刃を交えるところまでいけた自分を褒めるべきか？

「大丈夫、一夏？あたし、結構やりすぎちゃったかな……」

「特訓なんだ、気にしないでくれ」

暗い顔をした鈴へ平気だと笑った。特訓なんだがやっぱりあそこまで一方的にやられるとなかなかキツイ。ボーデヴィツヒのメニューをこなしていたのだし、驚かせることくらいは出来ると思ってたんだが……現実はその甘くねえってことかよ

「…………りゃ、反省会だな」

重くなる気持ちを振り払うように飛び立ってピットへと戻る。ISの展開を解除すれば、操縦者保護機能によって誤魔化されていた疲労や不快感がどつと押し寄せてきた。頭痛と眩暈に足を止め、支えを求めて近くの壁に手をつく。金属の壁から伝わる冷たさがやけに痛い

「くそっ……」

思わず悪態が飛び出た。この程度でへばってる訳にはいかねえってのに

「大丈夫一夏、肩とか貸す？」

「いや……いい。だいぶましになってきた」

「……嘘ね。強がりには別にいいけどそんな様子じゃ説得力ないわよ。ほら、さっさと腕出して」

止める間もなく鈴は俺の腕を肩へと持っていく、そのままゆっくりと歩き始める。仮にも男子高校生一人の体重を支えている筈のだが、その足取りは異様なくらいしつかりしている。一体この小さな体のどこにそんな力があるんだか……

「ねえ一夏」

「……？」

「あんまり、自分を追い詰めないでね。出来ないとか、情けないって責めるのは、凄く辛いことだから……」

それは、昔から鈴がよく言っていた言葉だった。千冬姉と比べられ、結果を残せなかった俺への慰めの言葉。俺は俺であれ、千冬姉になる必要はないんだと、彼女はそう教えてくれた。今まで離れていたせいか、随分と久しぶりに聞いたような気がする。

「……ありがとう、鈴」

ポツリと小さく呟く。それを聞いた鈴は少し驚いたような顔をしたが、すぐにいつもの表情に戻った



シャワーの音が室内に響く。強い勢いで流れ続けるそれを頭から浴びながら、俺はぼんやりとこれからのことを考えていた。今の自分に必要なものはなんなのか、そう考えた時真っ先に浮かんだ答えが、まるで漫画やアニメに出てくる嘯ませ犬のようで思わず自嘲する

「(強さ……か)」

あらためて今の自分という存在を客観的に見てみる。ISを動かせる男であり千冬姉の弟。ISに乗る者なら誰もが憧れる専用機を持っているがその実力は低く、同じ専用機持ちのセシリア・オルコットや鈴に遠く及ばない。これじゃ生徒達のヘイトが集ま

るのも当然だ

「強く、なりたい……」

誰にも負けない力が、誰にも馬鹿にされない力が、大切な人達を守る力が、その笑顔を守る力が、俺が俺でいるための力が欲しい。いくら正論を並べたところで力がなければそれは戯れ言と同じだ。力なき者に一体何ができる？

「(……なら、何をすべきだ?)」

強くなりたいと望むだけでは現実是不変腐れていってしょうがない。強くなるため、俺に出来ることはなんだ？

「(……駄目だ。練習とか訓練以外の選択肢が見つからねえ)」

溜め息が溢れた。やはり近道はないらしい。あの天才の鈴ですら代表候補生となるまでに一年近い年月を有したのだ、まして特になんか俺が数日で強くなるうんざり、厚かましいことこの上ねえ話だ

更衣室に備え付けられていたシャワー室から出て体を伝う水滴をタオルで拭き取っていると、シャワーを浴びるために外した待機形態の白式が目に入った。白いガンレットが電灯の光を浴びてキラリと輝く

白式

千冬姉と同じ剣と力を持つ俺の専用機。名の通り純白の装甲をした騎士を思わせる機体。どういう訳かその性能はセシリア・オルコットのブルー・ティアーズよりも高いらしいが、乗り手である俺の技量不足によりその性能を引き出すことは出来ていない

確かに白式はピーキーな機体だ。ブレオンとか何事だよと思うし、とても素人が扱えるようなISではない。いや、素人でなくともこれを使いこなすことは難しいだろう。何せこいつは、あの千冬姉の力を持っているのだから。宝の持ち腐れもいとこだ

だがしかし、仮にその力を余すことなく使うことが出来たなら？

かつてのモンド・グロツソで見た、千冬姉と同じ戦い方が出来たなら？

「(そうだったら……きつと……)」

誰も俺を馬鹿にしない。誰も俺を「織斑千冬の付属品」と言わない。今みたいに惨めな気持ちになることもなければ、大切な人だつて守れる。そんなもしものことを想像しながら俺は白式を右腕に装着し、水滴の残る腕で着替えへ伸ばした



五月第二週目、クラス別対抗戦当日、異様な程に賑わうアリーナの客席に俺は立ち尽

くしていた。一年生のイベントだというのに二年生や三年生らしき姿もよく見つかる。そんな観客全員に言えることは、試合が始まることを今か今かと待っているということだろう。ボサツとしてるとぎわめく会場に圧倒されてしまいそうだ

「おりむー！ここだよー！」

不意に俺を呼ぶ声の方を向けばいつものメンバーが既に席を確保してくれていた。ありがたい。俺は彼女達のところへ行くべく、人混みの中をなるべく慎重に進んだ。うっかり見知らぬ生徒の触つてはいけないところを触つて騒ぎになるのはごめんだからな

「お待たせ……って、おおっ！最前列とか特等席じゃんか！」

「えへへ、凄いでしょ」

得意気に笑う布仏さん。こんな一番いい場所を複数確保するなんて一体どんな手段を使ったのか。まあ今はそのご厚意に甘えさせてもらおう。俺は彼女に礼を言ってから空いていた席に座った

「それにしてもすげえ人の数だなあ……」

「それはそうだろう。今から行われるのは中国とイギリスの代表候補生同士の試合だ。しかもお互いに専用機持ち、学園の生徒なら気にならない方がおかしいくらいだ」
何気なくぼやいた言葉にほーきちゃんの一言が突っ込まれる。そこに食いついたの

は谷本さんだ

「織斑君は凰さんとオルコットさん、どっちが勝つと思う？」

「そりゃあ鈴……と言いたいのところだが、果たしてどうなるのか分からんね。セシリア・オルコットも強いからな」

やはりあのBT兵器、ビットは驚異だ。映像でしか見たことはないが、四方向から牙を剥くレーザーに対処出来なければ、流星の鈴であつても厳しい試合になるだろう。鈴には鈴で秘密兵器もあると言つていたが……それが鍵になるかもしれないねえな。とまあ、素人に聞かれてもよく分からんので詳しい人に聞いてみようか

「ボーデヴィツヒはどっちが勝つと思う？」

「……？」

突然話題を振られたせいとか、一瞬だけポカンとした表情をボーデヴィツヒは作った。なんだかんだで彼女も随分表情豊かになつたな。少し過去を聞いた身からすれば嬉しい限りである

「どうよ……」

「む……簡単に言うなら接近すれば凰が勝ち、逆に接近させなければオルコットが勝つだろう。操縦技術に關しては二人にそこまで大きな差はないように思える、故にどちらが早く自分の得意な間合いに持つていくか、それ次第だと私は考える。ただ安定性重

視の風に比べ、オルコットのBT兵器は奴のイメージに依存している。何かしらの方法で動揺を誘われれば不利になるのはオルコットだな」

おお、と周りから関心の声上がり、今度は少し気恥ずかしそうな顔をして咳払いをした。ホント表情豊かになったな、ボーデヴィツヒ

「見る、オルコットだ」

ほーきちちゃんの一言に皆がアリーナの方を向く。まるで海のような蒼のカラーリングに備えられた大型のライフル。間違いない、セシリア・オルコットとその専用機、ブルー・ティアーズだ。その姿を見た瞬間、脳内に惨敗した記憶が蘇って思わず鳥肌が立つ

程なくしてもう一人の主役、鈴もまたアリーナへと飛び出してきた。その顔つきはいつにも増して真剣だ。役者が揃ったことによりアリーナは一気に盛り上がり、あちこちから声援やらが飛び交うようになった

『楽しみにしていましたわ、風鈴音さん。今日この時を』

セシリア・オルコットの声のアリーナに響き渡る。俺達にも聞こえていることかどうかやら開放回線オープンチャネルによる会話のようだ。先程まで騒がしかったアリーナが嘘のように静まり返り、皆があいつの言葉に耳を傾ける

『クラス代表同士、代表候補生同士、正々堂々と戦いましょう』

『……あ、そう。どうでもいいわね、そんなこと』

心底どうでもよさそうな鈴の様子に俺は昔を思い出す。気に入ったことにはとことん夢中になる彼女だが、逆にどうでもいいことには本当に興味を抱かないのだ。当たり前のことかもしれないが、鈴の場合はそれが顕著だった。今頃鈴はあの鋭い目でセシリア・オルコットを睨み付けていることだろう

『あたしがやることはたった一つ。アンタに負けた一夏の代わりにアンタを倒す、それだけよ。代表候補生だとか、そんなの関係ない』

『一夏……ああ、あの男ですか。分かりませんわね、あの男のどこに執着する理由があるのか。私には到底理解出来ませんわ』

『別に理解しなくてもいいわよ。してほしくもないし』

そう言いながら鈴は双天牙月を両手に構えた。こんな皆が見てる前で話題に出されると恥ずかしいな。まあ今更な気もするけど……

『そうですか……では……』

セシリア・オルコットのライフル、スターライトmkⅢが鈴を捉える。そのタイミングで、見計らったかのように試合開始を告げるブザーが鳴った

『お別れですわね!』

俺の時と全く同じ、始まりと同時に奴のライフルが放たれる。両者の間にある距離は

僅か五メートル、一秒足らずでアリーナの端から端に到達するライフルの前には無いに等しい距離だ。蒼い光のレーザーが甲龍に突き刺さる……寸前、鈴は素早く機体を旋回させて直撃を免れた。その凄まじい反射神経だ、俺を含め、そしてボーデヴィツヒを除いた皆が唖然とする

『やああああああああ!!』

『ブルー・ティアーズに近接武器で挑むとは！代表候補生が聞いて呆れますわ!』

アリーナを縦横無尽に飛び回りながらライフルを撃ちまくるセシリア・オルコット。対する鈴は迫り来るレーザーをかわし、そして双天牙月で斬り払いながら追いかける。それらの応酬には一瞬の隙もなく、また無駄もなかった

レベルが違う、俺は目の前の光景を見ながら戦慄した

「（それが専用機の動きだと……?じゃあ俺はなんだ?俺がしてきたことは……一体……）」

俺が愕然としている間にも試合は続く。このままライフルを撃ちまくるだけでは倒せないと判断したのか、ついに切り札たるBT兵器を開放した。肩の辺りに浮かんでいアンロックユニットた非固定浮遊部位が動き出し、複雑な軌道を描いて鈴に襲い掛かる。その数、合計で四

基だ

『さあ踊りなさい！ブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！』

『お断りね！一人で踊るときなさい！』

四方向から降り注ぐレーザーの雨、下手な操縦者ならば一瞬で蜂の巣になるそれを、鈴はこれまでの経験と持ち前の直感を生かして避けていく。ただ完全に避けることは彼女でも難しいのか、アリーナの電工掲示板に表示されたシールドエネルギー残量が少しずつ減っていく。よく見れば表情にも先程までであった余裕が消え失せていた

『っ！ちよこまか動いて……！』

『無駄口を叩く余裕がありません！』

ビットの間を縫うようにしてセシリアのライフルによる一撃が放たれる。端から見ている分にはビットに包围され、更にセシリア・オルコット自身からも攻撃を受けている鈴が圧倒的に不利だ

状況が変わらぬまま五分が経過する。馴れてきたのか被弾率自体は減っているものの、それでも鈴のシールドエネルギーは削られ続けて残量はおよそ半分になってしまっていた。対するセシリア・オルコットはビット操作に集中しながらもライフルで鈴を狙っている。時々笑みを浮かべる様子がモニターに映されており、鈴よりも余裕があるようだった

『ふふふつ、そちらのエネルギーは残り半分、降伏するなら今のうちですわよ?』

『はっ、笑わせるわ!冗談じゃないつての。これくらい向こうの弾幕、中国じゃ散々受けたわよ』

『なるほど、ですがどうやってこの包囲網を破るおつもりです?自爆覚悟で突っ込んで来ますか?』

『それも悪くないわね。ま、それじゃそろそろ……』

ニヤリと鈴が笑う。同時に、彼女の真後ろにあったビットがひしゃげて墜ちた

『……なっ!?!』

「「「「……え?」」」」

『反撃させてもらおうとするわ!』

鈴の声と共に甲龍が加速し、もう一つのビットへ双天牙月を振るう。突然の出来事に操縦者が動揺したせいとか、その動きはあまりに遅い。案の定、ビットはぼつさりと斬り裂かれて爆散した。一瞬にしてビットの数が半分になったことで、セシリア・オルコツトが焦りを見せ始める

『まずは二つ。どうかしら、龍咆の力は?』

『くつ、それが衝撃砲ですか……!』

してやったりと笑う鈴に苦々しそうに呟くセシリア・オルコット。一方、俺達は聞き馴れない単語に揃って首を傾げていた

「衝撃砲……?」

「空間自体に圧力を掛けて砲身を生成、余剰で生じる衝撃自体を砲弾として打ち出す兵器だ。一直線の弾道だが非固定浮遊部位として搭載してある関係で射角は無制限、前後や上下のあらゆる角度に向けて使えるようだ。おまけに弾数は無限、砲弾や砲身が見えないとなると……」

「かわすことは至難の技、ということか。しかも今嵐が狙っているのはオルコット本人ではなくビットの方、自分でないものを操って見えぬ攻撃から守るのは困難だぞ」

ボーデヴィツヒの解説にほーきちゃんが付け足しをする。なるほど、鈴の後ろにあったビットがひしゃげたのは、この衝撃砲によって圧縮された空気の弾丸を受けたからか。砲弾が見えずあらゆる角度に対応するとかとんでもねえ武装だな

衝撃砲の仕組みが分かったことで試合に意識を戻す。やはりたった二つのビットでは鈴は止められないらしく、一転して鈴が試合の流れを掴み始めた。ビット目掛けて衝撃砲が何度も唸り、その度にセシリア・オルコットの動きが止まる。鈴は奴がビットと機体を同時に操ることが出来ないことに気付いているようだ。衝撃砲を囮として一気

に接近するつもりだろう。そこまで考えた時、鈴が動いた。セシリア・オルコット目掛けて一直線に、凄まじい加速で一気に突っ込む

『そ、それは……!』

『はあああああああああああああ!!』

一瞬で懐に潜り込まれたことにセシリア・オルコットが目を見開く。だがその速さ故に鈴も得物を使う余裕はない。繰り出すのは棘付き装甲スパイク・アーマーを利用した強烈なタックルだ。ガギーン!と金属音がアリーナに木霊し、同時にセシリア・オルコットのシールドエネルギーが大きく減少する

「ね、ねえおりむ……今のりんりんがしたのって……」

「……瞬時加速だ」

イグニッション・ブースト
瞬時加速。スラスタから放出したエネルギーを再び取り込み、二回分のエネルギーを用いて直線加速を行う、ISに於ける加速機動技術の一つ。分かりやすく例えるならゲームの溜めダッシュのようなものだ。その名の通り相手との間合いを瞬時に詰めることが出来るがその難度は高く、また基本的に直線移動しか出来ないために動きを詰まることもある。つまり、使いどころが難しいテクニクなのである

鈴はセシリア・オルコットがビット操作に気をとられている隙をついたのだろう。状況の判断能力、瞬時加速を成功させる技術、それに度胸、どれか一つでも欠けていれば

出来なかつた筈だ。だが、鈴はそれをやってのけた。形勢が逆転した

『ぐう……！ やつてくれましたわね……！』

『まだまだ勝負はこれからよ！ 舐めた真似してるともう一発叩き込んだげるから』

十メートル以上逃げるように距離をとったセシリア・オルコットが息絶え絶えといった具合に唸る。あのタツクルを受けた状態からすぐに立て直すのか、やはりあいつも相
当な乗り手だ

誰もが手に汗握る白熱した試合。シールドエネルギーもほぼ同じだ。十メートル程
距離を開けた両者が静かに睨み合い、スラスターを噴かした、その瞬間

それは、突然現れた

11話 ワンサマー、飛び出す

アリーナ全体に凄まじい衝撃が走り、ビリビリと大気が震える。クラス別對抗戦の第一試合、白熱し佳境を迎えようとしていたそれは、突如出現した乱入者によって中断を余儀なくされた

乱入者、それはつまりアリーナを覆うシールドが破られたことを意味する。このシールドはISに使われているものと同じもので、多少の攻撃ではびくともしない堅牢な盾である。実際、さつきまで行われていた試合でも流れ弾が幾つもこのシールドに当たったが、それでも決して破れることはなかった

それが破られた。破られてしまった

もくもくとアリーナの中央で上がる煙。それは次第に晴れていき、中から一機のISが姿を現す。深い灰色の珍しい『全身装甲フル・スキン』タイプのISだ。肩と頭が一体化しているかのような形をしており、更に遠目からでも目を引くのがその両腕である。その長さは足の爪先より以上もあり、全体像ははつきり言つて異形だ

「な……何あれ……!？」

「なんなの……あのIS……?？」

あまりに突然の出来事に周りから段々と戸惑いの声が上がりはじめた。かくいう俺だってそうだ。驚きのあまり体が動かず、開いた口も閉じそうにない。視線はあの異形のISに釘付けとなっており、ただその様子を他人事のように見ていることしか出来なかった。

だから——異形のISの腕が此方に向けられた時、そこで初めて俺は我に返った。座席から跳ねるように立ち上がり、ガントレットのついた右腕を前に伸ばす

「白し——」

合計八つの砲口から放たれた砲撃が、目前のシールドを貫いた



織斑千冬を含むIS学園の教師達は、突如現れた乱入者への対応に追われていた。ブック型の端末を忙しなく操作し出来ることを迅速に行おうとする……が、その努力は呆気なく無駄となる

「遮断シールドのレベルが4だと……!?これでは救援も避難も出せんか……!」

苛立ちの余り千冬は端末を乱暴に机に置く。十中八九、この状況があつた乱入者の仕業であることは間違いない。通信を試みるも応答はない。この第二アリーナの扉は

全てロックされてしまい、千冬達教員はこの部屋に、生徒達は客席に閉じ込められてしまった。例外があるとするれば、先程まで試合をしていた二人だけだろう

「お、織斑先生！更識さんから通信が！」

慌てふためく童顔眼鏡の後輩、山田真耶より千冬は通信用端末を受け取る。そこから聞こえてくるのは学園最強を掲げる生徒会長の声だ。ただ、その声はいつもの軽い調子ではなく真剣そのものだった

『織斑先生、状況は？』

「アリーナの遮断シールドのレベルが4まで跳ね上がっていて、我々教師はろくに動くことが出来ん。ロック解除も行っているが時間が掛かる。最低でも十分は必要だな」

『現場の三年生にも協力を要請してみます。人手は多い方が良いでしょうから』

「頼む。それと客席側の扉は破壊しても構わん。責任は私が持つ、生徒の安全が最優先だ。お前は生徒の避難に尽力し、完了次第あのI Sを無力化しろ。我々教師では恐らく間に合わん」

『了解しました』

「そろそろ生徒達も気付いて慌て出す頃だ。腕の見せ所だぞ、生徒会長」

『あはっ、お任せください♪』

通信を終えた千冬はふうと一息をついた。生徒会長、更識楯無は食えない人物ではあ

るがその手腕が確かであることは誰もが理解している。あの千冬ですら、生徒側の問題は任せても大丈夫だと言える程に

だがこれで安心ではない。千冬は素早く端末を操作し、通信をアリーナにいる二人に繋げた。そこから聞こえる声には困惑の色が伺える

『織斑先生!?! 一体どうなっていますの!』

『なんなんですかあいつ!?! アリーナのシールドをぶち抜くつてどんな威力よ!』

「落ち着け。一先ずお前達は応援が来るまでの間、その機体の足止めをするんだ。十分……いや、七分でいい。持ちこたえろ」

『……………』

楯無が生徒の避難を終えて駆けつけるまでの時間を千冬はそう判断する。だがあの実力未知数の機体相手にまだ未熟な二人が持ちこたえられるのか、彼女の頭に僅かだが不安が過った。アリーナのシールドを破る一撃を受ければ、既に試合で消耗している二人としてひとたまりもないだろう

しかし、そんな不安は次の瞬間には吹き飛んだ。端末より流れる、二人の自信に満ちた声によって

『はっ、持ちこたえるなんて言わずに倒せって言うてくださいいよ!』
『全くです。私とブルー・ティアーズを侮られては困りますわ!』

それを聞いた千冬の顔にふつと微笑が浮かぶ。生徒を信じられないとは教師失格だと己を叱咤し、いつもの声色で若き代表候補生に告げた

「いいだろう、だが深追いはするなよ。あくまで目的は時間稼ぎだからな」

『はいっ!!』

そしてその数秒後、正体不明機による砲撃がアリーナの一角で炸裂した



——シールドエネルギー、残量214。機体損傷度45%。攻撃を受けています、回避してください

「間に合っ………た………!」

手足から力が抜けて膝をつく。ズキズキと全身が痛み意識が朦朧とする。体の前面にあった装甲はグシヤグシヤに溶けて焦げ臭い煙を上げており、一部に至っては完全にISスーツが露出してしまっていた。絶対防御がなければ、そしてアリーナのシールド

が威力を減衰させていなければ、この身は跡形もなく消し炭になっていたであろうことは想像するに難くない。いや、俺だけがそうなるならまだいい。ただ俺の後ろにいる皆が巻き込まれるのだけは駄目だ

操縦者保護機能によって徐々に意識が覚醒していく。客席に砲撃をぶちかました件のISはレンズが剥き出しになった奇妙な顔で此方を眺めており、そこに二発目を撃つてくる気配はない。ハイパーセンサーで後方を確認すれば未だに呆然としている皆の姿があった。どうやらアリーナのシールドと俺で奴の砲撃をすっかり止められたらしい。そのことに安堵の溜め息が溢れた

そしてここにきて、アリーナ内で緊張が爆発する

『き、きやあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああああ
!!!!』

パニックに陥った生徒達が叫びながら一斉に動き始めた。逃げまどう者、泣きわめく者、助けを乞う者、必死に指示を出す者、反応はそれぞれだ。恐怖は伝染すると聞いたことがあるが、今起きている事態はまさにそれであると思った。そして、目の前で己よ

り錯乱する者がいれば冷静になれるということも

「ボーデヴィツヒ、皆を……！」

「……ああ、分かった」

ハイパーセンサーがしっかりと頷いてくれたボーデヴィツヒを捉える。これできつと皆は安全だ、何せあのボーデヴィツヒがいるのだから。俺は一度深呼吸をして気持ち落ち着かせる

正直なところ、かなり怖い。あのISの砲撃が絶対防衛を発動させるに十分な威力を持つていることは身を以て知っているし、自分の力が奴に敵わないということも分かっている。もう一度あれに当たれば残ったエネルギーも全て持っていかれて、最悪死ぬ足がすくむ。今すぐ逃げ出したい。でも、それでも、目の前で鈴が、大切な人が命を懸けているのに俺だけが逃げ出すなんてことは出来ない。ここで逃げたら俺は自分を許せなくなる、そんな予感がするのだ

「(それに……あいつの狙いはきつと——)」

既に戦闘が始まっているアリーナに向けて俺は白式と共に飛び出していった。正体不明機は双天牙月を振るう鈴の相手をしており、此方には気付いていない。素早くスラ

スターを噴かして接近し、雪片を背後から振り下ろす

「おおおおおおお!!」

完璧に決まった、そう確信出来る一撃だった。例えセシリア・オルコットや鈴レベルの相手であつてもまず避けられない、その筈であつた一撃。しかしそれは正体不明機の異常とも言える反応速度によつて気付かれ、そしてあの長い腕で防がれてしまった。驚愕のあまり目を見開いて動きを止めてしまう

「（嘘だろ……!?防がれ……っ!?）」

だが防ぐだけで終わりではなかった。凄まじいパワーに雪片が押し返され、無防備となつた俺に腕が鞭のように振るわれる。当たれば墜ちる、直感的にそう確信した

「余所見してんじゃないつての!」

だが、敵I Sは真横から鈴が放つた空気の弾丸に殴られて吹っ飛ぶ。そこに追撃とばかりに突き刺さるのはセシリア・オルコットのスターライトmkⅢのレーザーだ。即席とは思えない程のコンビネーションに、俺は戦場であることも忘れて見入ってしまう。やっぱり、すげえ

「一夏、なんで来たのよ!さつきと逃げなさい!」

「そうですわ!ここは素人の出る幕ではありませんのよ!」

『織斑、何故お前がそこにいる!早く下がれ!』

呆然としている間に鈴、セシリア・オルコット、そして千冬姉の三人から間髪入れずに怒声を浴びせられる。確かに俺の行動は誰も望まない無謀なことかもしれない。でも、俺だって何も考えずに飛び出した訳じゃねえんだ

「聞いてくれ！あいつの狙いは、多分俺だ」

その言葉に三人は絶句する。多分と言ったが俺にはそう断言出来る自信があるのだ

『……織斑、何故そう言える？』

「あのＩＳが、客席で俺のいる場所だけを狙ったからです」

仮に試合を潰すことが奴の目的なら乱入した時点で成功している。また無差別に生徒を襲うことが目的なら、あまり良い言い方ではないが他の客席も狙っていないとおかしい。俺はそんなちぐはぐさからあのＩＳの行動に違和感を覚えたのだ

そして、あいつの狙いが俺だとすればそんな違和感にも納得がいく。狙われる理由も『世界唯一の男性操縦者』って肩書きだけで十分だ。もし他の生徒と一緒に逃げていたら、彼女達ごと狙われる可能性があっただろう。あのＩＳと戦える仲間がいて、かつ広くて逃げ回りやすい場所。それはこのアリーナ以外にはないのだ。勿論、鈴を置いて逃げることは出来ないということもあるが……

俺が来た訳を聞いた千冬姉は何か思案しているようで黙り込んでしまった。二人も同様だ。俺達の間に沈黙が流れる

しかし、そんな中で俺に新たな違和感が生じる

「(……なんで今、攻撃がない?)」

チラリと確認した正体不明機はダラリと腕を下げて此方をただ眺めていた。顔面にあるレンズが不規則に動いてはいるが、それ以上の動きは見られない。今だって、言っ
てしまえばさっきの通信の時だって、此方を攻撃するチャンスはいくらでもあっただろ
うに……

『……分かった。だがお前はオルコットや凰に比べてまだまだ未熟だ。間違っても無
茶な行動だけはするなよ。その白式には近接武装しか搭載されていないのだからな。
それに、お前達の目的は時間稼ぎだということも忘れるな』

ふと感じた違和感はずっと千冬姉の言葉によって霧散する。それと同時に、止まっていた正
体不明機も動きを見せた。腕と一体化した砲口が音を立てて俺達を捉える

「来るわよ！一夏、無茶だけは禁物だからね！」

「くれぐれも私の視線に入らないように！責任はとりませんわよ！」

そう言った鈴が轟音と共に突っ込み、セシリア・オルコットがライフルを構えた。あ
のISの攻撃力は驚異の一言に尽きる、回避に全力を注がなければあっさり撃ち落とさ
れて終わりだろう。多分、攻撃に回せるだけの余裕はない。千冬姉達の言葉を忘れぬよ
う胸に刻み、俺もまた正体不明機を攪乱すべくスラスターを噴かして動き始めた



「今で、何分経った……！」

「もうそろそろの筈ですわ……！後少し、後少し耐えれば……！」

「はあ……はあ……！」

戦闘は苛烈を極めた。接近戦を鈴、援護をセシリア・オルコット、囃が俺といったように短い時間で役割を決めて挑んだ戦い。にも関わらず正体不明機は俺達と互角に渡り合い……いや、むしろ追い詰めていたのだ。白式のシールドエネルギーは残り全体の約二割ちよつと、といったところか。恐らく他の二人も同じくらいの筈だ

「全く……なんなのよあのISは。少しは疲れた素振りくらい見せなさいよね」

「砲撃の正確性も先程から全く落ちていませんわ。これだけの腕を持つ操縦者が、何故IS学園に敵対するようなことを……」

「くそつ。あの反応速度といい動きといい、まるで——」

——機械を相手してるみたいだぜ

そう呟いた瞬間、俺達の動きが止まった。不自然なくらいにピツタリと。だがそんなことを気にしていられる場合ではない。俺達は、それだけ衝撃的なことに行き着いてし

まったのだから

そうだ、どうして気付かなかったんだ。戦っていた時に、見ていた時に感じていた違和感。近付けばコマのように腕を振るい、離れば腕からの砲撃を行う。そんな決められた通りのことを決められた通りに行い続ける、そんな機械のような人間がこの世界に存在するものか。俺はぼんやりと浮かぶ正体不明機を睨んだ

あのISは無人機かもしれない。いや、十中八九無人機だと言っても問題はない筈だが、しかし――

「――それがどうしたって話だな……」

「……一夏、それ言っちゃいけないわ」

「事実から目を逸らしても何も変わりませんわよ、鳳さん」

揃いも揃って溜め息が溢れる。そう、問題はあれに人が乗っついていようが乗っついていまいが、今の状況には全く関係ないということである。言い出したのは自分であり、あれが本当に無人機だとするのなら目を見開いて卒倒するレベルなんだが……悲しいかな、人が乗っついていなくとも強いものは強いし、何か足止めに有効な策が思い付く訳でもねえ

これはもしかや万事休すかと思われたちようどその時、俺達の元に通信が飛び込んだ。

そしてそれは、俺達が待ち望んでいたものでもある

『お前達、良くやった！直ちにその場から離れろ！』

千冬姉が短く告げる。それと同時に正体不明機がいた辺りが爆発し、俺達は何がなんだか分からないまま吹き飛ばされた。幸いにもアリーナの壁にぶつかることはなかったが、それでもいきなりの衝撃に視界が一瞬だけ真っ白になる

そして、再び視界が回復した時に捉えたものは、地に伏してその胸部を巨大なランスに貫かれる敵ISの姿だった。そのランスを握るのは装甲らしい装甲があまり見当たらない不思議なISを纏う女性だ

俺には彼女に見覚えがあった。IS学園の入学式において、新入生歓迎の挨拶を行っていた人だ。その挨拶のインパクトがやけに強かったから、ぼんやりとだが記憶に残っている。やや外に跳ねた空色でセミロングの髪の毛に、吸い込まれてしまいそうな真っ赤な瞳。IS学園の生徒会長にしてその二つ名は「IS学園最強」。そんな彼女の名前は――

「更識、楯無……」

うろ覚えの名前と共に、彼女の姿が俺の頭に焼き付いた



某所にある秘密ラボ、『吾輩は猫名前はまだ無いである』。そこでは一人の女性がモニターに囲まれた部屋の中で椅子に座り、先程まで映っていたそれらをぼんやりと眺めていた

女性の名前は篠ノ之束。ISを作り出した稀代の大天才であり、篠ノ之箒の実の姉だ
「う〜ん……これは予想外かな〜……二つの意味で」

ポツリと呟いてからニヤリと笑みを浮かべる。彼女の手元にある端末には一機のISが表示されており、そしてそれはIS学園を襲撃した無人機であった。無人機の名前は『ゴーレム』、ユダヤ教の伝承に登場する泥人形のことだ

「適当に作ったガラクタだったけどここまで動いてくれて束さんは嬉しいな！ま、適当でもこの束さんが作ったんだから当然なんだけどね〜！」

それと比べて、と彼女は端末を操作して画面を変える。次に映し出されたのは織斑一夏に与えられた専用機、白式のデータだ

「此方の方は全っ然！駄目駄目だね！零落白夜も使えて性能もまあまあ高い筈なのに、なんであんなに弱いのかな〜？ちーちやんの弟だから期待してただけだなあ……」

はあ、と束は大きな溜め息をついた。IS学園において起きた無人機の襲撃、それを裏で糸を引いていたのは篠ノ之束自身である。その目的は無人機ゴーレム及び白式の性能やその能力のデータを収集すること。しかしその目的は事実上、半分しか果たされなかったのだ

「男なのにISを動かせたからもしやつて思ったんだけど……やつぱり無能は無能のままか。えーつと……名前……忘れちゃった！ま、いつか！凡人の名前なんて束さん知くらないつと！」

興味をなくした束は端末を放り投げ、「くーちやあああああん!!」と叫びながら去っていった

12話 ワンサマー、腕を振るう

どうも、織斑一夏です。全くもって今日はとんだ厄日だった。鈴の試合を応援して終わる筈だったってのに……何をどう間違えたら謎のISに狙われ戦わねばならんのだ。クラス別対抗戦もそれ自体が中止になったらしいし……もう散々だ

あの戦いが終わった後、俺と鈴、セシリア・オルコットの三人はすぐさま保健室に運び込まれた。幸いにも三人とも大事に至るような傷はなく、精々筋肉痛や青アザ止まりのものが幾つかあったくらいだった。やっぱりISの絶対防衛つては凄いもんだなあとあらためて実感する

で、あの正体不明機だがやっぱり無人機だったらしい。学園側はこの情報を秘密にしたいらしく、交戦した俺達は揃いも揃って口外しないという誓約書を書かされることになった。破った場合は教えられなかったが、千冬姉が笑顔と共に「二度と日の出が見られなくなるかもな」と言っていた。悪いが俺はまだ死にたくない、大人しく千冬姉の言う通りにさせてもらおう

で、現在俺達かというと――

「あ、鈴ヶチャップ取って」

「はい」

「サンキュ」

厨房の一角を借り受け、晩飯を作っていた

▽△▽△△

そもそも何故俺と鈴が晩飯を作っているのか、それは無人機の一件についての事情聴取やら誓約書へのサイン、保健室での治療やらなんやらで解放されたのが八時過ぎだったことが原因だ。昼頃から何も食っていなかった俺達三人は当然空腹で、そして使える時間が六時から七時までの食堂は利用出来ない

これはどうしたものかと途方に暮れていた俺達だったが、食堂のおばちゃん達や先生に相談した結果、なんとかこの一年生学生寮に備えられた食堂の厨房を使用する許可を貰うことが出来たのだ。ただ、やはり生徒だけでは使わせることは出来ないということで、偶然通り掛かった山田先生を説得して来てもらった。そして、現在に繋がるという訳である

ん、セシリア・オルコットはどうしてるのかって？あいつはテーブルで待機させている。料理の出来ない者には厨房に立つ資格はないのだ

「〜♪」

フライパンの上から香ばしい匂いが広がる。つーかこうして料理をするのも随分と久しぶりだ。学園に来てからは基本的に学食生活だったし。腕も鈍ってないみたいだし、これは味に期待が出来そうだ

フライパンの上で薄く広げられたふわふわの卵を破かないように皿へ移し、その上に別のフライパンで作っていたケチャップを乗せる。そしてそれを卵で閉じ、その上から更にケチャップで文字を書いた

完成

織斑一夏特製ふわふわオムライス。因みに書いた文字は『俺』『鈴』『セシリア・オルコット』『山田先生』だ。カタカナの名前は初めて書いたような気がするな。一文字一文字が小さくなったが潰れてないしちゃんと読める。我ながら満足のいく出来だ

二つの腕で四つの皿を運ぶという結構器用な技を披露し、食堂の端にある小さめのテーブルにそれらを並べる。それを見たセシリア・オルコットと山田先生が絶句する様子は、なかなか見えていて面白かった。男イコール家事が出来ないなんて思うなよ。そんなのは男より女が偉いと考えるくらい間違つた発想だ

「わあ……！織斑君、凄いですね！」

「これを……あなたが……？」

「簡単な料理だけだな。あ、『男が作った料理なんて食べられませんわ！』なんて言うなら別に食わなくても構わねえから」

食べ物で粗末にすることは俺が許さん。例えそれが代表候補生であつてもだ。当然だが食べるつもりはあるようで、そこまでは言いませんわ、と言いながらセシリア・オルコットはスプーンを握つた。山田先生はなんとというか、非常に申し訳なさそうに此方を見てくる

「ご、ごめんなさい織斑君。こんな美味しそうなご飯を用意してもらつて……」

「気にしないでください。ていうか、お礼を言うのは俺たちですよ」

そもそも先生がいなければこうして晩飯を作ることすら出来なかつたのだから、感謝するのはむしろ俺達の方である。そんなやり取りをし終えたそのタイミングで、鈴もまた料理を持って到着した

「お待たせ、出来たわよ」

ゴトン、と音を立てて大皿がテーブルの真ん中に置かれる。そこからいかにも美味^{うま}そうな匂いを漂わせているのは、衣をつけて揚げた豚肉や野菜に甘酢あんを絡めた料理。とどのつまり酢豚である。中華料理屋の娘が一番得意とする料理だ、その味は推して然るべきだろう

オムライス、酢豚、そしておまけ程度に中華スープ。学生の晩飯にしてみればなかなか豪華な献立が並んだ。鈴が席に着くのを確認してから俺は手を合わせる。鈴と山田先生もまた同じように手を合わせ、それを見たセシリア・オルコットがスプーンを慌てて置き、俺達を真似た

「いただきます」

「い、いただきますわ」

ささやかな晩餐が、こうして始まった



「「ご馳走さまでした」」

それなりに量のあつた筈の料理は空腹だった俺達の前に呆気なく食い尽くされてし

まった。料理は自作のオムライスを含めてどれもかなり美味く、食べ終わるのに十分と掛からなかつた程だ。特に鈴の酢豚、あれは思い出補整等々もあつて神憑りのな美味さを誇つており、四人で分けあつたことで一番最初になくなつてしまつた。やつぱり鈴の料理は最高だ

唯一心配だつたのがセシリア・オルコットが飯を食わないかもしれないということだつたんだが……やはり空腹には勝てなかつたんだろうな。最初は恐る恐るといった具合に手をつけていた料理は全て彼女の胃に収まつていた。あれだけ美味そうに食べてくれたなら料理人冥利に尽きるというものだ

「ふあああ……」

スポンジで食器を洗つてるとつい欠伸が出た。空腹を満たすことが出来たせいとか、先程から襲つてくる眠気が半端ではない。肉体的にも精神的にも、今日はかなりハードだつた。しかし今は皿洗ひ中、落として割つたとなれば大変なことになることは想像するに難くない。集中せねば

「ああもう疲れた……今日はさつさと寝たいわ……」

「同感ですわ。流石に私も少々草臥くたびれてしまいました……」

同じように皿を洗つていた二人もまた随分と疲れた様子を見せている。しかしよくもまあ無事で済んだもんだ。一歩間違えれば大怪我を、最悪命を落としていたかもしれない

ない戦いで何事もなく目的を果たせたのは、なんだかんだ言いつつも三人で協力した結果だろう。もしこのメンバーの一人でも欠けていれば……いや、やめておこう

「あんなことがありましたし、皆さん今日はゆつくり休んでくださいね。明日もまだ学校がありますから……」

山田先生の一言に三人揃って頷く。先生も後始末に追われて大変だろうに……

「……ま、皆お疲れさんって感じだな。正直、今日だけで十年は寿命が縮んだぜ。あんなのはもう勘弁だ」

「全く。ていうか、私達よく戦えたわよね。三人で戦う練習とか一回もなかったのに」
「もう一度やれと言われても出来る自信がありませんわ……」

色々とぼやきながらもテキパキ食器を片付けていき、全てが終わった時にはもう九時を回っていた。食堂を出て窓から空を見れば沢山の星が見える。五月の中頃ということもあって気温も丁度いい、疲れがなければもう少しのんびりと眺めていたいくらいだ
「それでは皆さんお休みなさい。寄り道なんてしちゃいけませんよ!」

山田先生は笑顔と共にそう言い残して、食堂の鍵を片手に校舎の方へと戻っていった。教師つても大変だなあ。勿論、IS学園の教師が特別だつても理解はしているが。学園を襲撃する存在が現れたつてだけでもヤバイことなのに、それが無人機ともなれば尚更のことなんだろう。今頃どうこの事態に対応するか、お偉いさんが会議でも

開いているんだろうか？

「では、私はここで」

おっと、いつの間にかセシリア・オルコットの部屋の辺りまで来ていたらしい。食堂は寮に備え付けられているだけあって、部屋までの距離もかなり短いからな。俺と鈴はそのまま適当に言葉を交わして彼女と別れる……と思いきや、いきなり声を掛けられて足を止めた

「織斑さん、鳳さん」

「……？」

「今日は本当に助かりました。それに夕食まで戴いて、感謝の言葉しかありませんわ」
そう言つてセシリア・オルコットは恭しく頭を下げた。なんだなんだ、急にこんなことをして。いつもの傲慢とも捉えられる態度はどこへいったんだよ。あまりにも意外過ぎる言葉に頭がフリーズしかかった

「……なんだよ、急にそんなこと言い出して」

「このセシリア・オルコット、恩を受けておきながらそれを蔑ろにするような真似は致しませんわ」

それに、と彼女は一旦言葉を区切る

「今日の一件であなたを少しだけ見直しました。勿論、素人が戦場に飛び出してくる

など言語道断です。が、的確な観察眼や緊急時の判断力、この二つは評価致しましょう」
光栄にお思ってくださいまし、とセシリア・オルコットは腰に手を当てたいつもものポーズを決めた。なんでだろうな、褒められている筈なのに全然嬉しくねえ。そしてその上から目線の物言いにむつとした鈴が突っ掛かった

「何よその言い方は。私達は三人であの無人機を相手したからこそこうして今もいられるんだ、とか思わないの？」

「それくらい分かっていますわ。だからこうしてお礼を言っているのです」

……つまり、今の言い方が精一杯譲歩した結果だと言う訳か。鈴は納得いつてない、つて顔をしてるが……これがセシリア・オルコットという奴だと理解していれば、存外にすんなりと受け入れられた。こいつにとつて女尊男卑、いや、男嫌いはデフォルトなんだろう

俺は鈴を制して頭を下げた。上から目線の物言いは確かに聞いてて気持ちのいいものじゃない。というかぶつちやけ気に食わないが、それ以上に正鵠を射ていることが多い。セシリア・オルコットが俺達に助けられたというように、俺達もまた彼女に助けられているのだから

「セシリア・オルコット、礼を言うのは俺の方こそだ。あの無人機は俺と鈴だけじゃ多分敵わなかった。此方こそ助かった、ありがとう」

「……癩だけどアンタの実力の高さは理解出来たわ。今回のことはあたしも礼を言う、オルコット」

「ええ。嵐さん、今日の試合は無効となつてしまつたことですし、いずれ決着をつけたいものです。それでは失礼致しますわ」

最後に洗練された動きで礼をすると、セシリア・オルコットは自室へと戻つていった。ああいう動きを見ると奴が貴族の生まれだということにも納得がいくなあ。尤も、気に食わないことに変わりはないが

「さあ鈴、俺達も——」

そう言つた俺の言葉はいきなり飛び付いてきた鈴によつて掻き消された。胸の辺りから下に暖かな体温を感じ、突然のことに倒れそうになるのを堪える

「鈴……?」

「ごめん一夏。ちよつとだけ、もうちよつとだけでいいから——このままでいさせて?」

途切れそうなくらいか細い声で呟いた彼女の頭を、俺は壊れ物を扱うようにしながら胸に抱く。すると途端に、今まで目を背けていた恐怖だとかそういった感情が一斉に襲い掛かつてきた。ぞくりと、今まで感じたこともない程の寒気に全身が震える

怖い

「一歩間違えれば死んでいたかもしれないという事実が怖い

もしかすると鈴を失っていたかもしれないという事実が
そして何より、嬉しい

今、こうしてお互いに生きているという事実が

「一夏……生きてるよね、私達」

「ああ、生きてる。生きてるよ」

「うん、うん。そうだよね——」

よかった、と

鈴は最後にほっと、胸を撫で下ろした

そうして時は流れ——六月

俺達の前に、
新たなる災厄が現れる

閑話 ワンサマー、旧交を温める

六月、梅雨の季節だが雨など降らない快晴の空の下、俺と鈴はIS学園から出てとある男の家にお邪魔していた

五反田弾

赤い長髪にバンダナがトレードマークの少年。俺、織斑一夏にとって唯一の男友達であり、また文字通り命の恩人と言える奴である。弾、そして鈴には中学時代に色々とお世話になったのだが、説明すれば間違いなく長くなるので割愛させてもらう

「むむむ……！」

俺はゲームのコントローラーを握り締めながら、必死の形相で画面を睨み付けた。画面には二機のISが飛び交い、装備された武器でお互いに画面の端に表示された体力を削りあっている

一機はフランス製の二世代機『ラファール・リヴァイヴ』。IS学園でも生徒の訓練機として採用されているそれは、このゲーム『IS/V S』でも屈指の安定性を誇っており、また選択出来る武装の数も多岐に渡っている。そして現在俺の操作するISで、装備は近接ブレード、パイルバンカー、アサルトライフル、ロケットランチャーの四種類

である

もう片方、弾の操る I S はイタリア製の二世代機『テンペスタ』。このゲームでは防衛力の低い半面、高い機動性と攻撃力を有している機体だ。装備もブレード二本にライフと少ない代わりにブレードによる連撃がえげつなく、必殺ゲージがすぐにチャージされてしまう。そこから繰り出される無慈悲な必殺技は此方の体力を容赦なく削っていくのである

「オラオラ！ どうした一夏！」

「くそ、動くんじゃねえよ畜生が！ 攻撃が当たらねえだろうが！」

熱中の余り、無意識の内に声が張り上げられる。俺は飛び回るテンペスタをアサルトライフルで狙いながら接近、ブレードに持ち変えて斬り掛かった。しかしそれは弾も同じで、素早くコントローラーを操作してラファールへと突っ込んで来る。だが、それは甘いぜ弾！

俺はギリギリまで弾を引き付け、必殺技を発動した。隣から避けようとボタンを連打するカチカチカチカチという音が聞こえるがもう遅い、テンペスタはラファールの斬撃、からの一斉射撃というド派手な演出の必殺技を一身に浴びて、四割程残っていたその体力を二割程度まで減らした。後ろから鈴の音が、そして隣から弾の慟哭が響く

「ヒューッ！ やるわね一夏！」

「あ あ あ あ あ あ あ あ あ あ! 俺のテンペスタア!」

「はっはっは! 懺悔の用意は出来ているか弾^だあん!」

その言葉と共に放たれた命中難易度最大のロマン兵器、パイルバンカーがブレード両手に突っ込んで来たテンペスタを見事に捉えた。豪快な爆発音が轟き、画面に表示される『PLAYER — 2 WIN !!』の文字に俺が勝鬨を上げ、弾がガクリと崩れ落ちる。どうだ、ざまあみやがれ!

「ぐおおおおおおお……! 負けたあ……!」

「勝った……! とつつき最っ高……!」

「いつも思うんだけど一夏つてとつつきを当てることに関してはプロよね」

そりゃ練習したからな、と俺は自信満々に答える。ISという高速機動戦がメインであるこのゲームにおいて、有効距離が短いこの武器^{パイルバンカー}を当てることはなかなか難しい。故にこれの使い方はブレードホーミングを利用してすることで、接近戦を仕掛けてきた相手にカウンターとして直撃させることが主流となってくるのだ

が、ボタンを押してから使用までには若干のラグがあり、外せば大ダメージを受けることは想像するに難くない。当たり判定も小さくタイミングが酷くシビアなもの特徴だ。使いこなすことが出来れば最強の相棒となるが失敗すれば痛手を負う、パイルバンカーとはそういう武器なのである

「さて、じゃあ次は私の番ね」

敗者からコントローラーを奪い取った鈴がふふん、と鼻を鳴らす。そして彼女が選択した機体は――

「――メイルシュトローム？」

俺と弾は同時に声を上げた。メイルシュトロームといえばイギリスの二世代機で『IS/VIS』内では技が弱い、コンボが微妙と愛がなければまず使わない機体ということだ。『IS/VIS』歴の長い鈴がそれを知らない訳がない。まさか舐めプか？

「どうしたの一夏？まさか怖じ気付いたの？」

「……分かったぜ。そっちがそのつもりなら――」

「――受けて立つぜ、鈴！」

俺はコントローラーを握った。カーソルを動かしてラファールに合わせ、武器を先程と同じ四種類に設定する。悪いな鈴、お前がいなくなってからマスターしたこの機体で負けたことは一度もねえ！

メイルシュトロームの武器は分かっている。ブレードにハンドガン、そして追尾ミサイルの三つだけだ。追尾ミサイルはそのホーミング性能こそ厄介だが、一発一発の威力は大したことない。他の二つも同様だ。そんな微妙な機体でこのラファールに勝てるものか！

「来なさい一夏！中国で鍛えた私の実力、見せてあげるわ！」

「強くなったのはお前だけじゃねえんだ、いくぜ鈴！」

『BATTLE START !!』

俺達の誇りを賭けた戦いが、今始まる。野暮な突っ込みは禁止な！

その数分後

「ば……馬鹿なあ……！」

「一夏ア！しっかりしろオ！」

「はーっはっは！ざまあないわね一夏！」

「弾……俺はもう駄目だ……！仇を……ガクッ」

「一夏あああああああああ!!」

「ふふん!一夏、勝利者権限としてアンタには一生私を幸せにすることを命令するわ!
!次は弾、アンタの番よ!」

「くつそオ!鈴なんか絶対負けねえ!」

「……鈴には勝てなかったよ」

「弾^だああああん!!」

「あはははははははは!代表候補生たる私に勝てるとても思ったのかしら!さあ弾、アンタにも一夏と同じことを命令するわ!二人揃って私を幸せにしなさい!」

「イエス、ママ!!」

実はこのノリ、俺達の平常運転だったりする



「お兄！さつきからお昼出来たって言ってるじゃん！さつきと食べに——」

俺と弾が鈴を幸せにすることを命令されてから約一時間後、乱暴に部屋の扉が開かれ一人の少女が姿を現した。弾と同じ赤い長髪に随分とラフな格好。が、全寮制の女子校同然のＩＳ学園暮らしの俺にはもう見馴れた格好だ

彼女の名前は五反田蘭。弾の妹で、この辺では有名な私立女子校に通う中学三年生、つまり一つ下の女の子である。イケメンな弾に、そしてお母さんの蓮さんに似て美人さんだ

「よお蘭ちゃん、お邪魔してるぜ」

「久しぶりね、蘭」

俺にとつては五ヶ月ぶり、鈴にとつては一年半ぶりくらいだろうか、とにかく久しぶりだ。俺達二人がひらひらと手を振って挨拶をすると、蘭ちゃんは顔を赤らめ急いでそこそと扉の陰に隠れてしまった。なんか可愛いな

「い、一夏さん……鈴さん……き、来てたんですね」

「おう、学園からの外出許可が漸く下りたんでな。元気にしてたか？」

「え、ええ……まあ……」

しどろもどろ、といった具合に呟く蘭ちゃん。その視線は俺と鈴の間を行ったり来た

りしている

「あの……その……鈴さん……」

「何?どうしたの蘭」

ニコリと満面の笑みを浮かべる鈴に蘭ちゃんはビクツと肩を震わせる。昔つから鈴が苦手っぽいんだよなあ彼女。本人曰く、「私はあの人に負けたんで」とのこと。なんとなく分かるような気もするが合つてたら凄く気まづくなりそうなのでやめておこう。だつて……ねえ?

「あ……う……ご、ご飯が出来ましたよ!」

最後の方はもう涙目になって、蘭ちゃんとはバタバタと自室のある方へ行つてしまった。その様子がどこか微笑ましくて俺は少しにやけていると、弾と鈴、左右からゴスツと肘打ちが入る。何故だ

「浮気すな」

「してねえつての……」

はあ、と溜め息を溢し、とりあえず弾の後ろについていく。ご飯が出来たと彼女は言っていたし、何かしらの料理をご馳走してくれるんだろう。ありがたいことだ

一度裏口から出てから俺達は正面より入り直す。空いていた最寄りの席に俺、鈴、弾の順番に座れば、五反田食堂の大将にして一家の大黒柱、五反田厳さんが中華を片手に

姿を現した。筋肉隆々で浅黒い肌はとても齡よわいが八十を越えているとは思えない。俺や鈴の尊敬する数少ない大人の一人だ

「お久しぶりです、厳さん」

「お久しぶりです、お邪魔してます」

「おう。随分と久しぶりだな、坊主に嬢ちゃん。まあゆつくりしてけや」

厳さんは満足そうに頷くとこの鉄板料理である『業火野菜炒め』を置いて厨房へと戻っていった。せつかくの料理を冷ましては失礼だ、俺達はすぐに手を合わせて箸を伸ばした。シャキシャキの野菜に肉の旨味が絡み合い、絶妙な美味さを引き出している。うん、やっぱ美味しい

「ん〜！美味しいわ！さっすが厳さんね！」

「やっぱ厳さんには勝てねえわ……美味えなあおい」

「嘯みながら喋るなよ、鍋が飛んで来っからな」

弾の言葉に俺達はグツと親指を立てる。途中からは弾の盛ってきた白米、そしてカボチャの煮物も加わって文句なしの一時となった。この料理は味もそうだが、暖かさつもののがひしひしと感ぜられる。五反田食堂、やっぱりここは最高だ

「さあ〜て、ご飯も食べたしどこ行きましょうか？」

「やっぱカラオケは外せねえよな。後はゲーセン、そんでそんで！」

「はしやぎすぎだろ一夏……まあ久々だしな」

「当ったり前だろ！言っただじやねえか、鈴の帰国祝いをしようぜってきあ！俺、楽しみにしてたんだぜ？」

「わーったわーった！時間いっぱいまで付き合ってやるから落ち着けての」

「なんかこんな元気な一夏を見るのも久しぶりね。ふふつ、じゃあ行きましょ！」

俺達の休日は、まだまだ終わらない

13話 ワンサマー、疑う

いつも通りの、そしてなんの変哲もない朝。俺は一人目を覚まして欠伸をした。まだ微睡む意識の中で部屋を見渡せば、使われていない一つのベッドが目映った。

現在、ここは俺の一人部屋だ。六月に入って漸く一人部屋の都合がついたことにより、相方のほーきちちゃんとボーデヴィツヒに見送られてこの部屋にやって来たのである。一人部屋となったことである程度の自由を得ることは出来たが、やはりこうして一人にいるとなんとなく寂しいような気もする。まあ、一人つてのは千冬姉がドイツで仕事してた頃と同じなので、馴れているっちや馴れているが……

「(七時前……二度寝するって時間でもなさそうだし……起きるか)」

最後に一度大きく伸びをすると俺はベッドから這い出て洗面台に向かった。昨日は遅くまで勉強をしていたせい、目の下にはうつすらと隈が出来ている。二ヶ月も経てばI S学園の授業も段々複雑になってきて、元々の基礎知識が少ない俺では睡眠時間を削って予習復習しなければいけないことも難しい状況になってきているのだ。

ぼんやりと沈む気持ちを払うように顔を洗って髪を解き、寝間着を脱いでハンガーに掛けられた制服に袖を通した。最後に身嗜みを確認すれば……うん、問題ないだろう。

「さて、行つてきます」

返事が来ないことを承知で呟き、俺は朝食を摂るべく一人、部屋を出た



飯を済ましてから教室に上がれば、既に多くの生徒が登校していた。時折聞こえてくる途切れ途切れな言葉から考えるに、どうやら皆 I S スーツについて話し合っているようだ。そういえば今日は I S スーツの申し込み開始日だったような気がするな。まあ、専用機持ちということで既に受け取っている俺には関係のない話だ

「あーおはようおむむー！」

「おう、おはよう布仏さん。それにほーきちゃんにボーデヴィツヒも」

「うむ」

「ああ」

自分の席に荷物を置いていつものメンバーが構成する輪に混ざる。ああ、友達がいるって素晴らしい

「そういえば織斑君の I S スーツってどこの製品なの？」

「ん……ああ、イングリッド社のストレートアームモデルをどっかのラボが改造した

もんらしいぜ」

谷本さんの質問に俺は使えたらなんでもいいけどな、と付け足す。勿論、プロのISS操縦者ならば「このISSスーツが一番自分に合う」ってモデルでもあるんだろうが、素人の意見としては何を使おうが同じだ。操作性が劇的に変わるような大きな違いがあるとは思えない

「ISSスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することで操縦者の動きをダイレクトに各部位へ伝達、ISSはそこで必要な動きを行います。またスーツは耐久性にも優れており、小口径の拳銃の弾丸程度なら完全に受け止めることが出来るのです」

すらすらとISSスーツについての説明をしながら副担任の山田先生が現れる。それに感心した生徒達は次々に先生を褒め称えるのだが……流石に先生を侮りすぎだと思ふのは俺だけだろうか。山田先生は凄いなぞ、補習に行けば大抵のことは分かりやすく教えてくれるんだからな

「諸君、おはよう」

「「「お、おはようございませう！」「」」

談話に盛り上がっていた教室が水を打ったかのように静まり返る。現れたのはこのクラスの担任、織斑千冬その人だ。因みにその服装は以前俺が渡しておいた夏用のスーツに変わっている。六月は時々予想以上に気温が上がる日もある季節だ、過ごしやすい

服装でと思つて用意しておいたが……あの様子だとお気に召してくれたらしい。良かった良かった

「今日からは訓練機を用いた本格的な実戦訓練を始める。各人気を引き締めていけ。ISスーツは個人の物が届くまでは学校指定の物を使う。忘れた場合は水着で、それすらない者は下着で訓練を受けてもらうぞ」

相変わらずおつかねえなあ、この人は。まあいいか、俺はもう制服の下にISスーツを着込むことが癖になっているから、忘れるようなことは万が一にもないしな

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はい！えつとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名も！」

……

……

……はい？

「「「ええええええええええつ!?」「」」」



突然の転校生が来るという知らせにざわめいた教室が落ち着くまで、思っていたより

も時間が掛かってしまった。そりゃいきなりこのクラスに転校生が、しかも二人も来るとなれば驚くのも無理はない……が、俺としては教卓の辺りで青筋を浮かべる千冬姉の方が怖かった。何せ、被害を受けるとすれば一番教卓に近い俺からだろうし

ていうか、なんで一つのクラスに二人も？多分鈴の時と同じように、俺という男性操縦者の登場に慌てた各国が、代表候補生を無理矢理転校という形で送り込んだんだろう。でもそれなら一つのクラスに集める必要はない筈。俺は教室の中で一人、首を傾げた

「よし、入れ」

千冬姉の声にガラリと教室の扉が開く。そこから入って来たのは当然だが、二人の少女だ

一人は金髪をうなじの辺りで括った中性的な顔付きの少女である。アメジストの瞳が照明によってキラリと光る。浮かべられた柔和な表情からきつと穏やかな性格なんだろうと推測出来た

そしてもう一人は金髪とは正反対の険しい表情をした茶髪の少女だ。あまり手入れされていない短髪に鋭いナイフのような雰囲気は、どこか狼のような肉食の野性動物を彷彿させる。そして何より特徴的なのは、やはり左目に付けられた真つ黒の眼帯だろう。医療用だとかそんなもんじゃない、映画の軍人が付けていそうな紛れもない本物だ

ていうか流行ってるのかね、ズボン。別に女の子はズボン禁止なんて言うつもりはないが、転校生が揃いも揃ってズボン装備とは。そもそも金髪の制服って俺と同じ男子の制服じゃねえか。容姿と服装から感じるちぐはぐ感に俺は目を細めた

「デュノアから挨拶しろ」

千冬姉のその言葉に金髪が答える。容姿に似合うやや高めの声だ。そして彼女はその場から一歩前に踏み出し、ペコリと控えめに頭を下げて簡単に自己紹介をした

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。不馴れなことも多々ありますが、皆さん宜しく願います」

……シャルル・デュノア、ね。フランス生まれの第二世代機、ラファール・リヴァイヴの製造元が確か……デュノア社？ だったような記憶がある。確信は出来ないがそこと何かしらの関係があると見ても良さそうだ

「お……男？」

……は？

ポツリ、と

静まり返った教室に誰かの眩きが木霊した。その眩きに対し、デュノアはにこりと柔らかな笑みを浮かべる

「はい、此方に僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を——」

……待て。こいつは……違う、お前達は何を言っているんだ？ 訳が分からずに一人混乱する俺。しかしそんな俺を置き去りにして、教室からは歓喜の声がどつと沸いた

「「「「きゃああああああああああ!!」」」」

「男子！しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の美形よ！」

「生きてて良かった〜！」

立て続けに響く生徒達の黄色い悲鳴に俺は思わず耳を塞いだ。ビリビリと教室中が震えているような、そんな錯覚すら覚える程だ。だがそんなことはどうでもいい、俺の頭の中は全く別のことでいっぱいになっていた

「(男……!?!デュノアが？嘘だろ、こいつは、女じゃないのか?)」

思わず立ち上がりたくなるのを抑えながら、俺は目の前に立つデュノアを怪しまれないう程度に観察する。中性的、と表現した顔付きは男か女かの二択ならば間違いない女。

しかもかなりの美形でこんな男が存在するのかどうかすら怪しいレベルだ。また身長も千冬姉より低く160センチあるかないか、いずれにせよ高校一年生の男子にしてはかなり小さい。俺だって平均身長よりも少し上程度でずば抜けて高いという訳ではないが、それでも172センチはあるのだ

「(とういかそもそも——)」

世界で二番目の男性操縦者が見つかったなんて話、俺は聞いたことがない。テレビやネットのニュースには可能な限り目を通していたが、デユノアのことは全く話題になっていなかった筈だ。男性操縦者の発見という、世界を震撼させるような事柄が欠片もないのは流石におかしい。それに俺一人が知らなかったのならまだしも、クラスメイト全員が知らなかったということも引つ掛かる

気になるところは他にもある。デユノアの胸には女子特有の膨らみとかは見当たらないが、男つてのはもつとがさつでいい加減な生き物だ。あんな髪の毛はサラサラではないし肌だって当然奴ほど手入れされていない。声だってソプラノ声であり、男にしては高すぎる感じが否めないのも一つある。それともなんだ、外国ではこれが普通で奴のような美形が高校にうじゃうじゃいるとでもいうのか？はつきり言って、疑問が尽きない

無論、これ等の疑問が全て俺の考えすぎであり、奴が本当に男であるという可能性も否定出来ない。だが、弾のような真正正銘の男と比べると感じる違和感が多すぎるのだ。シャルル・デュノア、お前は怪しすぎる。とてもじゃないが俺はこいつを信用するところが出来そうになかった。暫くは様子を伺っていた方が良さそうだ

「静かにしろ、まだもう一人残っているぞ」

心底面倒くさそうにぼやく千冬姉。続くように山田先生の声も響き、俺達の視線はもう一人の転校生へと向かった

「……」

「……レベツカ、挨拶をやれ」

「はい、教官」

ビシッと、お手本のような敬礼に千冬姉以外の全員が呆気に取られる。なんだこいつ、というのが俺達の総意だった。千冬姉の知り合いのようだが……教官つてことはもしやドイツ軍関係者か？ならばボー・デヴィツヒとも面識があることになる……のか？

「織斑先生と呼べ。ここではお前はただの一般生徒で私もただの教師に過ぎん」

「はい、失礼しました織斑先生」

どうやら二人の話は終わったようだ。レベツカと呼ばれた転校生はくるつと此方へ

顔を向け、そして感心するくらいに堂々と名前《だけを》宣言した

「レベッカ・カウフマンだ」

「……終わり!?」

さつと口を閉ざしてしまった転校生、レベッカ・カウフマンに訴えるような視線が集まるが、本人は知らぬ顔をして教室内を見回し始めた。いや、マジでなんだこいつは。彼女の隣を見れば山田先生が涙目になってオロオロとしており、千冬姉も呆れたように溜め息をついている。もう一人の転校生、デュノアもまた困惑したように曖昧な笑いを浮かべていた。先程とは一転してなんとも気まずい空気が広がる

そして、それを破ったのはレベッカ・カウフマン本人だった

「っ！貴様か！」

「え、ちよ、何——」

さて、ここで問題だ。少女とはいえ軍人——しかも恐らく現役——に、その辺に巨万ごまんというようなただの男子高校生がぶん殴られた場合、果たしてどうなるだろうか？

答えは簡単——ふっ飛ぶ

「がっ!?!」

突然顔を怒りに染めた奴の拳が俺の左頬に突き刺さる。押し寄せる痛みと衝撃に思考が停止し、勢いのままに座っていた椅子から投げ出されて無様にも床を転がった。派手な音と共に転がる俺は隣の机にぶつかって止まったが、背中を強打したことで更なる痛みに襲われる

「がは……………」

肺から酸素が吐き出され口の中に鉄の味が広がった。どうやら今ので口の中を切ったらしい…………畜生、滅茶苦茶痛え。霞む視界の中でなんとか顔を上げれば、そこにはゴミを見るような右目で俺を見下すレベッカ・カウフマンの姿が。絶対零度の眼光が此方を貫くようにギラリと光る

「認めんぞ…………貴様のようなゴミが教官の弟などと、私は断じて認めん!」

「…………けっ。出会い頭に人を殴るなんざ、いいご身分だなおい。てめえの教官とやらは、初めて出会った奴には挨拶としてその頬を殴れとでも教えたのか?このじやがいも女」

中学時代に何千、何万と聞いた言葉に苛立ちが積もる。てめえが俺を認めねえなんてのは好きにすればいい。だがそれだけの勝手な理由で殴られてちや、此方は堪ったもん

じゃねえんだよ

俺はぐつと力を入れ、机を支えにしながらもなんとか立ち上がった。そしてすぐにレベッカ・カウフマンを睨み付ける。本物の軍人がこの程度で動じるとは思わないが、それでも睨まなければ此方もやつてられないのだ。しかし奴は鼻で笑うとすぐさま俺の隣を通り過ぎ、一人の生徒の前で立ち止まった

「貴様もここにいたのか、出来損ないの屑が」

「……カウフマン」

そいつは——ボーデヴィツヒはレベッカ・カウフマンの名前を苦々しく呟いた。やはり知り合いだったのか。関係はかなり悪いようだが……

「いずれ貴様は私の手で始末してやる。教官の教えを無下にし、自らの使命すら全う出来ないような輩は、この私が直々に手を下してやろう」

「ふん、一般生徒が偉そうな口を叩くものだな。今のお前は黒シユヴァルツェ、兎ハーゼ隊の隊長ではない

と、先程織斑先生に言われたことすら忘れたか？ 誇り高きドイツ軍人が聞いて呆れる」
「なんだと……！」

珍しいボーデヴィツヒの挑発的な発言にレベッカ・カウフマンが声を荒らげた。二人の間に険悪な空気が生まれる……が、直後にパンパンと乾いた音が教室中に響き渡った。全員の視線が音を出した人物——千冬姉に集まる

「HRはこれで終わりだ。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合だ。今日は二組と合同で行うぞ。織斑はデュノアの面倒を見てやれ。それでは解散！」

お姉様よ、俺が殴られたことはノータッチですか。俺だつて千冬姉の生徒だろうに……はあ。まあいいや、とりあえず今はさつきと更衣室に急がなければ社会的に死ぬことになる。それはごめんだ

「えつと、君が織斑君だね。僕は——」

「すまん、挨拶は後にしよう。女子が着替え始めるからな。急ぐぞ」

デュノアの手を取り教室を出る。その手がやけに細いように思われたのは流石に気にしすぎだろうか。というか、今になつて殴られた頬が痛んできた。くそつたれ、あのじゃがいも女が……！

「あ……あの、織斑君？」

「ああ、悪い。とりあえず今からは空いてる更衣室で着替えだ。実習の度に忙しくなるが……馴れるしかねえな」

「う、うん」

苛立ちの余り、やや乱暴に説明をしながら結構な速度で足を動かし、階段を下つて一階へと辿り着く。そしてそのままアリーナへと向かおうとして——目の前に現れた女子生徒の群れに舌打ちが飛び出た

「ああつ！転校生発見よ！」

「金髪！金髪の男の子！」

「面倒な……！デュノア、此方だ！」

「え！ちよつと!?!」

ああもう畜生が！授業前にも関わらず追い掛けて来やがって……常識ねえのかよあいつらは！デュノアの手を引きながら右へ左へ、ほとんど全力疾走で駆け抜け目的地を
目指す

「ちよつと！アンタ転校生から手を離しなさいよ！」

「何手握ってんのよ！ありえないわ！離しなさいこの面汚し！」

後ろから訳の分からない怒声が聞こえるが気にしてる余裕は皆無だ……が、腹が立つことには違いない。どいつもこいつも好き勝手言いやがって。いつそ、デュノアを囮にして走り去ってやろうか？

「な、何？なんで皆騒いでるの？」

……こいつはこいつで何を言っているんだ。そんなの決まってるだろうが

「女しかないない学園に新しい男が現れたからだろ。ついでに、俺がそいつといるのが気に食わないだろうよ！」

「気に食わないって……なんで？」

「ああそれは……つと、見えたぞ。ゴールだ」

鬼ごっこはなんとか俺の勝ちだ。素早くアリーナの更衣室に逃げ込み、俺とデユノアはゆっくりと息を整えた。くそ、朝っぱらから走らせやがって……朝食が腹の中でシエイクされてかなり気持ち悪い。追い掛けて来た連中全員授業に遅刻してりやいんだ。内心で悪態をつくが、しかし俺達ものんびりしている余裕はないらしい。俺は時計を確認して本日何度目かとなる舌打ちをする。額に滲む汗を拭い、邪魔な制服をバツと脱ぎ捨てたそんな時——後ろから気の抜けた悲鳴が上がった

「うわあ!」

「……なんだよ?早く着替えねえと遅刻すんぞ?」

「う……うん。着替える、着替えるよ……」

……着替えごときで普通ここまで動揺するか?なんでもいいが、頼むからあんまり変なことをしないでくれ。不信感が募るんだよ。全く落ち着かねえ……

制服の下にスーツを着ていたお陰で俺の着替えは一分程で終わった。それはシャルルも同じだったようで、なんとか俺達は授業に間に合うことが出来た。千冬姉のお叱りを回避出来たのは良かった……が、やはりシャルル・デユノアに対する不信感だけはどうにも拭えそうになかった